

太閤

尾池義雄著



興亞書院



始



特231
986



尾池義雄著



東京亞細亞書院刊行

敘 四 章

わが豊太閤は今古國人の尊崇を絶たざるところであるが傳を立つるもの數十家、類傳數十百卷に及ぶも、然かも多くは傳奇的にして、彼れの眞面を傳へたものは稀れである。著者はこれを甚だ遺憾に思ひ、往年、主として古文書古記録等、一に根本史料に據つてその眞面を窺ふに努め、『豊太閤』と題して、その出生より關白就任までを執筆し、これを公刊して世に問うたが、爾來太閤をいふものまゝ、鄙説に據ることを聞き、それより續いて研究を怠らず、今に至つて殆ど二十年ならんとする。しかしこの頃漸く全部を撰することを得たれば、こゝに既刊のものを絶版して、その書のうちより取るべきを取つて後の研究と合はせ、まとめて以て一冊子とした。本書がすなはちそれである。

◇
從來、太閤の傳を立つるもの、稗史小説以外は多くは彼れが幼年時より飛んで、播州出師に移るを常とする。従つて彼れが青年時における行事に、如何なる背景を負うたかを知るものは稀れである。こゝにおいて著者は今編年體と記事本末體との折衷に由つて播州出師以前の行事と背景とを記した。その主として信長の行事の如くなつたは、背景描寫の方法上、已むを得なかつたものである。なほ播州出師以後に在つては、凡て記事本末體を採用したれば、事の前後するところあれど、これ亦記事本末體に免かれざるところである。

書中の人名、通稱、偏諱、或は雅號を混用し、必ずしも一定しなかつた。けだし世人の耳に熟せる稱呼に従はんとしたがためである。

参考引用の書は一千五百餘卷に上つた。その主なるもの一千餘卷を書後に掲げて、後の學ぶもの、捜査の便に供しやう。學者はこれに由つて更に研究せられなば、著者の遺したる珠玉はその中より轉出し、太閤の眞面いよく發露しやう。著者の志はこゝに至つて始めて酬いらる。本書を以て決して完璧となすものではない。

著者

目次

一 英雄は光明の源泉……………	一
二 太閤の誕生(上)……………	四
三 太閤の誕生(下)……………	六
四 素姓についての異説(上)……………	八
五 素姓についての異説(下)……………	一〇
六 松下氏に拾はる……………	三
七 幼時についての俗説……………	一五
八 信長に仕ふ……………	一七
九 信長に奉仕の異説……………	一八
一〇 時代の一顧……………	元
一一 少時の信長……………	三
一二 大に土豪を用ふ……………	三
一三 信長、將軍を擁す……………	七
一四 大河内城攻落……………	元

一五 手筒山城を抜く……………三
 一六 姉川の快戦(一)……………三
 一七 姉川の快戦(二)……………三
 一八 姉川の快戦(三)……………三
 一九 三好の再叛……………四
 二〇 再び浅井朝倉と對陣……………四
 二一 長島の亂……………四
 二二 叡山燔燒……………四
 二三 幕府及び浅井朝倉の敗亡(一)……………四
 二四 幕府及び浅井朝倉の敗亡(二)……………五
 二五 幕府及び浅井朝倉の敗亡(三)……………五
 二六 幕府及び浅井朝倉の敗亡(四)……………五
 二七 長島の變殺……………五
 二八 長篠の血戦(一)……………六
 二九 長篠の血戦(二)……………六
 三〇 長篠の血戦(三)……………六
 三一 北陸の亂……………六

三二 本願寺を伐つ……………六
 三三 雜賀の亂……………七
 三四 松永久秀の叛……………七
 三五 播州出陣……………七
 三六 中國管領……………七
 三七 上月城攻陥……………八
 三八 上月の對陣(上)……………八
 三九 上月の對陣(下)……………八
 四〇 三木城攻圍(一)……………八
 四一 三木城攻圍(二)……………九
 四二 三木城攻圍(三)……………九
 四三 三木城攻圍(四)……………九
 四四 宇喜多直家を招降す……………九
 四五 荒木村重の叛(上)……………九
 四六 荒木村重の叛(下)……………九
 四七 本願寺と和す……………一〇
 四八 鳥取城攻陥……………一〇

四九	高松城水攻(上)	一〇九
五〇	高松城水攻(中)	一一一
五一	高松城水攻(下)	一一五
五二	講和に關する繆説(上)	一二八
五三	講和に關する繆説(中)	一三三
五四	講和に關する繆説(下)	一三三
五五	本能寺の變	一二六
五六	山崎の決戦(一)	一二八
五七	山崎の決戦(二)	一三三
五八	山崎の決戦(三)	一三五
五九	山崎の決戦(四)	一三九
六〇	三法師を擁す(上)	一四〇
六一	三法師を擁す(下)	一四〇
六二	亡主の法會	一五三
六三	柳瀬の大捷(一)	一五三
六四	柳瀬の大捷(二)	一五五
六五	柳瀬の大捷(三)	一五九

六六	柳瀬の大捷(四)	一六二
六七	大阪城と聚樂第	一六四
六八	小牧の對陣(一)	一六六
六九	小牧の對陣(二)	一六九
七〇	小牧の對陣(三)	一七三
七一	小牧の對陣(四)	一七四
七二	小牧の對陣(五)	一七九
七三	家康と和す(一)	一八二
七四	家康と和す(二)	一八四
七五	家康と和す(三)	一八七
七六	家康と和す(四)	一九〇
七七	家康と和す(五)	一九三
七八	南海北陸征伐	一九六
七九	長秀の死と削封	二〇一
八〇	關白職	二〇五
八一	諸將任官	二〇八
八二	豊臣内閣(上)	二一〇

八三	豊臣内閣(中).....	二六三
八四	豊臣内閣(下).....	二六六
八五	大佛造營.....	二六八
八六	九州の役(一).....	二七一
八七	九州の役(二).....	二七四
八八	九州の役(三).....	二七七
八九	九州の役(四).....	二八〇
九〇	九州の役(五).....	二八三
九一	九州の役(六).....	二八六
九二	九州の役(七).....	二八九
九三	北野の茶會.....	二九二
九四	基督教を禁ず(上).....	二九五
九五	基督教を禁ず(下).....	二九七
九六	聚樂の宴(一).....	二九八
九七	聚樂の宴(二).....	三〇〇
九八	聚樂の宴(三).....	三〇二
九九	聚樂の宴(四).....	三〇四

一〇〇	佐々成政を誅す(上).....	二六六
一〇一	佐々成政を誅す(下).....	二六九
一〇二	貨幣を改鑄す.....	二七二
一〇三	北條を征す(一).....	二七四
一〇四	北條を征す(二).....	二七七
一〇五	北條を征す(三).....	二七九
一〇六	北條を征す(四).....	二八二
一〇七	北條を征す(五).....	二八六
一〇八	北條を征す(六).....	二八八
一〇九	北條を征す(七).....	二九〇
一一〇	北條を征す(八).....	二九三
一一一	北條を征す(九).....	二九六
一二二	北條を征す(一〇).....	二九九
一二三	北條を征す(一一).....	三〇二
一二四	北條を征す(一二).....	三〇六
一二五	奥州 下向(上).....	三〇八
一二六	奥州 下向(下).....	三一

一一七	氏郷を會津に封ず	三五
一一八	家康を江戸に移す	三七
一一九	信雄を秋田に流す	三二
一二〇	堀秀政の死	三四
一二一	松下之綱を移す	三七
一二二	奥州の亂(一)	三九
一二三	奥州の亂(二)	三一
一二四	奥州の亂(三)	三四
一二五	奥州の亂(四)	三七
一二六	千宗易を誅す	三四〇
一二七	南方經略(一)	三四三
一二八	南方經略(二)	三四四
一二九	南方經略(三)	三四七
一三〇	南方經略(四)	三五〇
一三一	南方經略(五)	三五三
一三二	南方經略(六)	三五六
一三三	秀長と鶴松の死	三五九

一三四	關白職を秀次に讓る	三五二
一三五	前大陸遠征(一)……大陸遠征の端	三六四
一三六	前大陸遠征(二)……太閤名古屋に下る	三六九
一三七	前大陸遠征(三)……釜山占領	三七八
一三八	前大陸遠征(四)……忠州占領	三八一
一三九	前大陸遠征(五)……京城占領	三八四
一四〇	前大陸遠征(六)……秀次に出征を命ず	三六七
一四一	前大陸遠征(七)……三成の親征縱與	三九一
一四二	前大陸遠征(八)……平壤占領(上)	三九三
一四三	前大陸遠征(九)……平壤占領(下)	三九六
一四四	前大陸遠征(一〇)……清正の北行(上)	三九九
一四五	前大陸遠征(一一)……清正の北行(中)	四〇二
一四六	前大陸遠征(一二)……清正の北行(下)	四〇四
一四七	前大陸遠征(一三)……海上の敗戦	四〇七
一四八	前大陸遠征(一四)……明軍の出援(上)	四一一
一四九	前大陸遠征(一五)……明軍の出援(下)	四一四
一五〇	前大陸遠征(一六)……平壤の大敗	四一七

一五一	前大陸遠征(一七)……碧蹄館の大勝……………	四九
一五二	前大陸遠征(一八)……諸道の情勢(上)……………	四三
一五三	前大陸遠征(一九)……諸道の情勢(下)……………	四五
一五四	前大陸遠征(二〇)……京城引揚……………	四九
一五五	前大陸遠征(二一)……明軍入京……………	四二
一五六	前大陸遠征(二二)……明使迎送(一)……………	四四
一五七	前大陸遠征(二三)……明使迎送(二)……………	四六
一五八	前大陸遠征(二四)……明使迎送(三)……………	四九
一五九	前大陸遠征(二五)……明使迎送(四)……………	四一
一六〇	前大陸遠征(二六)……明使迎送(五)……………	四五
一六一	前大陸遠征(二七)……晉州城鏖戦(上)……………	四八
一六二	前大陸遠征(二八)……晉州城鏖戦(下)……………	五一
一六三	前大陸遠征(二九)……明廷の紛論……………	四四
一六四	前大陸遠征(三〇)……屈辱講和締結……………	四七
一六五	前大陸遠征(三一)……太閤再び親征を叫ぶ……………	四六
一六六	前大陸遠征(三二)……豪僧清正を誘ふ(上)……………	四三
一六七	前大陸遠征(三三)……豪僧清正を誘ふ(下)……………	四五

一六八	前大陸遠征(三四)……行長の懊惱……………	四七〇
一六九	前大陸遠征(三五)……冊封使渡來……………	四四
一七〇	前大陸遠征(三六)……鮮使を拒斥す……………	四七
一七一	前大陸遠征(三七)……明使を逐ふ(一)……………	四九
一七二	前大陸遠征(三八)……明使を逐ふ(二)……………	四一
一七三	前大陸遠征(三九)……明使を逐ふ(三)……………	四八
一七四	前大陸遠征(四〇)……明使を逐ふ(四)……………	四八
一七五	前大陸遠征(四一)……明使を逐ふ(五)……………	四九
一七六	前大陸遠征(四二)……明使を逐ふ(六)……………	四五
一七七	前大陸遠征(四三)……朝鮮震恐、明論鼎沸……………	四七
一七八	大政所の他界……………	五〇〇
一七九	秀頼の誕生……………	五〇四
一八〇	伏見に城く(上)……………	五〇八
一八一	伏見に城く(下)……………	五〇
一八二	吉野の遊……………	五三
一八三	高野詣……………	五六
一八四	氏郷の逝去……………	五八

一八五 學國檢地を命ず(上).....五二
 一八六 學國檢地を命ず(下).....五四
 一八七 秀次を廢す(一).....五七
 一八八 秀次を廢す(二).....五〇
 一八九 秀次を廢す(三).....五四
 一九〇 秀次を廢す(四).....五三
 一九一 秀次を廢す(五).....五四
 一九二 秀次を廢す(六).....五三
 一九三 秩序維持に力む(上).....五四
 一九四 秩序維持に力む(下).....五四
 一九五 大地震の夜(上).....五五
 一九六 大地震の夜(下).....五五
 一九七 後大陸遠征(一) 總軍の進發(上).....五七
 一九八 後大陸遠征(二) 總軍の進發(下).....五三
 一九九 後大陸遠征(三) 南原城攻陷.....五七
 二〇〇 後大陸遠征(四) 我軍轉戰、明軍南下.....五七
 二〇一 後大陸遠征(五) 蔚山籠城(上).....五三

二〇二 後大陸遠征(六) 蔚山籠城(下).....五七
 二〇三 後大陸遠征(七) 明軍退却諸將召還.....五九
 二〇四 後大陸遠征(八) 閑山島の大捷(上).....五八
 二〇五 後大陸遠征(九) 閑山島の大捷(下).....五八
 二〇六 後大陸遠征(一〇) 明軍の再下.....五八
 二〇七 後大陸遠征(一一) 順天・蔚山・泗川の捷.....五九
 二〇八 後大陸遠征(一二) 講和.....五九
 二〇九 後大陸遠征(一三) 班師.....五九
 二一〇 後大陸遠征(一四) 賞罰一顧.....五九
 二一一 隆景薨す.....六一
 二一二 景勝を會津に封ず.....六〇
 二一三 翻 翻 の 遊.....六〇
 二一四 太閤の大漸(一).....六〇
 二一五 太閤の大漸(二).....六二
 二一六 太閤の大漸(三).....六五
 二一七 薨 去.....六八

太閣

附錄

豐太閣系譜	六三
豐太閣年表要略	六三
引用及參考書一覽	六五

目次

一 英雄は光明の源泉

コンコオドの哲人はナポレオンを評して曰つた「十九世紀における著名な人物中、ナポレオンの如きは、拔群の出世であつて、最もよく世に知られ、且つ最も有力な人間であつた。しかもその卓抜な權勢を得たわけは、幾千萬の人々の思想信仰を着實に代表したからである」とエマアソンのこの短き論評は、古來輩出の幾多英雄に對する動かすべからざる鐵論である。ナポレオン自身でさへ曰つてゐるやうに、英雄はみな民衆の意を以て意とし、時代の潮流に棹さすのである。そしてそれをつゞけたものが成功し、それに逆つたものが倒れるのである。

わが太閤が英雄であつたことは、いふまでもない。しかも、それが秦皇や漢武や、シーザーやナポレオンに匹敵される大英雄であつたことは、多くを論ずるをもちゐない。頼山陽は嘗つて曰つた「太閤をして女眞鞑鞫の間に生れさせ、これに假すに年を以てしたら、朱明の國を覆したものは愛親覺羅氏ではなかつたらう。その人となりは甚しく秦皇・漢武に似て雄才大略は遠くその右に出てる。漢武は國富み財ゆたかな漢の盛時に乗じて、宇内を駕馭したものである。必ずしも論ぜずともよい。秦皇もまた六代にわたつて積み來つた威力を挾んで衰殘の小國を蹶ちらしたのである。それ等は太閤が徒手奮起して、以て群雄を征服したことに比せば、いふに足らない。」と、まことにその通りである。太閤をして、もし滿洲の野に生れさせたら、南下して朱明を征服するばかりでなく、安南、印度、南洋諸島から、西はヨオロッパの諸國に至るまで、これを掌中にしたか知れない。もしまた歐洲に生れ

させたら、その戦績はシーザーの上に出で、その覇業はナポレオンを凌駕し、世界史上、空前の鴻業を遺したかも知れない。實にその勇はシーザーに勝り、その智はナポレオンを超えてゐた。

だが、太閤とて、それはまた時代の兒たるに過ぎなかつたものである。グロムエルやナポレオンがブルジョア文明の産兒であつたやうに、太閤もまたそれに外ならなかつたのである。足利氏の中期（正長元年秋）に土一揆が初めてあつた、それは既に商業資本制度が発生してゐたことを物語るものではないか。爾來百六十年、太閤が天下を一統するまでに、商業の發達は著しきものがあつた。太閤はこの商業資本主義の間に生れ、この制度の助長者であつた。彼れはブルジョア英雄の最なるものである。

われらはブルジョア文明を謳歌するものではない。われらはブルジョア英雄を讚美するものでもない。だが、それを史的過程における一産物として正視するとき、英雄には英雄たるの見逃しがたきものがある。それはカーライルのいはゆる天授獨創の活眼である、光明の源泉である。英雄は時代の兒である。決して過褒に値すべきものではない。だが、その獨創であり光明であるところに、英雄に對する崇敬があるのである。そこにはブルジョア英雄たるの故を以て忌むべき何者もない。それがアリストクラットであらうが、プロレタリアであらうが、たゞ偉大なる人として瞻仰されるのである。崇拜されるのである。ムッソリーニであらうが、ヒトラーであらうが、たゞそれえらいといつて景仰されるのではないか。それはヒトラーの何ものでもない、ムッソリーニの何ものでもない。その獨創である。その光明である。これが崇敬の標的であるのである。けだし英雄崇拜は人類の通性だ。太閤が

四百年の後、なほ國人中にその尊崇者を多分に有する所以のものは、かの標的が古來の何ものよりもよりよく燦然として輝いてゐるからである。それはフランスにおけるナポレオンの今なほ民衆をチャームしてゐるが如く國人をチャームしてゐる。史上の人は過去の人である。ブルジョア英雄たるの故を以てこれを排斥してはいけない。其人から何ものかを學び得ることに於いて、敬意を表しなければならぬ。徒に殺人鬼と稱して武人的英雄を貶する者は、その時代を知らざる三品奴である。

二 太閤の誕生 (一)

天日が赫々として東天に昇るありさまを見てみると、それはいかにも大空にかゝれる雄大な文章である。また怒濤が天を蹴つて大洋に起つてをるところを見ると、これまた洋上の一大奇文である。英雄が天下に起つたときには天日や怒濤のごとくに雄文奇文を地上に投げる。そればかりではない、大空も地上も文ならざるはなく、そしてこれを統べて織成するものは實に英雄である。英雄は筆を以てせず、行を以てする一大文章家だ。

それはもう四百年にもならう。豊太閤は天文丁酉六年を以て尾張國愛知郡中村に誕生した。賤が伏屋の産舎うぶやにおける、弄璋の慶はどんなであつたらう。紛々たる異説は、たやすく信することはできない。父を木下彌右衛門といつた。彌右衛門はもと中中村のものであつたが、出で、織田備後守信秀に仕へた。足輕といふ卑しい身分ではあつたが、戦功は少くなかつた。けれどもこの戦でのことであつたか、ある戦場で重傷を被り、それを最後にして仕を辭して故郷に歸り、そして農業に従事するこ

ととなり、その間に嫁をとつて一男一女を擧げたが、二人の子女がまだ幼かつた時に病んで死んだのである。そしてその一女といふのは長じて三好武藏守(後の武藏法印)に嫁し、關白秀次、丹波少將秀勝、辰千代丸の三子を生んだが、實に太閤の實姉である。またその一男は誰れあらう、豊太閤その人であつた。太閤の母はその名を傳へてをらぬが、中村の鄰村である御器所といふところに生れ、妙齡にして彌右衛門に嫁いたが、彌右衛門は前敍のとほり足輕の身分であり、しかも後には不具の身となつて祿に離れ、水呑百姓で辛くもその日を送つてゐたのであつたから、太閤のお袋すなはち後の大政所は、その當時幼弱な一女と一男を遺して、彌右衛門に先だゝれてからは、或る時は洗濯婆さんとなり、或る時は草かりなどに雇はれつゝ、子女を育てゝゐた。ところでそのあまりにみじめな生活に村のものが同情して、入婿を世話してくれた。これがまた中中村のもので竹阿彌といひ、信長の父なる信秀の童坊であつたものである。この竹阿彌もまた或る時病氣で織田家を退き彌右衛門の鄰家に棲んで、かねてから彌右衛門の家と往來してゐたものである。太閤のお袋は右の竹阿彌を入れてまた一男一女を生んだ。その男の方は後に羽柴美濃守大和納言となり、女は長じて佐治某に嫁してゐたが小牧の役の和解で家康に入興して三年目に死んだ。この兩人が太閤の異父弟異父妹である。

豊太閤は幼名を何といつたか、はつきりしない。村のものは猿といつてゐたといふことである。太閤のお袋は太閤を懐胎したとき日輪が、その懐に入つたと夢みたといふことであるが、それは固より誕言であつて取るに足らないことである。が然しかゝる傳説は全然根據のないことではない、その宣傳の本家本元は太閤自身であつた。太閤が禁裡に參内して天顏に咫尺する毎に施藥院で衣を更めたが、

或る日禁闕を退いてそこに憩うたとき、公卿の誰れ彼れと茶をすゝつての話に『わしは尾張の草澤から出たもので、鎌や鋤のことは知つてをるが、筆硯のことはつひぞ知らない、もとより詩歌の才もある譯ではなくして、かやうに禁闕に上る光榮の身となつた、但し自分の母は會て内裡の内庖に婢となつて、御奉公をしてゐたものである、そして或る夜圖らず寢殿に侍つたが、その夜の夢に萬千の被函が天を飛翔し、伊勢から播磨に至つた。また同時に『千早振神のみてぐら手に取りて』と夢みたが、その時わしを懐胎したのである』と吹き立てゝをる。また祐筆に記させていふには「秀吉の祖父は禁闕に侍したが、萩中納言といふものであつた。その中納言は秀吉の母が三歳のとき、讒言を被つて配流の身となり、尾州の飛保村雲に謫居した。その後母が長じて上洛して、内裡に奉仕し三年程にして國に歸つたが、數月の後一子を生んだ、それが關白秀吉公である。果して孩童の比から幻怪奇異のことを極めてゐた。どうして王子でなくてさやうに俊傑の士となることができよう」と。

三 太閤の誕生 (一)

また明使に對してもいうてをる。予が慈母は予を懐胎した時、日輪が胎中に入つた夢をみた、そこでびつくりして占ひ者について卜はせたところ、天には二日無し、徳輝、四海に彌るの喜瑞であるといつた。それゆゑ予は壯年に及んで夙夜に世を憂へ、國を憂へ再び聖明を神代に復し威名を萬代に遺さうと思ひ、わづかに十有一年の間に凶徒姦黨を族滅した、そして城は攻めて抜かざるなく、敵陣は廢せざるなく、乖く心を有するものは自然と消え亡せてしまつた。今日では國家富強、民人處を得て

ゐる有様で、會心の事業遂げざるはない次第である。このことは實に予の力ではなく、天から授かつたものである。とまた高山國國に與ふる書や、ヒリッピン總督に寄せた書にも、かゝる夢想を詳記してゐる。太閤がかくしばしば夢想を公言したのは、今から見れば馬鹿げた事ではあるが、人智蒙昧の當時にあつては、英雄のよくやる一種の人心收攬術であつたらう。元龜天正のころは、皇室の式微はその極に達し、藩屏たるべき公卿はいづれも貧乏で、みな虚位を擁してゐるに過ぎなかつたが、皇室は申すも畏し、源平藤橘もなほ誇るところあつた。それは格式の嚴乎として人の侵すを容さないことである。太閤が一躍して政權を握ると、その威重は海内を壓したといふものゝ、それは一箇の成り上りだ。いかに威壓を加へても、どうすることもできなかつたのは、この格式といふものである。太閤が天子の落胤だなど、不敬なことまでいつて、日輪談を振回したのも、實はかの公卿が獨占してゐる格式を奪はうとする伏線で、他にはまた人心收攬の手段でもあつた。

昔は支那では陳涉が兵を擧げたとき、先づ『陳涉王たらん』といつた丹書をつくりそれを魚の腹中に入れおき、烹て食つてそれを取り出し、或は狐の鳴き聲をして『大楚興らん陳涉王たらん』など、呼ばはらせて、衆人を驚きおそれさせた。また漢の高祖が蹶起しようとしたとき、或る老父があつて高祖の人相をみて、いかにも貴人であるといつたと稱し、老嫗が白帝の子高祖が赤帝の子高祖に斬られたといつて哭いたといひ、ことさらに山澤巖石の間に隠れ、呂后にさがさせて季高祖の居るところの上に、常に雲氣がある、ついでいつて見ることができた。などとでたらめをいはせてゐる。これ等は人心の幼稚な時代における一種の收攬術である。太閤が日輪懷に入つて生れたとか、天子の落胤だなど

と宣傳したのは、陳涉や高祖の故智にならつたものであらうか。けだし恐らくは英雄通有の思想であり、共通の手段であつたらう。

四 素性についての異説 (一)

太閤の素性はなか／＼にわからない。それはたとへば荆棘の道である。だが筆者はこれからできるだけ切りひらいて坦道をつくつてみよう。

太閤の素性を記せるものは、正史實録から小説軍談に至るまで數百部をかぞへるが、それを集めて別つと四類に分る。曰く竹阿彌の子である。曰く野合の子であつて生父を知らない。曰く天子の胤である。曰く木下彌右衛門の子である。とそしてその一は祖父物語、甫庵太閤記に根元し、その二は根據なく漫然として傳はり、その三は秀吉事記、戴恩記に根元し、その四は太閤素性記を根本とするものである。わたしは素性記のいふところを正しと信ずる。そのわけを述べて他のあやまりを正してみよう。

祖父物語は成書の年月が詳でないが、文中に宇喜多秀家配流のことが記されてあるから、慶長八年以後の作たることは明かである。しかも信長が永祿四年の畿内微行を訛傳して、少時順禮となつて大阪天王寺に至り、士人に信長の二字を請うたなど、全然虚説を記したものであつて、もとより一顧の價値なき史料である。それゆゑ太閤の事を記しては、父は尾州狭間村のもので竹阿彌といひ、信長の同朋であつた。太閤は申年の六月十五日に清洲の水野郷戸に生れ、幼名を小竹といつた。或る日大手

門を通つて信長から小便をかけられ、それに怒つて信長を詰責し、それが機縁となつて卽座に主従の約を結んだとある。全然小説的記述で訛傳の多いものであるから、生父竹阿彌の事さへも取るに足らない。甫庵本に至つてはその作が寛永二年孟春であること、彼が自序であきらかである。甫庵は寛永二年の頃すでに七十の老齡で、戰國時代のことを實際に目撃し、且つ信長及び太閤の祐筆であつた太田泉州と知合であつたから、見聞するところ甚だ廣く記述するところもまた詳かであつて、その價値の大なることは、たしかに認められはするが、しかし太閤を竹阿彌の子としたのはどういふわけか、材料を何からとつたものであらうか、それが詳かでない。自らその著が泉州の遺書に據つてゐることをいひ、且つ泉州は愚直な男で先入を主とするものであつたから、信用しがたいものも少くないが、老齡の身では遺老を訪うて探聞したり、史料を搜索することができない、後の人の添削を仰ぐ、と謙遜してゐるから、確信に乏しい著作であることが知れる。さうした著書に據つて竹阿彌を生父とするの早計であることは、多くをいふまでもないことだ。根據なく漫然と傳はつてきた野合の子であるといふことを今でもかれこれといふものがあるが、それを取るものは生父の知れないことが唯一の證據ではないかといふ。またこれを駁するものは野合の子とすれば先づその太閤のお袋たる大政所の品行から調べてかゝらねばならぬが、大政所には調べるまでもなく、何等不品行の傳聞がない、野合などする婦人ではなかつたらうといふ。わたしは恐らくその兩説ともに誤つてゐると思ふ。それは兩論者とも野合を以て、野郎と淫奔娘とのクツキ合をいふものと信じてゐるらしいが、今の野合は知らず、昔の野合は貧家のものゝ婚姻しても披露をしないのや、婚期の過ぎた男が妙齡の處女を娶つたときを

いつたのである。野合本来の字義は史記の孔子世家の註にある。それを讀めば前記兩論者の誤りがわかる。野合を以て事實とするなら、彌右衛門が貧しかつたためか、次夫の竹阿彌が老人でもあつたからであらう。兩論者の品行詮議の沙汰に至つてはそれこそ沙汰の限りである。

五 素性についての異説 (二)

秀吉事記は惟任退治記、紀州御發向記、四國御動座記、任官記、柴田退治記、播州征伐記の六記録から成つてゐるが、いづれもみな太閤の祐筆大村由己の筆記であつて、太閤史料中優秀なものである。戴恩記もまた優秀なものである。これは内庭に出入した松永貞徳の記であつて相當信用のおけるものである。太閤天胤説の根元もこの二書から出てゐる。鹽尻の如きはこの二書と甫庵本との焼直に過ぎない。天胤説なるものは、太閤が自ら稱して記させたものであるから、自白を以て正確とするものならば、これより確實なものはないが、事が既に人心收攬術に出てゐるから、さうは不用意に受入れられない。且つ萩中納言といふやうなものは、系譜に徴してもわかるが、そんなものは見當らないのである。然らば最後の彌右衛門説はどうであらうか、これを記せる太閤素性記は數葉の記録ではあるが太閤系譜とも見らるべきものであつて、その成つた年月は寛永年間である。記中に太閤記を駁して、桶革の胴丸云々のことの信ぜられないことをいつてゐるところから見るときは、恐らく甫庵本の誤を正さうとして作つたものであらう。この書は當時の目撃者に徴してゐるといふので、史家の間に信用甚だ厚きものがある。けれどもこれに對してもまた異説を立てるものがある。但しその論據に至つて

は薄弱で、わたしの首肯し得るものにはまだ接しない。論者はいふ、素性記は根本史料として最も見るに足るべきものではあるが、しかし、その生父を木下彌右衛門とするのは如何であらう、太閤が彌右衛門の子であるとするならば、太閤は必ず彌右衛門に贈位を奏請したであらう、しかるに贈位奏請のことなどは聞いたことがない、また贈位のことに至つては、書中何等記してない。これが該書の信用するに足らない證據である、とまたこれを駁するものは、彌右衛門は足輕のやうな卑役である、これに贈位して正一位は笑はせるではないか、潤達な太閤である、どうしてそんな笑はせをやらうといつてゐる。わたしの考ではこの兩説はともに淺薄であると信ずる。それは任官記や戴恩記を讀めばわかることである。太閤は既に皇胤と自稱してゐる。故にたとひ生父が存生してゐても太閤は自らその父を暗中に葬らなくてはならないではないか。ましてや既に死んでゐるのである。贈位を請はないのは笑はせるからではない、生父を知らないからでもない。眞實の生父は天子であると詐稱して自繩自縛に陥つてゐたからであらう。要するに素性記のやうな記録は由來眞偽混殺してゐるから一概には信じられない、と同時にまた一概に捨てたものでもない。さらに太閤出生の年月について一言したい。素性記には異本がある。遺老物語本、和學講談所本、史籍集覽本がそれである。いづれも小に異にして大に同じで、その出生年月の如きはみな一ツである。故にわたしは史籍集覽本を採るに拘はらず出生年月にいたつてはいづれの素性記にも據らない。それにはわたしの説がある。素生記に『天文五年正月大朔日丁巳日出と均しく誕生』云々と記し、本朝通鑑もまた天文五年としてあるが、これは共に猿面説に附會したものらしい。任官記には「丁酉二月六日吉辰也周易本卦復た六四に當る」云々とし

豊鑑もまた丁酉六年に生れたと記してゐる、任官記は太閤の記させたものであるから信を措くべきものであらう。たゞし二月六日周易云々は眉唾ものである。幼名を素性記には猿といったと記してをりこれを流傳して諸書また猿と記してゐるが、これは恐らく綽名であつて本名ではなかつたらう。また甫庵本の日吉丸を手輕に受入れてゐるものが多いが、船の名ならばどうかは知らぬが、足輕や水呑百姓の子に日吉丸をかしいではないか、斷じて稽考に値しないことである。且つ素性記に彌右衛門を以て鐵砲足輕としてあるが、足輕には相違なからうけれど、鐵砲足輕は受取れない。何となれば鐵砲が種ヶ島に傳來して諸國に擴がる前に彌右衛門は既に仕を致し、その當時は一農夫であつたのだ。

六 松下氏に拾はる

太閤は六七歳の頃早くも生父に別れ當時は母と姉とに従つて田にくさぎつたり、籠を背にして野に草を刈つたりしてゐた。竹阿彌を後の父に戴いたが、それでも貧乏は同じであつた。家を擧つて勞働しても、わづかに口を糊するばかりであつた。この間にあつて太閤はヤンチャ坊主の名を博し、村のもてあましものとなつて、お袋の小さい胸を痛めさせたのでお袋は近くにある光妙寺といふ寺につれていつて、和尚に何とか物にして下さいと頼みこんだ、和尚は快諾して小僧にしたが、性來の驕慢兒はなか／＼和尚のいふことなどきくものでない、肝腎のお経はそツちのけにして、村の子供を集め來つていくさごつこに餘念がない、和尚が時々叱るとベツカンコウをするといつた調子であつてそのヤンチャときたら無類である。和尚もこれにはほと／＼困じて、この子は誠に利發な子供だ、坊主なん

かにするのは惜しい、とうまくいつて引取らせた。お袋は太閤を引取つたが、厄介坊主は日ましに厄介物になつて仕末におへない。そのうちに坊主だん／＼成長して、十六ともなつたが、ある日先人彌右衛門が、かたみわけの永樂錢一貫文を懐にして、飄然と中中村の伏家を飛出した。これが天文二十一年の春のことであつた。もとより異父の竹阿彌と仲よくなかつたためでもあつたらうが、飛出した坊主は清洲の城下に行つて、所持の永錢で縫針を仕入れ、それを途々賣り歩いて引間今のの城下まで行つた。當時引間城には飯尾豊前守顯茲といふものが、今川氏の幕下でゐた。坊主は垢のついた白衣をまとうて、城下なる引間川のほとりに、シヨンポリ佇んで考へ込んでゐたが、向ふの方から馬上ゆたかに來る士丈夫がある、これぞ松下源左衛門といつて嘉兵衛之綱の父で、頭陀寺の小館に據れる郷士である。飯尾氏を引間に訪はうと今しこゝを通りすぐるところである。坊主はそれを頻りと眺めてゐた。源左衛門もまたつく／＼と坊主を視てあつたが、遂に馬を駐めて

「そこなる坊主どこから來たか」

ときいた。すると坊主は些の躊躇もなく、

「尾張から來た」

といふ。源左衛門が

「どうぢやわしのところに奉公する氣はないか」

といへば

「お願ひします」

と淀みのないうけこたへ。そこで源左衛門は坊主をつれて飯尾氏を訪うた。源左衛門は顯茲と話談中に坊主のことを思ひ浮べ

「時に飯尾殿今日は妙な少年を伴うて参つた、それは人かと思へば人、猿かと思れば猿といった奇體な少年でござる」

といふ。顯茲は聞いて

「それは珍らしいものでござる、これへ呼んで一見したいものでござる」

と請ふ。そこで坊主を主客の間に呼び寄せたが如何にも奇體な代物である。顯茲はその容貌を見るとふき出したが、何はともあれ腹はすいてをらうし、着物もきたないからといふので、飯を食はせ衣服も與へて綺麗にしてやつた。すると最前の奇體な動物はたちまち一變して、品格も備つて惻愍な少年ができた。やがて源左衛門は坊主をつれて引間を辭し、自己の館の頭陀寺に歸つたが、源左衛門には一子嘉兵衛之綱といふがあつたので、坊主をそれに附けて草履取にしておいた。ところが之綱はこの少年を二なく愛しお納戸役にし後には用度掛に拔擢した。之綱は坊主よりは一か二つ年少なので總ては源左衛門の差圖であることもちろんである。坊主は用度掛になつても、大人を凌ぐやり口で氣が利いてゐる。故參の小姓は坊主が氣が利き、寵愛されるのに嫉妬をおこし、ひそかに議して坊主を悪いものにしやうとはかり、ワザと物を隠しては、坊主が盗んだと坊主を泥棒にしてしまふ。しかし源左衛門はそれをよく知つてゐたので、これはつまり他國から來たものだから排斥するのだ、さりとて放任しておいて、もしや危害でも蒙るやうであつては可愛さうだ、と永樂三十疋を與へて、しばらく

故郷に歸れと諭した。坊主はいはるゝまゝに松下家を辭して尾張に歸つた。坊主が松下家に在つたのは十六歳から十八歳まで、算へて三年を閲したが、實際の閲月は僅に歳餘に過ぎなかつた。但し十六歳の小童が草履取りから用度に任ぜられたなどは、非常の才でなければできない藝當であつた。

七 幼時についての俗説

太閤が幼時光明寺に入つたことについて、甫庵は「太閤を僧侶にしたのは松林の五葉を昌んならしめんと欲するの意からである。然るに彼は武道を好んで墨紙を厭うた。故に寺僧はこれを還したが、其時太閤は家に歸れば養父に叱られるだらうと豫想してワザと怒つてみせていふには、もしも自分が家に還へしたら自分はお前等をみな殺しにし、お寺を灰にしてしまふぞ、と寺僧はこれをきいて大に恐れ、美衣と扇面とを與へて太閤の歡心を買ひつゝ、腫物にでも觸るやうにして家に還した」といつてゐる。これは恐らく山崎闇齋が寺院を焼かんと叫んだといふことゝ同工のもので信ぜられない話であるが、しかしいかにも太閤が少年時代の氣分が出てゐておもしろい。甫庵はまた太閤は十歳頃から遠三、尾、濃を放浪し、二十歳の時松下嘉兵衛に仕へ嘉兵衛から桶革の胴丸を買ひに尾張の故郷まで使にやられ、そのまゝ其金をセシメてしまつたと書いてある。わたしはこの書を読むごとに眞書太閤記や繪本太閤記などいふ俗書と共に馬鹿氣たことを書いたものだと思はずにはゐられない。眞書太閤記や繪本太閤記はみなこの甫庵本にあやまられてゐるのである。蜂須賀小六に従つて野盜の群に伍したなどいふことは、俗書にあることであるが、これは四國放浪に假構したものであつて、黄金五兩着服

といふこと、共に、人の子を傷ふの甚しきものである。太閤素性記には嘉兵衛に仕へたのを十六歳とし、嘉兵衛を去るをその論旨に出づるとしてあり、且つ太閤は生來正直ものである。托された金を着服するやうな、さやうなさもしい根性はない。又具足を求める必要があれば、少年に托することあるべきでない、といつて甫庵の孟浪杜撰をたゞしてをる。しかもその正す根拠を飯尾顯茲の娘にして、素性記の著者の祖母であるものゝ談話に求めてゐる。これ以上確なものゝ見つからぬ間は、先づこれを信用しておくべきであらう。なほ一言辯じなければならぬのは、太閤が出仕當時の松下氏を以て、久能の城主としたり、又は川輪の莊の郷士だとすることの誤りである。わたしは初め久能を疑ひ、川輪を以て事實に近いと考へたが、後に諸書を閲して久能はもちろん川輪も亦確實でないことを知つた。遠江國風土記傳、寛永系譜を按ずるに、嘉兵衛は初め遠州頭陀寺の館に在つた、太閤の仕へたのは實にこの時である。後太閤が天下を取るや、嘉兵衛を丹波に封じ、又更めてこれを遠州久能に移封した。藩翰譜や野史が太閤の盛時には之綱既に世を去つて在らず、太閤すなはちその子を移封して舊誼を録す、といつてゐるのは、大きな謬である。すなはち小牧役の部署表、九州役における太閤の朱印状などを見る時は、之綱はなほ明かに存生してをる、これらの古文書、古記録は太閤の盛時に之綱の存生したこと、且つ太閤が少時之綱に仕へたこと、決して小説的傳説でないことを證するものである。更に又一言することがある。太閤が松下氏の下にある時、一妻を娶り、辭するに臨んでその妻を去つた、そしてその時庭上に大黒天の神像を打壞してこれを妻に見せたといふことのものである、このことは俗書の記するところで、人の耳に熟してゐるものであるが、わたしはこれを太閤が源左衛門に従

つて飯尾氏を訪うた時、顯茲が太閤の才氣に感じ、それを娘阿喜佐の婿に請はうとしたといふ異説のそれに假構した虚談であると思ふ。甫庵が一度杜撰の書を出してから、後人それに倣つて輪に輪をかけ、太閤を偉大にしやうとしてかへつて醜陋の行事を列ね、英雄の眞價を下落し、冤罪を被せたこと少々でない。今なら甫庵は名譽毀損で訴へられるところである。

八 信長に仕ふ

張儀は楚相に辱められて感憤し、わが舌ありやと問うて、秦に入つて七國を連衡し、以て一統の素地をなしたが、辱められて感憤し、事を天下になしたものは、ひとり張儀に限つたわけではない。頭陀寺の小姓に辱められて、感憤して信長に仕へ、遂に天下を一統したのは、中中村の驕慢兒ではないか。太閤は之綱を辭して尾州に歸り、先づ清州に入つて曾識の人を訪うた、それは信長の小人頭の一若といふものであつた。一若は太閤を一目、見るや大に喜び、又大に叱り

「お前は家を飛出して三年間も音信不通なので、お前のお袋は大變に心配してゐる、急いで家に歸つたがよい」

とすゝめた。太閤はそれを聞いて大いそぎで家に歸る、と果して母は驚喜して迎へ

「家を飛び出して行方不明なので、日常の炊事も手につかず、どこにどうしてゐることか、と毎日泣いてゐたことであつた。それにしてもまたお前は、前とはうつつ變つておとなしくなつたものだ、一體どうしたわけである」

としばしは嬉し泣きに泣いて語つた。それから太閤は赤貧洗ふが如き家にあつて、餓腸をかゝへながら五年間を過ごし、五年目のある日、一若の推薦で、織田上總介信長の草履取となり、名を木下藤吉郎と改めた。これが實に永録元年のことであつて、太閤が二十三歳の時であつた。太閤が之綱に仕へたときには、草履取りとなつて、間もなく用度係に轉じたが、信長に仕へても亦草履取りであつた。天のこの人に大任を下さんと欲するや先づその心志を困むといふものであつたらう。但し之綱は邊土の小館主であるが、信長は海道一の要地に據れる小名である。之綱は小丈夫であるが、信長は大丈夫である。之綱は邊土に雌伏してゐるが、信長は天下に雄飛せんとしつゝあつた。聖人といへども勢に乗ずるには如かず、と古人はいつてゐるが、太閤が信長に仕へたのは、まことに勢に乗じたものであつた。けだし司馬子長がいつたやうに、閭巷の人にして行を砥ぎ、名を立てんと欲するものは青雲の士に附するに非ざるよりは、いづくんぞ能く後世に施かんやである。

九 信長に奉仕の異説

太閤が松下家を去つたとき、越後にいたつて奉公しやうとしたが、謙信を觀て大器にあらざるを知り、仕へずして故郷に歸つた、といふことが新撰豊臣實錄に記されてゐるが、これは甫庵と同工異曲で言ふに足らないことである。また信長に奉仕するときの小便説(祖父物語)や桶革の胴丸における五兩攘金の(甫庵本)いづれもが、眞赤なウソであることは、前にもその一端を記しておいたが、ここに今少しく甫庵本の糾纏を試みやう。甫庵はいふ、秀吉は嘉兵衛から胴丸を求めに清洲へ使を命ぜ

られたが、途々考へるに、ひとしく人につかふるからは、いつそのこと依託の金で身を飾り、嘉兵衛以上の大丈夫に仕へるには如かない、故郷に歸着すると直にこれを叔父なる人に問うてみたところ、叔父もそれはよき分別である、今時海道一の弓取は、織田信長に如くものはないといふ、そこで一日信長に直訴して漸く希望を達した、と今これを素性記に見るに、太閤の正直なことは前に引いた通りであつて信長に仕へた、いきさつは、信長の小人頭に一若なるものがあつて、それが中中村のもので太閤及びその阿父とも親しい間柄なので、太閤はこれをたよつて信長に仕へた、とある。甫庵の言つてをるやうな依託金横領の犯跡などにはひだも記されてない。甫庵の芝居がかりなは、素性記の實際らしいのに如かないであらう。特にこれは素性記の筆者が、その養母と共にしばしば北政所に伺候して、聞いたところであるといふから、この事實の打消されなにかぎり、これに従はなければならぬ。

一〇 時代の一顧

關白の山は斷じて攀ち易いものではないが、木下藤吉郎は遂にその山に登つたのである。四尺八寸の藤吉郎はもとより狐走一時の快を食つたものではなく、龜歩の艱難を嘗めつくして漸く山嶺に達したのである。しかし先づその棧となり梯となつたものは、誰れあらう織田信長であつたのである。この機會において、少しく時代の形勢と信長の爲人とを一顧させてもらひたい。

室町府の季、三好松永の外に起つて、堂々天下の權を握らんとしたものに、越後に上杉氏があり、

甲斐に武田氏があり、相摸に北條氏があり、駿河に今川氏があり、中國に毛利氏があり、四國に長曾我部氏があり、且つまた九州に島津氏があり、そして尾張には織田氏があつたのである。中にも島津氏は甚だ強大ではあつたが、最も京師に遠隔し、織田氏に至つてはそれとは反對に、最も微弱ではあつたが、極めて至近の地に在つた。織田氏一たび今川氏に奇勝を博し、齋藤氏を吞滅するや、小名から一躍して大名となり、こゝに戰國七雄の一に列つて相睥睨するに至つた。織田氏はその祖先を平氏に出づといつてゐたが、これは莽に背きて興るものみな漢を稱するといはれたのと同じで、當時は誰も源氏にあらざれば平氏と稱したものである。織田氏は斯波氏に従つて、尾張の守護代となり、應仁の亂後斯波氏の勢が傾くや、漸くこれを壓倒して尾州を掌握してしまつた。されど織田氏はその族が甚だ多く、初めは二分して一は岩倉に居り、一は清洲に居たが、後に支族が數個に別れ、各々一城に割據するに至つた。今信秀の當時を按ずるに、宗家の信安は岩倉城に在り、支族の信清は犬山城に在り、彦五郎信廣は清洲に在り、家宰伊賀守は深田城に在り、右衛門尉は松葉城に在り、信光は守山城に在り、そして清洲の宰たる信秀は、初め勝幡城に在つて那古野今の石を奪取し、これに入つてまた古渡城に遷り、また未盛城を營んでこれに據つた。これ實に信長の父であつて志また小ならず、特に懷を勤王に馳せたのは、その遠慮を知るべきである。足利氏が凋衰してからは、義輝の如き、名は將軍といふものゝ、流浪をつゞけたものである。朝に洛陽に在つたかと思へば、夕には江洲に在り、夕には江洲にあつたかと思へば、朝には洛陽に在るといつたていたらくで、堂々たる大將軍にしてこの有様だから、幕府の困窮は想像の外であつた。同時に又皇室の式微は大變なもので、宮墻は壞れ、殿柱

は傾き、禁座は朽ち、金駕は破れ、内にゐらせたまふにもゐらせたまひがたく、外に行幸遊ばすにも遊ばされぬといふ有様。果して信秀が宮墻造營の費用として、四千貫文を献上する、と公卿宮女は驚喜して、誠に不思議の大營ではあるといつた。それよりもなほ畏きことがある、後奈良院が崩御の時は大葬費ができずして火葬に附させたまひ、正親町院が即位させられた時には、大禮費がなくて盛儀を行ふことができず、公卿が出で、臣民にその費用を寄附させることをゆるさせたまふたといふことである。毛利が菊桐の紋章を賜はつたのは、この時の獻金の故ではないか。この時に當つて誰れか日本人を忠君愛國の民といふであらう。道德の地に墮つること、しかく甚しからんには、天日もなほ陰は闇かつたであらう。信秀が微弱を以て勤王の魁首となつたのは、當時においては稀有の忠臣といふべきである。惜しいかな功業未だ甚だ濟されずして空しく遠志を懷いて天文十八年三月三日卒去した。そこで家を嗣いだのが藤吉郎の棧梯であつた信長である。時人は號んで大迂氣といつてゐた。

一一 少時の信長

『人間五十年下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり、一度生を得て、滅せぬ者の有るべきか——』と得意の語をうたひ、得意の能を舞ひながら、時やよしと疾驅して、桶狭間に向つて、その地で大捷し五年六たび美濃に徇へ、最後に兵氣の霆震するを待ち、一舉して稻葉山を攻陥し、遠三尾濃をして震駭せしめ、一躍して大名となり、以て天下平定の密詔を拜したのは、織田上總介信長ではないか。これより先、信長がまだ幼少の時、名古屋に在るや、曉窓に讀み、夜燭に學ぶ、といつた風ではなく、

それよりは馬術を好み、水泳に長じ、弓術を習ひ、鐵砲を能くするといふわけで、主として外に有つたものである。信長は身長常人に超え、體格は甚だ肥滿し、且つ眉目清秀の偉丈夫であつた。けれども少年時には往來に出るときなどは、髪は茶筌に結び、紅糸黄糸を巻き付けてゐる、朱鞘の大刀をぶつこみ、火燧袋を腰につけてゐる、そして柿でも栗でも嫌ひはない、頬はり次第に頬ばりながら、從者の肩に下つて、ブランコしつゝ往來したものである。その當時父の信秀の葬儀があつたが、信長は禮に媚はぬ服をつけ、刀には繩を巻いてゐる、そしていよく焼香となると、つか／＼と前に出て、抹香を搦んで佛前に投げかけ、悠然として退いた。ある日美濃に入つて岳父の齋藤山城守道三に對面することゝなつたが、その時も道中はわざ／＼陽物を書いた衣装をつけて練り歩き、いよく對面となると正装して出で、嚴容を示し、道三をして二度びつくりをさせたといふことである。かゝれば時人はみな一様に大迂氣といつて指し笑つた。ためにその傳であつた、平手政秀は傳として申譯がないと死諫するに至つたほどである。ところがこの時、こやつ尋常ならずとばかり信長を睨んだものが二人あつた。その一人は信秀の葬儀に列なつた筑紫の旅僧で、今一人は岳父の齋藤道三である。二人はいづれも彼れを視て感歎し、旅僧はこれこそ國を保つ器ではあるといひ、道三はまた、我が子孫の馬の彼れが門外に繋がるゝこと遠くはあるまい、と歎息した。まことに二人は達眼の人であつた。その後信長は果して清洲を取り、岩倉を陥れ、一族兄弟中で、彼れに背く者は、みな僵して尾州一圓を手中にした。且つまた信長は長槍を作り、鐵砲を用ひ、當時の戰術に革命を興へた。如何にも大迂氣ではできない仕事である。けだし信長の卓落豪放は天品である。細節に拘らずして跌宕なのは天性で

ある。幼少の時に迂氣を盡したのは、幾干か伴つて變りものとなつたことであらうし、多少は欺いて痴人を装うたことでもあつたらうが、總じていへば常人の迂氣と見たところは、そこはかへつて彼れが大度の自然なところであつたらうか。この大度な信長は藤吉郎を用ひてから、如何にこれを視たことであらう。稻葉山を攻撃するや、その陥落に先だちて藤吉郎を將校に登せ、驍勇柴田勝家等と列を同じうさせ、出でては一方の將たらしめ、入りては帷幕の士たらしめた。仲間小者から拔擢して將校に登すまで、年を閲すること僅かに五年である。如何に藤吉郎に拔群の才があるとはいへ、信長が下臣をしてこゝに至らしめるには、その眼識の異常なものがなければできないことである。要するに信長は機を見ること敏なるものであり、事をなすこと果なるものであり、人を見ること明なるものであつた。且つその膽は斗の如くにして、少青年の頃既に英雄の資を具備してゐた。

〔附言〕桶狹間の戰は史實から見る時は、桶狹間の戰ではなくて、田樂狹間の戰である。今これを桶狹間の戰といふのは、人耳に熟してゐるところから取つたわけである。

一二 大に土豪を用ふ

藤吉郎が初めて信長に仕へた時には、信長の草履を取つて出入必ず隨つたものである。そしてしばらくして一若岩卷などの小人頭の列に入り、又しばらくにして普請奉行となり、或は薪奉行となつたが、根が才氣に富んだものゝことゝて、行くとして可ならざるなく、信長のお覺殊の外芽出度く、その間、戰場に出では、ある時は木下雅樂に屬し、ある時は丹羽長秀に屬して懸命に奉公大切と努めた

が、糟糠の妻を娶つたのも、この時のことであつた。それは浅野又右衛門の養女であつて、他日の北政所がそれであつた。信長は美濃を攻めて取れずしばしば兵氣を銷したが、それがため一日衆を會していふには

「美濃を攻むること随分久しいが、これを領略することのできないのは、地の利が彼に在るからである。それ故、砦を墨股の對岸に築きたい、みなくこれはどう思ふか」

衆はいつた。「それは至極妙案でござる。」と信長は又いつた、

「誰れぞこの仕事に當るものはないか、」

信長のこの問に對しては、いづれも尻ごみして、互に顔を見合せて一言を發するものもない、信長はこの體を見て藤吉郎に問うてみた。すると藤吉郎は對へていふには

「案はまことに妙でござります、事の成就是受合でござります、それがし、つらく惟ひみまするにこの地には能く兵を用ふる豪族がござります、これを篠木、柏井、科野、秦川、小幡、守山、根上、の村々から選べばその數實に千二百を越えることとござりませう。この中から更に優れたものを抜きますれば、蜂須賀彦右衛門、同又十郎、稻田大炊助、青山新七などがあり、この土豪に附せる人數は凡そ五六千もござりませうか、これをあつめて二手に分け、それを驅つて對岸に遣はせば、壘砦は見事にできることとござりませう、もしその指揮に任ずるものがなきやうなら、不肖それがしおうけして任に當りませう。」

と信長は聽いてその勇を嘉し、さらばとあつてその任に當らせた。これより先、藤吉郎は邑民をあつ

め、擬兵を作つて、自軍に應じたが、その時信長は遙にその旗旗を見て、未だ嘗て見たことのないものである、敵か味方か判断がつかず、人を放つて視せにやると、藤吉郎の遊軍であつた。氣短の信長は大いに怒つて、藤吉郎を召し寄せ、いたく叱つて誰がその旗旗を許したか、怪しからぬことをする奴だ、と罵りつゝ立ちどころに旗旗を折らせてしまつた。機智に富んだ信長に對して、かやうな機智をめぐらす、とかへつてお覺の目出たいものではない。これは藤吉郎が功にはやる千慮の一失であつた。人の己れを知らざるを憂へず、と古人はいつてゐるが、藤吉郎はこゝをよく知つてゐる、彼れは信長に叱られても、少しもふくれた顔をしな、はいく悪うござりました、とおとなしくして謹慎の意を表してゐた。藤吉郎の藤吉郎たるところは、けだしこゝに在るのである。これが實に永祿五年九月のことであつて、この歳藤吉郎は將校に列した。その時の齡が二十六である。かくして白日は駒の如く過ぎ、年は幾度か旋運して永祿十年には天皇から密詔が信長に下つたが、藤吉郎は簡ばれて、道家祖看、森可成、柴田勝家、丹羽長秀、瀧川一益と與に立入、萬里小路の兩使を接待し、頗る機敏に立ち廻つて又信長には、なくてならぬものとなつた。密詔は左の如きものである。

今度國々屬本意由、武勇之長上、天遣感應、古今無双之名將、彌可被乘勝之條、爲勿論、就中兩國御料所且被出御目錄之條、嚴重被申付者、可爲神妙旨、命如此、悉之以狀

永祿十年十一月九日

右中辨晴豐

織田尾張守殿

談は一躍五歳を越へた。前に戻ることをしやう。さて藤吉郎は信長から壘砦を作るべく命ぜられ、大に人を聚めてそれと共に河畔に抵つて、敵の逆襲を物かは、と銳意壘砦を築いて籠つた。その時敵兵はしばしば挑戦したが、藤吉郎は決してかまふな、と衆を制して戦はず、ある夜はじめて大炊助が奇襲したいと請うて出たので、藤吉郎はそれを許し、彦右衛門に指揮をさせ、大炊助を先鋒として向はせたが、兩人は總勢六百を率ゐて井口を襲ひ、敵の首級十三を獲り、且つあまたの分捕もあつたので、藤吉郎は雀躍してこれを信長に報告したが、信長はそれを聞いて大に驕び、自ら持つところの槍と銃とを賜ひ、こゝではじめて旗旗を許し、また大炊助その他のものにも賞を賜うた。これが永祿六年九月のことである。翌年八月には、信長は美濃の三人衆として、勇士の聞えある稻葉伊豫守、氏家ト全、安東伊賀守の参加を容れて、力を協せて稻葉山を攻め、その月十五日に龍興が脱走したので、城は遂に陥落した。そこで信長は六ヶ年間の攻伐の功が漸く治められ、直に居城を稻葉山に移した。古來井口、忠節、今泉を總稱して岐阜といつたが、これから信長はそれに早田を加へて岐阜と呼んだ。稻葉山城攻落の功には秀吉の與れること、けだし少々ではない。

〔附言〕 藤吉郎が秀吉と名乗つたのを仲間奉公と同時に在るとする書があるが、古文書に見るときは永祿五年將校に列した以後に在る、故にこれから初めて秀吉といふことにする。なほ稻葉山の陥落を以て土岐累代記は九月朔日となし、その他の諸書はみな八月としてある。筆者は八月説に従つた。なほ本文は大體甫庵太閤記によつたが、蜂須賀等を野盜といふの誤りであることが、渡邊世祐博士も正すところあつたので、それ等に従つて野盜を土豪に訂正する。

一三 信長、將軍を擁す

信長が岐阜に移つたのは他ではない。それは本營を西漸したのである。信長が京都に入らんとするの念願が盛なのに加へて、將軍義輝は三好松永に弑される、弟の義昭は細川藤孝を以て自分に依憑して来る。さうした時運が切々に向いてくるので、征心が頓に焦灼してやまない。そこで信長は一計を案じ、遠きに結びて近きを攻めるといふ支那式の近攻遠交の策を取り、戦争は只入京の道を開くといふことを主にした。

武田、徳川、淺井に配し、神戸に婿を入れ、關に宗嗣をやつたのは、いはゆる結婚政略といふものであつて、これは後顧の憂を除いたのである。けれども江州佐和山には佐々木左京大夫承禎があつて信長から協心を促すけれども頑として應じない。遂にこれと矢丸を交ゆることゝなつた。佐々木はさきに三好、松永と氣脈を通じて義昭の依憑を容れず、速にこれを追うたものである。今それがために干戈を見るに至つたのは、むしろ佐々木において期するところであつたらうか。

信長は一舉にして佐々木を蹂みつぶさうと尾濃、勢州の兵を帥ひて平尾村に陣どつた。これが永祿十一年九月七日のことであつて、九日から砲火が交へられた。この時に當つて柴田勝家は觀音寺城を圍み、美濃三人衆は和田山城を圍み、そして秀吉は信長の本營に屬し、佐久間信盛、丹羽長秀、淺井新八と俱に建部吉田を箕作城に攻撃した。これが十二日午後四時であつて、その夜既にそれを落した。信長は本營をこゝに移し、翌日亦秀吉をして勝家及び三人衆に應援させ、觀音寺城と和田山城を攻陥

させた。こゝに至つて江州殆ど夷ぎ、信長その月、義昭を擁して京師に入り、また兵を西に下して、芥川城を攻めた。細川眞之、三好長房等將軍義榮を擁護してこゝを落ちた。信長は義昭を芥川に移して、三好義繼、松永久秀の降を聽し、翌十月二日に池田勝政を池田に圍んでこれを降し、その月畠山高政を高屋城に置いて河内半國を分ち、三好義繼を若江城に置いて、餘りの半國を配し、和田惟政には芥川城を伊丹兵庫には伊丹城を、池田勝政には池田城を、藤孝には勝龍寺城を與へ、且つ久秀に領つに大和一國を以てした。この賞は藤孝を外にしてはみな無名の賞であるとの謗があつた。新井白石の如きは大にこれを難じていつた、この擧何の擧ぞ、軍何の軍ぞ、とまことに逆賊を容してこれに賞賜したのは寛宏といへば寛宏であらうが、その戦争に至つては有名に開いて無名に輟したものとしての批難を排することはできなかつた。けだしこの月、洛中洛外は靜謐に歸し、信長は義昭を奉じて京に上つた。

京に入つた義昭は直に將軍となり、信長に請ふに副將軍又は管領を以てした、信長はみな辭した。義昭は謡曲十番を催はして、自ら祝し且つ將士を犒はうとしたが、信長は諫めていつた、天下はこれから多事である、文に溺れてはならない、五番に減じたがよろしからう。當日になつて信長はそれを陪觀してその月二十八日に岐阜に歸つた。こゝにおいて義昭は感泣して信長を阿父と稱した。

翌十二年正月五日、三好三人衆が亡命の齋藤龍興等を驅つてまた叛き、新將軍義昭の假第である本國寺を圍んだ。明智光秀等は義昭を護つて拒ぎ戦ひ、細川藤孝、荒木村重等は賊を桂川に破つた。この時信長は國にあつて六日に注進に接したが、例の氣早のことゝて嘔を吐いて馳せ向ひ、三日の程を

二日で入京した。然るに事件は信長の入京を待たずして夷ぎ、信長入京の聲をきくに至つた時には、賊は全く姿をかくしてしまつてゐた。信長は諸將の功を賞し、且つ新に二條第を築いて義昭をこれに入れ、同時に皇城を修理して、大に勤王の志を致し、五月十一日にまた岐阜に歸つた。この時から秀吉は村井長春と與に京師の警衛に任じ、大に努力して事にあつた。

一四 大河内城攻落

信長は岐阜に歸つてまたく馬を伊勢に驅り、先づ淺香城を攻めた。それは八月二十六日であつたが、秀吉は京師から馳せ參じて、淺香城攻撃の先鋒となり、奮兵を提げて劇戦し、月の中にこれを抜いた。この時秀吉も創を受けたといふことであるから、その劇戦は察するに餘りあつたことであらう。その月二十八日には信長は進んで大河内城に抵り、國司の北畠父子を圍んだ。その陣形を見るに東には柴田勝家、佐々成政、同隼人、森可成、山田三左衛門、長谷川與次、梶原平次郎、不破河内、同彦三、丸毛兵庫、同三郎兵衛、丹羽源六があり、南には織田上野、瀧川一益、津田掃部、稻葉伊豫、池田勝三郎、和田新介、中島豊後、進藤山城、後藤喜三郎、蒲生右兵衛大輔、永原筑前、永田刑部小輔、青地駿河、山岡美作、同玉林、丹羽長秀があり、北には齋藤新五、坂井右近、蜂屋伯耆、築田彌次右衛門、中條將監、同又兵衛、磯野丹羽があり、そして秀吉は攻圍軍西方の將として、氏家卜全、伊賀伊洲、飯沼勘平、佐久間右衛門、市橋九郎右衛門、塚本小大膳と與にあつた。信長はかゝる勇猛智才の將を聚め、これに配するに總勢十萬餘人を以てし、總大將として東方の山腹に陣どつて、晝夜

を舍めず攻撃した。けれども城は容易に抜けず、池田勝三郎、丹羽長秀等は士卒を損すること甚し。氣短の信長はこれを見て大に怒り、憎ツクき敵だ乾し殺してしまへといひ攻圍を嚴にして蟻のはひ出る餘地もない。且つ一益をして火を諸方に放たせた。かくて八月から十月にわたり、攻圍殆ど四十日に及ぶや、城兵は漸く兵糧竭きて餓死するものが多くなつた。柘植三郎左衛門はこれ聞き、和を木造城主にとのへさせた。その矢文にいふ、國司はその女を以て信長の二男茶筌丸信雄に配し、信長は茶筌丸を以て國司の家を嗣がせ、そして議を締結したいがどうであらう、と木造城主はこれを大河内に告げたが、北畠父子は相議していふ、今や城兵漸く餓えて來た、且つたとひ堅く守つてゐても援兵が至るといふわけではない、最後には信長の虜とならねばならぬのである。それよりは先方の要求を容れて講和するに如かない。とそこで十月四日に和を講じて城を致し、父子は笠木に退き、茶筌丸がこの城に入つたのであるが、この時信長は茶筌丸に附けるに津田掃部を以てし、又瀧川一益に阿濃津今の、澁見、木造の三城を守らせた。同時に伊賀を攻めて上野を降し、織田上野をこゝに置いて、自身は數騎を從へて京に入り、義昭に謁して勢州の平定を報告し、その月十七日に岐阜に歸つた。信長がこの時の役は、これを一言にして盡くせば、南勢の國司の北畠父子を降して、伊勢一圓を自家に屬させたまでである。

〔附言〕 足利季世記は織田北畠の講和の日を十月十二日としてあるが、信長公記には十月四日とある、大河内城を降してから上野を攻め、山田に詣で、京師に入つて、十七日岐阜に歸つたとして見ると、講和の四日に成つたことは明かである。

一五 手筒山城を抜く

永祿十三年に改元して元龜となつたが、この春秀吉は命を蒙つて、馬を驅つて越前に入つた。越前討伐の擧たる、實に朝倉義景が將軍の教書に従はずして上洛しなかつたことに原因する。四月に信長は二萬餘人を帥ゐて京都を發し、二十三日若州佐柿城に着いた。佐柿城は永祿以來しばらく義景に攻められたが、寡兵を以て克く守備し、克く衆敵を撃退して城主粟屋越中に勇名のあるところである。秀吉はこの日、信長に従つて佐柿城にいたつたが、この時、家康も亦初めて信長に隨つて來た。

信長は諸將を聚めて議していふには

「先づ手筒山を攻めやうと思ふが、公等に異議ありや、異議あらば遠慮なく意見を吐露せられよ」

一同はこれ聞いて、いづれも異議なしといふ。粟屋越中進み出でて

「こひねがはくば、それがしに先鋒を命じたまはれ」

といふ、信長首をふり

「その方は籠城數年に及び、勞苦察するに餘りあり、手筒の先鋒を命ずるには忍びない、それは丹羽長秀に命じやう」

そこで粟屋は敦賀地方へ令を發して、今や信長大軍を帥ゐて手筒を攻めんとするところである、百姓一同我軍に馳走をするならば恩賞を厚くして遣はすであらう。苟も朝倉に與することあらば、みなごろしにされるであらうぞ、みなよくよく心得て我軍を迎へよと命じた。布令が回ると百姓一同

はみなごろしにされては大變と箆食壺漿して信長を迎へた。丁度二十五日である秀吉は先鋒の長秀に尾して手筒山を圍んだ。この日信長は令していつた、我が旗の着到後ならでは城を落すべからず、としかも城は峨々たる山嶺に在つて、城中から亂射する彈丸は直下して、百發暇止せずといふ有様である、こゝにおいて長秀は大に戰つて城門に進み、今や一舉して門に入らんとしたが、信長の命令を思ひ出して逡巡する、敵はそれを見て急射撃をする。それがために我が軍の死傷多數にのぼつた。しかし、頃刻にして信長の旗旗を見たので、長秀は安心して邁進する、秀吉も亦長秀と共に奮戦する、いくさ上手の信長が、指揮命令よろしきを得て、頻りに奮戦を促す、秀吉や長秀等は、大吶喊をやつて城に登り、血烟を立て、惡戰する、といふ悲壯な場面を展開した。時に城主朝倉太郎左衛門は能く防戦し城兵は遂に屈せず、殆ど全く戦死してしまつた。首級を獲つて信長の實檢に入れた時、その數實に千四百の多きに及んだ。かくして城は急攻にたまりかね、その日の中に陥つた。

戦が終つて諸將が陣營に入つたときである。秀吉は粟屋越中の功勞をたゞへて

「貴殿は寡を以て衆に當り、數年の間城を支へて克く難を排し、今、主將が來て攻むるにあつて又これを援けて勇名がある、誠に稀有の名將である、何卒貴殿の武運に肖らしてもらひたい」と越中の手を取つて押し戴いた。

信長は、二十六日に亦金崎を攻めて、朝倉中務大輔を降し、更に引壇に抵れば敵は城を開け渡して去つた。信長が破竹の勢を以て將に一乗谷を攻めんとするとき

「淺井長政叛す。」

との飛報があつた。最初信長はこれを信じなかつたが、二度、三度至るに及んで怒髮天を衝き

「姻戚の間を忘れ、予に逆ふとは不届至極な奴である。よし天誅を加へてやる」

後事を秀吉に託して直に京師に上つた。四月晦日のことである。秀吉は命を奉じて義景に對せんがため金崎城に入つた。

〔附言〕野史に手筒城攻撃を三月としてあるが、信長公記には四月とあり、又、佐柿國吉之城、粟屋越中守以下、籠城次第、佐久間軍記、瀬尾舊記を見ても四月である。恐らくは野史氏の謬であらう。淺井三代記には、信長は淺井父子謀反の報を得て驚愕震慄し、遂に刀を腹に擬したが、家康が之を制して慰籍鼓舞し、先づ自ら江州をよぎつて淺井の爲すなきを示したので、信長はそれを見てやうやく京都に入つた。とある。これ實に家康を偉大ならしめんとする捏造記事である。徳川氏の爲には是を非とし直を曲とするのを當然と心得た新井白石の讀史餘論にさへも『淺井長政が兵起ると聞いて信長は引返す、此時神祖_家跡より軍を收め給へり』とあるではないか。上述の記事の捏造に過ぎないことはこれを見ても知り得るであらう。

一六 姉川の快戦 (一)

戦國時代に於ける花々しき戦争の一つは亦彼の姉川の役である。この戦争は要するに淺井父子の謀叛に因つて起つたのである。

信長が朝倉を伐つと、淺井久政はその子の長政に面會し、數多の將士を聚めて曰く

「我家がしばく六角に苦んだときに、朝倉は毎に吾れを援けて六角を撃退し、終に淺井と朝倉とは唇齒輔車の關係を結誓するに至つたのである。然るに今信長は我が朝倉を伐つてをる。どうして

これを看過されやう。且つ信長は我と結婚し、嘗て江越二州は貴殿のものとしやうといったに拘はらず、今に至つて一言の挨拶もなく馬を越前に入れてしまつた。惟ふに彼は反覆常なき者である。朝倉氏が亡んだ後はその爪牙は亦我に及ぶであらう。今にして彼を討滅するに如くはない。且つ朝倉氏の難を目の當り見ながら、それを傍觀しては信義は果してどこに在る。汝等、克くく熱計せよ。」

浅井氏の立場からすれば、久政の言は誠に聽くべき道理あるものであつた。果して相會する者に殆ど異議が無い、長政も亦初めから黙してゐた。獨り遠藤喜右衛門は膝を進めていふ、

「信長の勢威は天日の昇るが如くでござる。これに抗するは自ら招いてその身を燬くものである。理に失して情に察せざるは智者のことではござらぬ。我君にはこゝを考へめされ」

久政は聞いて大に怒り、

「黙れ、喜右衛門、汝、微賤の身を以て上を犯すとは、傍若無人でないか。」

長政はなほ沈黙を守つてゐるので、久政は業をにやし、憤然として席を蹴つて去つた。長政はこれを見て終に父に従つた。久政は喜んでその旨を朝倉に諜した。義景は使者を見て驚喜し、

「浅井父子は織田氏の姻家でありながら、なほ義を忘れないか、あゝかたじけない」

こゝにおいて浅井と共に挾撃の計を成したが、未だ事の發しない中に信長の覺るところとなり、遂に相延いて姉川の戦とはなつたのである。六月下旬には既に精兵二萬八千を帥ゐて江州に在つ

信長は越前を去つてまだ二箇月も経ないのに、六月下旬には既に精兵二萬八千を帥ゐて江州に在つ

た。二十二日長政を小谷に攻むると、長政は援兵の朝倉が未だ到着しないとの故を以て堅く守つて戦はなかつた。信長は去つて龍ヶ鼻に軍し、二十四日に大野木秀俊、三田村國定を横山に攻めて長政を誘つた。時に徳川家康が五千人を帥ゐて龍ヶ鼻に至り、朝倉氏も亦孫三郎景健を將として一萬の軍勢を大寄山に送つた。長政は朝倉の援兵を得て意を強くし、八千を率ゐて小谷を出、大寄山に軍し、信長が横山を攻めるのを見て、

「横山の危機は旦夕に迫つてゐる。救はねばならない。然しながら道程は一里に餘つてゐる。今直ちに疾驅して至らば人馬は必ず疲勞するであらうから、今夜先づ姉川に出で、二十九日の未明に彼の敵を打ち拂はう。」

といつた。喜右衛門はこれに賛成して、

「我君の仰せ、誠に宜しうござる。その一撃を與ふれば、拙者は敵中に混入して信長を刺すでござらう。」

といひ、衆みなこれに決し、その夜大寄山を下つた。信長は遂に炬火の動いてゐるのを見て、秀吉にむかひ

「敵は術中に陥つた。今かれの火を見るのは敵が山を下るのである。明朝必ず敵は來り戦ふであらう。敢て逆撃すべし。」

といつて深更、姉川に至つたが、敵は既にそこに在つた。これ二十七日の黎明である。今、彼我の陣形を按ずるに、敵は長政の八千を分ちて五隊と爲し、第一隊には磯野丹波に千五百を附し、第二隊は

淺井政澄に一千を附し、第三隊は阿閉淡路に一千を附し、第四隊は新庄直頼に一千を附し、第五に長政本隊として三千五百を控へた。以上が本軍であつて、その支軍に至つては、景健四千人を以て本隊を構へ、景紀は三千を以て第一隊となり、前波新八郎も亦三千を以て第二隊となり、而して長政は野村に陣し、景健は三田村に陣した。

一七 姉川の快戦 (二)

我は本軍に信長あり、其本隊に五千人を取り、第一隊は阪井右近とし、第二隊は池田輝政とし、第三隊は木下秀吉とし、第四隊は柴田勝家とし、第五隊は森可成とし、第六隊を佐久間信盛として各々三千を配した。而して支軍の家康は第一隊を酒井忠次とし、第二隊を小笠原長忠とし、第三隊を石川數正として各々一千を與へ、自ら二千を以て本隊を組んだ。此外に横山攻圍軍が五千人あり、その中の三千は丹羽長秀が帥る、其の一千は氏家ト全が帥る、更に一千は安藤範俊が從へてゐた。之を總勢として見る時は、敵は一萬八千にして、味方は三萬二千人である。

今や彼我の總勢五萬人は江北姉川を挾んで相對した。砲聲轟き、劍槍交はり、天地震愕の壯觀は、如何なる端を發して至つたであらうか。戦端は實に家康に由つて開かれたのである。天日は既に懸つたが、戎衣なほ冷かなる頃である、家康は令を傳へて動いた、同時に景健も亦隊を進めた、そして兩軍は河に入つて衝突し、双方股を沒して鬪つた。初めは敵軍甚だ猛威を極め、我が一、二隊は共に退き、第三隊がこれを救つたため、一、二隊は漸く引き返し、一たびは敵を右岸に寄せたが、再び左岸

に戻され、甚だしく苦戦した。この時淺井軍は徳川と朝倉との衝突を見て、「本軍未だ動かざるに、支軍既に衝突した。我が軍袖手の時ではない。」といつて進んで織田軍に挑んだ。我軍はこれを迎へて戦つたが、敵の鋭鋒當るべからず、一隊破れ、二隊破れ、三隊破れ、四隊破れ、本隊も將に危ふからんとし、わづかに森可成が第五隊を以て支へてゐた。家康はこれを見て駛つて織田軍を救ひ、朝倉には榊原康政を當らせた。時に横山攻圍軍の氏家、安藤は我が急を見て馳せ至り、徳川軍の背後に在つた稻葉伊豫も來つて、共に淺井を撃つた。そこで淺井は三方に敵を受けたので、大いに奮闘したけれども支ゆる能はず、夥しき死傷を出して敗北した。時に一勇士、首級を携へて、

「大將いづくにある、大將いづくにある。」

と叫びつゝ我が本隊に馳せ來たる。信長と距る十歩となつた時、竹中重矩はこれを鑑て、

「これは刺客である。」

と路を拒いで一撃の下に墮した。信長はこれを見て、

「喜右衛門ではないか。」

といつた。左右の者

「おやうでござる。」

「勇士でござる。」

と答へた。けだし事は成らなかつたが、喜右衛門は能く言うて能く行つたものであつた。重矩も亦能く言うて能く行つた。重矩は未だ戦を交へなかつたとき、人に向つて、

「この戦に於て、拙者は必ず喜右衛門の首を取り申すであらう。」
 といった。人は皆これを信ぜず、却つて、龍車に當る蟻螂であらうと、窃に嗤つたものであつた。然るに今この事があつたので、前に嗤つた人々は皆驚き、かつ愧ぢた。

徳川軍に在つても、また勇士を僱した功名の士があつた。當日敵には二勇士があつた。一を遠藤喜右衛門といつて浅井軍に在り、一を眞柄十郎左衛門といつて朝倉軍に在つた。喜右衛門は既に重矩に斬られたが、眞柄は如何にと見るに、彼は當日大刀を振つて、人を斬ること草を薙ぐが如く、馬を驅つて敵中に奮闘し、さしにも精悍なる三河武士をして顔色なからしめてゐた。けれども猛つてゐる猪は獵夫のものである。我軍に三兄弟があつた。兄を勾坂式部といひ、仲を同じく五郎といひ、末を同じく六郎といつた。三人は揃つて眞柄に當り、兄が先づ槍を折られ、かつ斬られ、次いで仲が刀を落され、また大に斬られたが、とう／＼最後に末の六郎が槍を振つて眞柄を馬から突き落した。眞柄は力竭きて再び立てず、

「御身は勇士である。我が首を與へん。」

と叫んだ。六郎は聞いて長兄を呼び、

「兄上が第一に戦はれし故、この首は兄上のものでござる。速かに來つて取り給はずや。」

といふ。長兄は聞いて頭を擡げ、

「我は最早起つことができない、御身が取つて功にせよ。」

といふ。そこで六郎は眞柄の首を獲つた。これと重矩とを織田徳川の勇士一對の功となすのである。

一八 姉川の快戦 (三)

浅井軍が方に破るゝや、その第一隊として善く戦ひ、右近、信輝、秀吉、勝家等の猛將智將を惱した磯野丹波員昌は、終始脱兎の勢を失はず、隊を整へて敵中を突貫し、遙に駛つて居城の佐和山に入つた。

浅井軍が敗績するや、朝倉軍も亦旗色振はず、破れて浅井軍に尾して共に小谷に入つた。こゝに至つて朝來の戦闘時間を數ふれば、時は今まさに午後二時であつて、實に九時間の激戦であつた。信長は追撃して小谷山下に至り、一舉に抜くことができないのを看て取り、退いて兵を收め功を論じて賞を行ひ、直ちに信盛と勝家を長秀に合して横山を攻め大野木、三田村を降して秀吉に賜うて小谷に對せしめ、七月朔日佐和山に向つた。しかも磯野丹波は堅く守つて、城甚だ堅く、一日では陥落すべくもないので、鹿寨を結び、砦を築き、四方に人を配して長攻の計をなし、これを長秀に屬して、六日上京し、家康も亦兵を收めて東に歸つた。

姉川の戦で、朝倉が兵を進めて川を渡つたのは、兵法を知らざるものである。浅井軍も同様である。如何に精銳といつてもみな法に違つてゐる。敗れたのも當然である。しかし徳川軍の川に入つて戦つたのも亦兵法を知らないややかた。彼が大捷を博したのは、たゞ隊を分つて勞佚を按配した爲めである。古來この役を語るものはみな

「家康が小敵を以て大敵にあたり、かくの如き大捷を見たのは、家康の智と三河武士の精とに非ず

して、誰かこれを善くしやう。」

といつてゐる。武人は誇稱に活きるものであつて、基局を弄する者とその撰を異にしないのであるから、咎むべきことではないが、惟ふにこの役は小敵で以て勝つたのではない。大敵朝倉が、浅井の敗績を見て退いたからである。こゝにおいて筆者は、當日第一の功は氏家、安藤及び稻葉に在ることを知つた。氏家と安藤は横山攻圍軍でこの列ではなく、稻葉も亦徳川の後援として傍觀の地位に在つた。しかしていづれも信長の急を見るや、馳せて敵を衝き、これを挟んで敵の邁前を拒いだ。敵は進まんとして進む能はず、左右を防げば前より至り、實に三面挾撃の計に陥つたのであつて、敗北せざるを得なかつたのである。浅井が既に敗北すれば、朝倉も亦戦ふことができないのであつて、その退いたのは決して徳川軍の精銳に敗れたのではなく、浅井が敗れたから退いたのである。けだし少壯未だ兵に熟せぬ神君としてはお手柄であつたらう。

〔附言〕 此の役に秀吉が先鋒であつたとは豊鑑の記する處である。けれども他の諸書はみなその先鋒について記してゐない。おもふにエライ人が必ずしも何時も先鋒であるとは信じられない。重門が訛傳を取り入れたのでなかつたら、自分の叔父重矩の功を誇稱せんが爲にしかく捏造したのではなからうか。殊に當日は戦争上手の太閤さんも第三隊としてベロ敗けであつたことは前記のとほりである。又、信長公記に、眞柄十郎左衛門の首を取つた者を、青木所左衛門としてゐるが、これは武家事記、四戰紀聞、新武者物語等に據れば、青木でなく、勾坂六郎であつて、青木の取つた首は眞柄の一子十郎のものであることも、武家事記、四戰紀聞、古實記、烈公間語等に明かである。牛一は恐らく父子を取り違へて傳へたのであらう。

一九 三好の再叛

信長は京師に入るや、滞在すること二日で、三日目には岐阜に歸つて馬を休め、八月二十日に又軍を出した。往に敗亡した三好三人衆が、また四國を出で、海を渡り、烏合の衆を集めて野田、福島今の大阪市中の福島野田也に占據し、かつ本願寺大阪城の在所也の光佐を誘致して信徒を聚めしめて信長に對抗したからである。信長は二十六日に天王寺に陣し、總勢三萬人を野田、福島、本願寺に配した。この時三好左京大夫、島山高政、松永城州、和田伊州、茨木佐州、池田筑州、伊丹兵庫、鹽川伯耆、有馬源一郎等が馳せ至つて信長に加はり、義昭も亦二千人を率ゐて下り來り、かつ三好爲三は野田から降を請うて來り投じ、總勢たちまち六萬を注するに至つた。三好衆はこれを見て堅く守つた。信長が命じてその城を圍み、堀を填むるや、光佐はそれを見て驚愕し、

「野田、福島が陥落すれば我が城が危い。計謀を廻らさねばならぬ。」

と思ひ、鐘を打つて非常を報じ、大に信徒を集めた。信徒の馳せ至る者、數百千人。光佐はこれを塞塞に入れて信長に對らしめた。信長は大軍を以て一舉に彼等を滅さんとし、先づ野田福島を攻撃した。然るに野田福島が將に落ちんとするに至つて暴風俄に起り、海嘯天を蹴つて來り、淀川は水逆まに流れて四方に氾濫し、信長の軍勢は甚だ窮した。これ九月十三日のことである。三好衆はこれを見て、

「天に非ずや、天に非ずや。」

と堤を切つて我が陣に水を入れた。信長はこれが爲に拔城の計が蹉跌し、樓を造つて水を避けるや、

光佐もこれを見て兵六千を出して戦ひ、大に我軍を惱した。佐々成政、福富平左衛門、湯淺甚助、前田利家等は奮揚して戦ひ、辛うじて敵を撃退した。

天公が一朝のいたづらに由つて信長の形勢が甚だ振はなくなると、浅井朝倉はこれを聞いて雀躍し、相共に攻めて京都に入らんとして、九月十六日、三萬の大軍を率ゐて坂本に至つた。十九日、宇佐山城主森可成は八王寺山の寨塞を出て邀撃し、以て道を阻んだ。尾藤源内、同じく又八、織田九郎、道家清十郎、同じく助十郎、青地駿州等も亦奮闘したが、如何にせん、衆寡敵せず、力竭きて可成と共に戦死した。可成は老功の將、道家兄弟は曾て信長から天下第一の勇士と稱され、それを旌旗に書して賜つた勇士ではあるが、孤軍奮闘して敵中に死んだ。綿々たる恨はなほ坂本の天にあるであらう。江越が勝に乗じて宇佐山を攻めんとするや、武藤五郎左衛門、肥田彦左衛門が共に固守して城が甚だ堅かつたので、兵をこゝに駐め、進發して火を大津、馬場、松本に放ち、二十一日に逢坂を越え、醍醐、山科を灰にして將に京都に入らんとした。

信長はこの報に接して

「敵若し皇城を焼かば、幕府は何を以てか責を免かれん、吾は何を以て陛下に謝し奉らう。」
と佐久間信盛を先鋒とし、柴田勝家、和田伊州を殿軍として、二十三日の曉天、朝露を結びつゝ堂々と六萬の大軍を收め、義昭に次して京都に入つた。この時途中から畿内の兵を還し、帥あるところの軍勢を、尾、濃、三州にかぎつた。

二〇 再び浅井朝倉と對陣

信長は京都に入るや、二十四日には既に逢坂に向つた。浅井朝倉の兵は風を聞いて震愕し、悉く叡山に登つて鉢峰、青山、壺笠山に陣した。信長は下坂本に至り、佐久間信盛、稻葉伊豫をして、山僧に説かしめて、

「我に與せば内領を存して置く。佛道兵を容さず、與することできがたくば斷じて中立せよ。若し然らずして敵を庇はゞ、堂塔伽藍悉く焼き、山僧を咸く誅するであらう。」

といった。しかし山僧は左右を顧みて答へず、時到つて浅井朝倉を援けた。こゝにおいて信長は大に怒り、嚴重に山麓を取巻いた。

今その陣形を見るに、香取の館に平手監物があり、長谷川丹州があり、山田三左衛門があり、不破河州があり、丸毛兵庫があり、浅井新八があり、丹羽源六があり、水野大膳があり、穴太村には佐久間信盛があり、佐々成政があり、明智光秀があり、築田左衛門があり、塚本小大膳があり、苗木久兵衛があり、村井民部があり、進藤山城があり、後藤喜三郎があり、多賀新左衛門があり、梶原平次郎があり、永井雅樂助があり、種田助之丞があり、佐藤左衛門があり、中條將監があり、川尻與兵衛があり、田中村に柴田勝家があり、氏家ト全があり、伊賀伊州があり、稻葉伊豫があり、唐崎に佐治八郎があり、津田太郎左衛門があり、山西に三好爲三があり、香西越州があり、津田三郎五郎があり、これに加ふるに義昭勢二千を以てし、又、屋瀬小原にも山本對州があつて、しかして信長は志賀、宇佐

の二城に陣した。山本がしばしば火を山上に放ち、堂塔の灰となるもの漸く多きを加ふるや、初めは信長の言を恫喝に過ぎぬとしてゐた山僧も、今に至つてその言の眞實だつたのに驚き、信長を憎むこと非常であつた。しかも對陣すること二十餘日に及んでも淺井朝倉の兵が出て來ないので、十月二十日、信長は使を遣して、

「何等戦を交へず、徒らに時日を費すのは無益である。速かに出で、一戦せられよ。」

と申入れた。淺井朝倉はその言に答へず、かへつて朝倉は窃に和を請うた。だが信長は、

「敢て一戦して鬱憤を散ぜんのみ。」

といつて肯かない。

この時、本願寺光佐は淺井、朝倉及び叡山の僧と通じて人を江州に放ち、信徒を蜂起させて到る處に亂民を出した。時に秀吉は横山を出で、丹羽長秀と共に亂民を鎮め、馳せて志賀に到る途中、又しても亂民があつて、建部に寨を設けて途を阻んでゐるのに出逢つた。秀吉は長秀と共にこれを一蹴して通り、馳せて勢田に入るや、信長は志賀城に在つて遙見し、

「來たのは何者であるか。山岡美州が佐々木承禎を誘つて叛したのではなからうか。」

と疑つてゐると暫くして使者があつて、

「秀吉、長秀の兩名、我が君の急に赴いてござる。」

といひ入れたので、信長は大に悦び、諸陣も亦萬歳を號んだ。

淺井朝倉は出でず、山僧も下らず、我が軍の對陣三月に及ぶや、十一月二十五日、堅田の住人猪飼

甚助、馬場孫次郎、井初又次郎が來て、

「將を得て忠を竭したうござる。」

と申入れる、信長はそれを容れて坂井右近を將として一千餘騎をそれに附し、直ちに堅田へ遣はした。右近が堅田に着くと翌曉朝倉軍が來り襲ふ。右近はそれを見て大に戦ひ、敵將の首を取ることに數級に及んだが、敵は陸續として來り加はり、衆寡敵せず、遂に馬場、井初等と共に討死した。右近は老功の將であつたが、可成の後を追うたのは惜しむべきである。信長はこれ聞いてますます怒り、朝倉軍を鑿殺して右近の爲に報復してくれやうといきり立つた。時に雪大に降り、嚴氣たちまち昇つて凛烈いふべくもない。朝倉軍はそれを見て故國に通じ得ないのを憂ひ、義昭に懇へて和を請うた。そこで義昭がこれを信長に通じたが、信長は頭を掉つて應じない、義昭は已むを得ず天朝に奏したが、天皇これを聽し召し勅を信長に下し給うた。こゝにおいて信長は勅を拜し、朝倉氏と和して岐阜に歸つた。實に十二月十七日のことである。

二 長島の亂

秀吉が横山に歸り、残り少い冬を送つて、明くれば元龜二年である。正月も過ぎ、二月も過ぎ、三月、四月を経て、夏の五月を迎ふるや、その月の六日、大勢既に定まつて、策の施しやうもないのにそれを悟らぬ淺井長政は、また小谷を出でて姉川に至り、兵を横山に向けて秀吉に對し、別に淺井七郎に兵五千を授けて箕浦に遣し、城下に入つて火を放ち、狼藉を試みて虚の至るを待つた。この時秀

吉は先づこれを知り、窃に百騎を率ゐて間行して箕浦に至り、城守の堀、樋口と共に下長澤で戦つた。しかるに敵は五千、我は總勢五六百、寡を以て衆を伐つはおのづから易からず、樋口の麾下に在つた多良尾相州先づ戦死し、その士土川兵右衛門もこれを聞いて後を追うて戦死するなど、一時は少からず苦戦したが、敵は元より雑兵ばかりであつて到底我が敵ではない、たちまちこれを撃破し、再び間行して横山に歸つた。長政もそれを聞いて小谷に去つた。

こゝにおいて秀吉は長島征伐の命を被り信長に隨つて長島に出動した。長島の一族は元來が本願寺の信徒であつて、元龜元年の冬、信長の叡山對陣の虚に乗じ、光佐の命を受けて蜂起亂暴し、信長の弟信興を殺し、それよりなほ對抗してゐたのである。その城に據れるものは願證寺の僧證意といひ、その證意はこの時善く戦つた。長島は伊勢尾張の境に在つて木曾と長良の兩川に包まれた小島であり、伊勢に屬してゐる。五月十二日、信長は諸將を率ゐて津島に着し、營をこゝに置いた、秀吉が信長に隨つて出動したのはこの時である。信長は諸將と議して二方から進撃した。即ち太田口には柴田勝家、市橋九郎左衛門、氏家卜全、伊賀平左衛門、稻葉伊豫、塚本小大膳、不破河内、丸毛兵庫、飯沼勘平等進發し、中筋口には佐久間信盛、淺井新八、山田三左衛門、長谷川丹波、和田新助、中島豊後等が出向した。そして十六日には火を以て全島を包み、亂民から占據の地を奪つた。こゝにおいて亂民はみな山に登つて嶮に據つた。太田口から進んだ勝家等は前進して右に川を臨み、左に山を仰いだ山道に出會ひ、甚だ進軍に惱んだが、敵はこれを見て大に我を苦しめた。勝家は兵を回して自身が殿軍となつて戦ひ、遂に劊を被つた。卜全はこれを見て馳せ至り、勝家に代つて奮戦して命を殞した。同時

にその士のうちで卜全と死を共にする者が數人に及んだ。卜全は美濃三人衆の一人で、勇は伊豫には及ばなかつたが、智は彼に勝つた良將であつた。かゝる亂民の手に死んだのは處を得なかつたもので、惜しいことである。

この戦は、光佐の命に由る一種の宗教戦争である。形の上から見れば、微々たる長島一族に過ぎないが、その勢ひに至つては人心の奥底に潜在してゐる信仰心の爆發である。故に蓋世の英雄信長の勇威を以てしてもたやすく討滅することできず、秀吉ありといへども策の施しやうがなかつたらしい、そんな事情でもあつたか我軍は甚だ利あらずして終に退き九月に再び叡山に出兵した。

三 叡山燔燒

長島にてこすつた信長は、八月に江州に入つて小川城を降し、金森の寨を落して、九月十二日に叡山を攻撃した。これはほかでもない、昨年山僧が我が言に従はず、淺井朝倉に與したからである。この時佐久間信盛は言を極めて叡山攻撃の不可を諫めたが、信長は斷乎として聞かずに討伐した。十二日に我が軍が登つて堂塔を燒き、伽藍を灰にし、彼の所謂根本中堂二十一社靈佛靈社僧坊經卷を擧げて悉く烏有に託するや、堂塔は火柱をなして天に沖し、伽藍は猛火を四方に飛ばし、經卷は空に舞うて群鴉の狂ふが如く、靈佛雲に入つて煙花の開けるが如く、叡山の天は一面に焦灼して、琵琶湖の水は朱のやうになつた。これを見た山僧はみな股慄し、悸慄し、駭愕して爲すところを知らず、たゞ叫喊して遁逃するばかりである。だが鑿殺の令が下つてゐたので、道ぐるを追うて斬りまくり、數千の死

屍は累々山をなし、無数の美女小童の血は山下を指して瀧をなした。

叡山の慶殺、燔盡の擧は、信長に在つては年來の鬱憤を一日にはらしたものであるが、その功は彼の鬱憤發散のみには止まらなかつた。誠に國家の慶事であつたのである。假借に吝なる新井白石でさへも

「中世より叡岳の僧徒兵杖を帶し、動もすれば朝家を却し、代々の帝王將相畏れて、彼が申旨に任せられしかば、其の殘害すこぶる佛氏の所爲に非ず、然るに信長其の破戒無律を怒りて、遂に其の山を燒亡しぬ、其の事は殘忍なりと雖も、永く叡僧の兇惡を除けり、これ又天下に功あることの一なるべし。」

と稱してゐる。白石にして既にこの言がある。誰かこの事件に就て眞面目に批議しやう。然るに世には崖異を立てることを以て博識としてゐるものがあつて、動もすればこの擧を以て信長の惡虐と斷じ、秦の始皇が書を燔き儒を阮にしたことに比してゐるが、それは思はざるの甚いものである。僧侶が經卷を擲つて干戈を取り、或は剽掠し、或は篡奪し、いはゆる山法師と稱して良民を虐げ、王侯を惱ますこと、中世からこのかた幾たびであつたか知れない。籍は桑門にあるといつても、實は名を伴り、度を僞はつた惡黨である。彼の本願寺が干戈を執つて信長に抗し、諸侯と約應して四方を煽動し、相雄して相下らないのは、これ又山法師の流亞を學んだものではないか。當時武家の勢威はしかく赫々として攻伐殆ど寧日がなかつたにも拘らず、この間に在つてなほその大立者たる信長に抗することを見れば、誰かその僧侶の不逞を思ひ、その因果の明顯を知らないでをらう。信長の討夷は佛罰を僞僧

に行つたものであつて、彼は鬱憤發散であるとしてゐるが、その結果は天下後世の慶事であつた。けだし寺家支配の殘骸が武家に燔燒されたものである。

三三 幕府及び淺井朝倉の敗亡 (一)

國交は虚禮であり、公法は死約である。之を實禮にし、之を活約にするのは、外交家の手腕に在る。とはいへそれも或期間のみである。

去冬聖旨を蒙つて和を講じた織田氏と江越とは、果して死約の名を發いた。數箇月にしてその約は空しく、その禮は破れ、干戈が再び徒らに用ひられて、百士萬卒、骸骨を道路に曝して、織田氏に又一段の名を爲さしめたのである。

淺井の威勢が振はなくなると、その麾下の士で信長に降る者が、有名無名陸續としてあつた。堀、樋口は姉川の役に先つて降り、磯野丹波も亦二年二月に城を開け渡した。およそ淺井方の有爲の士で日に月に降らないものは殆どないといふありさま。そこで長政は大に怒り、五月、兵を出して先づ堀、樋口を箕作に攻めた。これが死約の名を發いた端である。この時秀吉が百人ばかりで撃破したのは前述の通りである。

再戰の端はかくの如くにして發かれ、八月に信長は兵を出して志村を攻め、小川を圍み、金森を燒いて兵を收め、元龜三年三月、小谷を攻め、長政が出て戦はないので、兵を横山に收めて上京し、五月、に岐阜に歸つた。しかるに六月、三好と松永とが遊佐河州を使喚してその主畠山高政を弑し、且つ

叛臣が城を奪つたので、兵を出してこれを落した。この時秀吉が援兵を率ゐて高屋に至るや、長政はこれを見て兵を出して横山を圍んだ。けれども城代に竹中半兵衛重治があつて、能く防ぎ能く戦ひ、長政を奔命に疲れさせた。時に秀吉が又高屋から歸つたので、長政は風を聞いて小谷に退いた。七月、信長は軍を帥ゐて横山に至り、二十一日、小谷を攻むるや、秀吉は信盛、勝家、丹羽長秀等と共に兵を虎御前山に出し、更に自ら一隊を以て阿閉の山本山を攻め、火を放つて戦ひ、首級を取ること五十餘であつたので、信長はこれを見て大に賞した。

廿三日、信長は越境、與語木に放火し、堂塔伽藍一字をのこさず燔いてしまつた。二十四日には亦草野の谷に放火するや、百姓は急を聞いて馳せて大吉寺を守つた。信長は秀吉に命じてこれを攻めさせた。大吉寺は山頂に在つて道頗る峻である。秀吉は石を抱いて背面から登つて攻め、百姓、僧侶を斬つた。信長は更に明智光秀、山岡玉林等に命じて鹽津浦、竹生島を攻め、それより兵を四方に派して田野を刈り、六穀を滅して糧を缺がせた。

長政が如何に固守するといつても、ことごとくに至つては、大敵の虜となるばかりである。廿七日、信長が虎御前山に寨を築くや、これより先、長政が再び朝倉に援兵を請うたところ、義景は一萬五千を帥ゐて來り應じ、同月二十九日、高山に陣した。信長は使者を義景に遣して、

「遠路のところ、さぞお疲れでござらう。日を期して雌雄を決しやうではないか。」

といつたが義景は應じなかつた。そこで信長は、秀吉に虎御前山を守らしめ、自分は退いて馬を横山に休めた。これより彼我共に卒伍をして、しばらく小鬪せしめたが、未だ大戦なく、又冬を迎へた。

この時に當つて天下の視目は信長に集り、彼を僞せば必ず覇たらんと、苟も鹿を逐ふの資格あるものはみな合従して信長を僞さうとした。足利義昭はその盟主たらんと欲して窃に諸侯を糾合した。先づ書を武田信玄に與へて遙應を促すや、信玄は快諾し、直ちに朝倉に密謀して信長挾撃の計を立て、奮揚して甲州を出た。これ十二月下旬である。義昭が信長の後援に由つて將軍となつてゐながら、今信長を失はんと欲する所以は、實に信長が義昭から政權を奪ひ、義昭に虚位を擁させたからである。

〔附言〕 信長公記に、信長が高屋城を攻めるに當つて、森可成、阪井右近をその列に入れてをるが、可成、右近は前年淺井朝倉を叡山に圍んだ當時相前後して戦死してゐる。牛一の記するところは、鬼か靈か、或は又魂魄か、決して正體のあるものではない。

二四 幕府及び淺井朝倉の敗亡 (二)

信玄が甲州を出て遠州に入るや、家康は信長に急を報じて援兵を請うた。信長は信盛、監物等を遣し、家康と共に信玄が三萬の大軍を拒いだ。信玄は勢ひ破竹の如く、二股城を落し、身方原に勝ち、越年して岩村を攻め、吉田を圍み、さすがの家康をして、窘窮せしめた。しかるに信玄は中途にして病を得、兵を收めて國に歸つたが、未だ國に入らずして死んでしまつた。これ實に天正元年四月のことである。

義昭は既に信玄と約し、淺井朝倉と通じてゐたので、二月には石山と堅田に寨を築いて信玄の到着を持つてゐた。信長はこれを見て怒髮天を衝き、光秀等を出して石山、堅田を撃破し、三月京に入つ

て二條を圍み、洛中洛外に放火して義昭を困惑させた。義昭は殆ど爲すところを知らず、遂に哀訴して和を請うた。信長はそれを容れて軍を還したが、喉元過ぎて熱さを忘れるとは將軍義昭のことであつて、昏愚にして形勢に通ぜず、人を見るの明に乏しき彼は、四月に哀訴して和を請うてゐながら、七月には又信長を討たんとし、兵に將として眞木島へ出て、京師は日野大納言、高倉宰相等に守らせられた。信長は之を聞いていよく怒り、同月七日入京して又二條を攻め、日野や高倉の涕垂公卿を一蹴し、十六日には宇治川の激流を涉つて眞木島を攻め、一戦の下に義昭を捕へ、秀吉に命じて河内の若江に幽閉させた。最初義昭が信長に憑つて京都に入るや、道路の人は驩慶如として彼を迎へた。然るに今や如何といへば、京童は檻車を見て、

「貧乏公家が往く、貧乏公家が往く。」

といつて嘲笑した。全く翻雲覆雨は人生の常ながら、昨日は驩慶如として迎へ、今日は嘲笑して送る、その人心の輕薄さ實に紙よりも甚しいではないか。けだしこれといふのも義昭の昏愚が自ら招いたものである。足利氏は尊氏が將軍となつてから義昭に至るまで十五世、年を歴ること殆ど二百四十年、その間兄弟相争ひ、父子相攻め、君臣相伐ち、倫道、義理、空焉たるものであつた。天正元年七月を以て足利氏の亡んだのも、また天命の致すところであつたのである。孟軻氏をして言はしむれば『上下交々利を征りて其の國危し、萬乗の國、其の君を弑する者は千乗の國、千乗の國、其の君を弑する者は、百乗の家。』といふであらうが、歴史はさやうな道徳行爲で展開してをるものではない、けだし足利氏も亦分權國家から集權國家へと轉向してゆくその間の史的役割を演じたものである。集權國家へ

の道途の犠牲者といふべきである。

二五 幕府及び淺井朝倉の敗亡 (三)

信玄が死に、幕府が減じたことは、淺井朝倉に取つては一縷の光明を失つたことであつた。これに反して信長はいよく征夷大將軍となつて赫々たる名を有し、淺井朝倉には揚々の氣がなかつた。七月二十六日、信長は京を退いて江州に至り、木戸、田中の兩城を降して光秀に賜ひ、進んで高島に至つてその地を焼き、八月四日に岐阜に歸つて、八日に又出陣し、阿閉の降を容れて月瀬の城を收め、十日、總勢を出して山本山に陣し、朝倉の歸路を斷つて彼れを捕へんと計り、刻々に朝倉の營に攻め近づいた。これより先、秀吉は若江を去つての歸途、淀城を降し、今すなはち江北に來てゐた。十三日、風雨頻りに至るや、信長は諸將をあつめて、

「義景は今夜風雨に紛れて退くであらう。汝等宜しく彼を虜にすべし。」

といつた。秀吉等は信盛を先鋒とし、勝家、一益、頼隆、秀吉、長秀、稻葉、さては蒲生父子から降將阿閉に至るまで順次に隊を組み、義景を捕へて殊功を立てやうと意氣ごんだ。然るに夜に入つて信長は焦慮し、先鋒の諸將に先んじて攻め至つた。諸將はこれを聞いて駛つて跡を追ひ、地藏山を越えて漸く信長に會つた。信長は諸將を見て叱つていふ、

「しばし先鋒を命じたるに、汝等みな予に後る、甚だ奇怪でないか。」

秀吉、勝家、一益、長秀等口をそろへて謝していふ

「臣等命を怠つて君に先驅せらる。何を以てか面目を施き申さう。」
この時信盛は涙を流して曰く

「君のお言葉は餘りに慘酷でござる。今少し緩かにあらせられよ。惟ふに臣等は得易からざるの才でござる。一たび失はゞ再びは獲難し。」

信長聞いて眼を瞋し、

「汝自ら汝の才に誇るも、汝に何の才かある、笑止千萬な言草である。」

疍癩將軍の氣象を知れる諸將は事態大變を見て取つて信盛を控へて事なからしめ、直に進發して朝倉を攻めたが、義景は果して已に退却し、相戦つた者は殿軍のみであつた。江州から越州に通ずる道に、中野河内口と、刀根口との二つがあつた。敵は今二道から走つてゐるので諸將は、義景が何れを行きつゝあるかを知ることができない、追撃を遂巡してゐると電光の如き戦眼を有する信長は直に鑒て、

「義景は必ず敦賀に行くであらう。それ利根口から追へ。」

といひ、ひた走りに追ひ驅けたところ、義景は果してその道にゐて、河内口は雑兵ばかりであつた。信長が追撃して刀根山に至つて敵に逼るや、義景は猛士を残してこれを拒ぎ、自分は遁逃して敦賀に入つたが、信長の追撃が急で籠城することができない、そこで更に走つて一乗合に歸つた。信長は敦賀を落して三日の間そこに在つて馬を休め、十八日に龍門寺に軍した。これより先、越軍中の刀根、敦賀の間で戦死したものの三千人、永祿七年に稻葉山を脱出した亡命將軍龍興なども亦實にこの中にゐた。宗族、宿將殆ど亡びて孤懷寥々たる義景は、一乗谷をも支へることができず、またく脱して、

山田庄六坊に匿れた。然るにこゝに同族の朝倉景鏡なるものがゐて、義景に自裁を薄つた、義景も今はこれまでと首を景鏡に與へた。景鏡はその首を携へて信長に降つたが、信長は義景の族を斷滅し、義景の首を京師に梟した。

信長は越前を平げて兵を江北に還し、同月二十七日、秀吉に小谷を攻めさせたが、秀吉が先づ久政を攻むるや、久政は堪へずして自盡した。秀吉は轉じて長政を攻め、越前の平夷、久政の死を告げて長政に降を諭したが、長政は聽かず、妻子を秀吉に寄せて信長に送らせ、二十九日に自盡した。信長は浅井父子の首を京師に梟し、又長政の嫡子を探し出して關ヶ原に磔し、九月四日、更に鯉江を圍んで、佐々木義弼を攻めた。義弼は一旦降つてまた背いたものであるが、この時遂に支へることができず、城を開けて出奔した。回顧すれば永祿十一年以來、信長對佐々木、浅井、朝倉の攻争はまさに六年に及んだ。承禎、義弼、久政、長政、義景、景恒等は俊傑といふべきものではないが、しかも英雄信長に抗してしかく數年を支へたことは、けだしその一族がその他に在つて、民と主と相結び、それに次いで光佐の煽動があつたからである。

二六 幕府及び浅井朝倉の敗亡 (四)

信長の名が漸く聞える比に當り、浅井に明智の宿將があつた、磯伯州といふのがそれである。伯州は一日、天下の趨勢を觀じて、

「今や足利氏は衰へてしまつた。取つて代るものが出ない筈はない。朝倉氏は越前に在り、我が主

は近江に在つて、みな物にその隙を覘つてゐる。しかも他日天下を取るものは必ず信長であらう。果してしからは信長と結ぶが最も得策であらう。」

といひ、かねて病氣であつたのを幸ひとし、富士詣に託して清須に入り、信盛に頼つて信長に謁し、その妹を長政に請うた。これ實に永祿元年であつて、信長が二十五歳の時であつた。翌年信長妹を長政に配して浅井と婚姻した。しかるに久政は時勢に通ぜず、一朝の叛に由つて、その家を亡ぼし、彼の伯州の志を空しくした。長政は驍勇にして、能く一國に主たるに足つてゐたが、事務には明かならず、之がその家を亡ぼした原因であつた。但し朝倉氏に義を致して終始志を變へなかつたのは、人事を盡したといふべきであつて、その志を悲しむべきである。

義景は又一時の傑ではあるが、人を見るの明を缺いてゐた。信長を京都に入れない前に信長と戦つたならば、いざ知らず、既に京都に入つて事實上の副將軍となつてからこれに對するのは、龍を雲に乗せて下から射るものである。何ぞ地中において斬らなかつたか。その家を滅ぼしたのは、自ら招いたのである。龍興が亡命して十年、終に忠を義景に致して死んだ。けだしその道三の纂弒の家たることを願れば、これ亦天命に非ざるなきか、佐々木父子は主家の窮を顧ず、かへつて義昭の依憑を避け、これを追うて憚らず、他日義昭の亡命に倣つたのは、自業自得といふべきのみ。觀じ来れば江南、江北、越前の亡滅は、信長が強かつたが爲ばかりではない。けだしこゝに至つて信長は幸運の士である。足利氏が自ら招いて先づ敗亡し、江越がこれに次いで亡滅し、眼中の一人たる信玄は往生し、海道、畿内、北陸自ら夷平して彼の手中に入つた。北條氏ありといへども虎踞するばかりで、上杉、島津は

道遠く、毛利、長曾我部は未だ出づるの勇氣なし。この時に當つて天下に號令するものは信長に非ずして誰であらう。まことに天下の權は果して彼に落ちた。これ實に天正元年のことで、信長の記念せねばならぬ年であつた。獨り信長の記念すべき年たるばかりでなく、彼の藤吉郎秀吉にも亦大に記念すべき年であつた。すなはち彼はこの年の九月、小谷を賜うて二十二萬石の大名となつたのである。信盛、勝家等の勇將があるのに、彼はそれに超えて、能く疍瘡將軍を撫し、宿將世臣を凌いでこゝに第一の寵將となつたのである。これを記念せずにはゐられようか。

著者は曾て我が戰國を支那の戰國に比べ、上杉を燕とし、武田を韓とし、北條を趙とし、毛利を齊とし、島津を楚とし、長曾我部を魏とし、しかして織田氏を秦とした。地の利から視る時はもとより異なる點があらうが、形勢に繋いで視至れば當らすといへども遠からず、始皇は六國を討平して天下を取つたが、信長は六國存亡の岐路に飛躍し、突破して天下の權を握つた。始皇は天下を荒療治した。信長も亦荒療治した。しかく較視を試みて敘さうとすれば、相似たものが少くない。時運が人を驅つて相似せしむることの東西となく相同じきは、洵に奇といふべきである。

二七 長島の鏖殺

天正元年九月以後の信長は、また九月以前の信長ではない。彼の兵を行るや、烈風の枯葉を拂ふが如く、往くところとして易々たらざるはなかつた。これけだし勢威が倍加して自ら人を懾服せしむる力があるからである。

この月二十四日に信長は北勢に入り、信盛、秀吉、頼隆、長秀に命じて西別所の亂民を誅し、勝家、一益をして阪井、深谷部の兩城を降さしめ、十月八日、伊阪、赤堀、田邊、桑部、南部、千草等の新附を容れ、また信盛、頼隆、長秀、秀吉を以て中島將監を白山に攻めて難なくこれを降し、同時に光秀をして山本對州を京都靜原山に自裁せしめ、二十六日、岐阜に歸るや、途中で長島亂民の追撃に逢ひ、少からず死傷を出した。しかも十一月四日、京都に入つて信盛、久秀、筒井順慶を若江に遣して三好義繼を攻めて殺し、二年正月、秀吉、長秀を越前に遣して暴徒を鎮め、二月、高野に城き、三月、奈良に至り、五月、三州に家康を援け、六月二十三日、復び長島を征した。長島の族は、さきに對抗して以來、今に至るまで四年に及んだ。その間信興を殺し、ト全、新三郎を討ち、勝家、伊州を傷け、これに附した士卒を數知らず屠つた。大軍を提げて大戰するに熟し、小勢を以て奇捷に長じ、行く處として可ならざるなき信長にして、この一族にてこすることかくの如くであつた。我が族殺され、我が將の討たれた信長は憤怒、心頭を放れず、微々たる長島の一族に對し、大軍を催して總攻撃を開始した。これ實に天正二年六月二十三日の事であつて、二度目の血戰である。長島は天險にして近づき易からず、今の如き機械戰ならば、朝飯前の勞をも要さないが、古への腕力戰に在つては、その要害は一層の力を爲したであらうか。信長は陣を三方に布き、東一江口には嫡子菅九郎を遣し、これに織田上州、津田又十郎信成、同じく孫十郎、齋藤新五、築田左衛門太郎、森勝藏、坂井越中、池田勝三郎、長谷川與次、山田三左衛門、梶原平次、和田新介、中島豊後、關小十郎、佐藤六左衛門、市橋傳左衛門、塚本小大膳を附し、西賀島口には信盛、勝家、稻葉伊豫、同右京助、蜂屋兵庫を配し、自身は中筋はや

を口に出して十七將を率ゐてゐた。その先鋒は木下小一郎で、次には淺井新八、丹羽長秀、氏家左京助、伊賀伊州、飯沼勘平、不破河内、同じく彦三、丸毛兵庫、同じく三郎兵衛、佐々成政、市橋九郎左衛門、前田利家、中條將監、河尻與兵衛、津田信廣、飯尾隱岐等が在り、かくして三方から圍み、一人たりとも出ることを許さず、加ふるに大河内城主茶筌丸を首め一益、監物、伊藤三亟、島田所之助、林佐渡等、伊勢の諸城主を催して海上から包圍した。長島は一小島に過ぎない。織田の大軍が押し寄せるや、あたかも蟻が小果に集つたが如く人で以て黒くなつた。戰は先づ西から始まり、西面の諸將は松木を蹂躪した。これに次いで本隊の諸將は小木江を撃破し、進んで小田岬川の堤上を掃ひ、海老江かると、いよいよの諸島を焼いた。一族頑民はこれを見ていづれも篠橋、大鳥居、屋長島、中江、長島の五島に籠つた。信長は長圍を命じた。そして八月に至つて二日の夜、大鳥居の一團が風雨に紛れて城を落ちるや、これを追撃して斬ること一千人、九月に入るや、攻圍既に四ヶ月に及び、亂民の糧食盡きて餓死するもの過半に及ぶ、二十九日、長島の一團が降を請ひ、城を開けて出でんとするや、信長はその降を容れ、欺いて舟に上せ、降人のみな舟に乗り終りたる頃を見はからひ、筒を揃へて撃たせ、刀を振つて斬らせ、その夥しき慘死者は死魚と化し水上に浮び、水は變じて朱の如く、悽愴目もあてられぬほどであつた。そこで七、八百の降人は大に怒つて、裸體となり、刀を振つて攻圍軍に薄まり、縦横に斬り立て、遠く大阪に逃れた。この時、我が軍の戰死したもの甚だ多く、信長の庶兄信廣、庶弟秀成、從弟信成等はみなこれに死んだ。信長はこれを見て怒髪天を衝き、直ちに中江、屋長島を攻め、數重の柵を以て圍み、一齊に関を作つて火を四方から放ち、兩砦の男女二萬人を燔殺し、

未一日一舉にして長島を平げた。
さるにても微々たる一族を以て蓋世の英雄を惱し、これに抗して四年間を支へた他力安心の信仰力はまた恐るべきではないか。

二八 長篠の血戦 (一)

秀吉は越前を鎮めて小谷に歸り、その春居城を今濱に築いて長濱と改め、小谷から移り住んだ。七月に脱將樋口某夫妻を斬つて首を長島の信長に送り、翌年五月に至つて始めて長篠の役に参加した。信玄死して雄圖は亡んだが、それでも、その子勝頼はなほ剛勇である。世臣、宿將と議して南下を圖り、しばし遠参尾濃に出て織田、徳川を脅した。長篠の戦も亦その計畫の中に在つたのである。この役の端は長篠城の攻守に發した。長篠は參州南設樂郡に在る。城は豊川の上流たる瀧川と大野川の會合のあたりに築かれ、この二川が既に天然の城壕をなし、東南には般若山の連峰があり、北には大通寺山、醫王寺山があり、古昔の守城としては最も適當なもの一つであつた。城の西南に原野があつて、これを設樂原といつた。龍攘虎鬪の活劇は實にこの原野においてあつたのである。

長篠城は、初は武田に屬し、天正元年に徳川が奪取し、先づ松平景忠、同じく家忠を入れ、後、奥平貞昌を守將とし、景忠、家忠を副將として武田の襲撃に備へた。貞昌は智勇兼備し、能く事に耐へる良將である。家康が貞昌を送つたのは、適材を適所に置いたものであつたらう。果して勝頼が一萬五千の大兵を以て天正三年五月八日から十四日に亘つて攻圍するや、城兵は色を失つたが、貞昌は獨

り自若としてこれを指揮し、その夜衆をあつめて、

「兵器彈藥は甚だ豊かであるが、糧食は五日を支へるばかりである。誰か城を抜け出て使命を岡崎に全うするものはないか。」

といふ。衆は相ひ顧みて一言もいふものがなかつたが、時に一人末座より出でて

「某その任に當り申しませう。」

といふ。顧みれば鳥居強右衛門勝商である。貞昌が使命を託すると勝商は、

「首尾よく城を脱し得たら雁峰山に煙を揚げませう。歸來の日も同様にいたすでござりませう。」

といつてその夜野牛門を出て河中に飛び込み、刀を以て索を断ちつゝ下流に去つた。索は敵が鈴を付けて水に投じたものであるが、こは脱走者を警しむる爲めのものであつた。勝商はこの警めから脱れて翌日の未明には廣瀬に着し、山に登つて煙を揚げ、直ちに馳つて岡崎に至つて、家康に面會し、

「糧食は將に竭きんとしてをります。三日を過ぎても援軍到らぬやうでは、主將は必ず死を以て城兵を救ふことござらう。」

といふ。家康それを聞いて、

「その方の使命は誠に忠義の至りである。織田氏が既に大軍を催して來り着してをる。汝を信長に見えさせやう。」

と勝商を伴うて、共に信長に面謁した。信長も亦勝商を見て、

「その方の行あつばれの忠義、予は明日出發する、その方も予に従つて歸るがよい。」

といふ。勝商は、

「城兵は一日千秋の思ひで待つてをりまする、速かに歸し給はれ。」

といふ。信長はその意を諒として、勝商の欲するまゝに任せた。勝商は信長の諒解を得たので、直に辭し歸つて雁峰山に登り、又煙を揚げて使命を果したことを告げた。これは十六日の早天であつたが城兵が煙を見て歡呼すると、敵も亦その煙を見て、

「前日煙が揚つて城が動搖し、今日また煙があつて動搖してをる。こは必ず脱走者があつた爲であらう。」

といひ、命を傳へて監視を厳しくした。勝商は歸るには歸つたが、城に入ることができない。已むなく擔夫に混つて隙を覘つてゐたが、そのうち運わるく敵に發見されてしまひ、捕へられて主將勝頼の前に引き出された。勝頼が種々訊問すると勝商は包まず隠さずあり體に答へた。勝頼はそれを聞いて憎むよりはむしろその忠誠を嘉して

「その方、今、城中に報告するにあたり援兵は來ない、速かに降參するがよいといへ、さすれば汝を重く用ふるであらう。」

といふ。勝商は伴り諾して監卒と共に城外に至り、大呼して曰く

「援軍の城外に達するは三日を出でない。諸子よ請ふ努力せよ。」

城兵はこれ聞いて歡呼喝采した。これに反して監卒は大いに驚いて勝商を羅し去り、その由を勝頼に告げた。勝頼は聞いて大に怒り、勝商を篠場野において磔殺した。こゝに至つて事は詩境に入る。

甲軍の士に安田某なる者があつた、勝商が磔にされた十字架の下に至り、仰いで死せる勝商に對し、生けるものにいふやうに

「鳥居殿、今日のお有様實に萬世の鑑でござる、それがし失禮ながらこのお姿を畫いて後世子孫に遺したし。」

といひ、神をこめて磔刑の狀を描き取つた。勝商がいゆる鼎饗甘きこと飴の如しといった概で、從容死につける有様は安田某に由つて後世に遺された。勝商の如きは眞勇士と云ふべきである。

二九 長篠の血戦 (二)

十八日、家康は八千を率ゐて設楽原に陣し、信長は三萬を帥ゐて同日同所に着した。家康は彈正山を占めて、信康を松尾山に置き、信長は極樂寺山に居て信忠を天神山におき、信雄茶丸を御堂山に登せ、信盛、信輝、長秀、一益を茶磨山に入れ、且つ信忠に河尻秀隆を附し、信雄に稻葉一鐵伊豫を置き、自身は勝家を從へた。家康は彈正山の東方に二十四將を配した。即ち大久保忠世、本田忠勝、菅原康政、石川數正、平岩親吉、酒井忠次、鳥居元忠、内藤家長、松平忠次、本多廣孝、柴田康忠、菅沼定利、松平清宗、同眞乘、三宅康貞、高力清長、大須賀康高、本田重次、小笠原安廣、戸田忠次、松下信一、本多信俊、同忠次、酒井正親がこれである。信長も亦六將を布いた。水野信元はその一であり、安藤範俊がその二であり、蒲生氏郷はその三であり、森長可がその四であり、不破光治はその六であり、しかしてその五は實に秀吉であつた。近畿の兵は多くこの列にゐた。勝頼は勝商に由つて、

援軍の至るを聞き、諸將を集めて軍議したが、馬場美濃守信春は兵を還すことを獻じた、時に嬖臣があつてそれを不可とし、強ひて勝頼の勇心に投じた。勝頼は嬖臣の言を可とし、二十日に至つて小山田昌行、高阪昌澄、室賀信俊に二千人を附して長篠を監視せしめ、高巢山の壘に千人を遣し、その餘を四隊に分つて清井田に出た。穴山信君、馬場信春、真田信綱、同じく昌輝、土屋昌次、一條信龍に三千を附して淺木にをらしめた。之が一隊である。二隊は武田信廣、内藤昌豊、原昌胤、安中景繁、和田業繁に三千人を附して下下に陣せしめ、又三隊として、武田信豊、山縣昌景、小笠原信嶺、松岡右京、菅沼定直、小山田信茂、跡部勝資、甘利信康、小幡信貞、同じく信秀にも亦三千を附して清井田の南方に置いた。最後に四隊として自ら三千を取つて本隊を編み、望月信雅、武田信友、同じく信光を従へて有海の西方に控へた。信長は諸將と議して、

「勝頼は進むを知つて退くを知らず、かつ能く馬を用ひるから、戰場に柵を回らして馬を防がうか。」といつたところ、衆みな賛成した。酒井忠次が別に支隊を編んで高巢山を襲はんと請うたので、信長はこれを許した。忠次は兵を率ゐて峻坂を上下し、巖巖を攀躋し、羊腸の路を匍匐して高巢に至り、二十一日の未明にその壘を襲つた。守將は驚き戦つて死し、守兵は壘を焼いて去つた。高巢陥るや、これに連つた君が伏戸や姥ヶ懐の如きは、忠次の踵を回すを待たずして落ちた。この時勝頼は高巢を遙見してその奇襲に驚き、俄に令して進撃を開始した。これ二十一日午前五時である。天日は既に空に懸つてゐるが、朝露はなほ草に在つて、人馬は露を蹴り、鎧甲の匂は鮮かであつた。この時に當つて誰か戦敗の勝頼に在るを豫期したであらう。

三〇 長篠の血戦 (三)

甲軍は疾驅してせまり來り、その先鋒の山縣隊が先づ徳川軍に突撃して、わが大久保隊と激戦した。信長は家康の陣地に來つて高松山に登つて令するや、鐵砲、鐵砲と連呼して成政、利家等の砲隊を勵ましたので、成政等は終始砲撃して戦つた。敵はその彈雨に堪へず、山縣隊先づ破れ、つゞいて小山田隊、小幡隊はみな大久保隊に撃たれた。同時に内藤隊も亦織田軍に當つて撃破され、馬場隊も信盛等と衝突した。この時信盛が伴り敗れて柵の中に逃入るや、信春はそれを見て進まず、信綱、昌次をして大に闘はしめ、將に柵を破らんとした。秀吉はこれを見て勝家と共に側面から攻撃し、信盛の急を救つた。馬場隊は側面の敵を受けて甚だ艱み、信綱、昌次はそのため死んで隊はみな敗走した。これより先、秀吉が戦線に出て士卒を指揮して柵を結うてをると、昌景遙にそれを見て、

「彼は尋常の士でない。襲つて燈せ。」

と已れ先づ馬上に立つたが、その時飛丸いづれより來つて昌景を燈した。昌景既に死し、しかして信綱、昌次これに次いだ。敵は三將をうしなつて兵氣とみに衰へた。

勝頼は三隊を破られて、餘すところは自身の率ゆる一隊のみ、今やその本隊を叱咤して我に當り、奮揚して激戦したが、衆寡敵せず、信春が馳せ至つて退却を勸めたが、さすがの猛將も勝味なしとさつたか馬を回して却走した。成政それを見て追撃を獻じ、信長賛成し、眞ッ正面から追撃し、家康もまた側面から追撃した。敵は追撃の急なるに狼狽し、大に散亂したが、信春はこれを見て馬を駐め

て我を拒ぎ、主將勝頼の遠く見えなくなるまで戦つて死んだ。甲軍は方向を鳳來寺山に取つて敗走したが、瀧川に阻まれて同志相打ち、かつわが追撃隊の薄り撃つや、水に溺れて死する者幾千人、その數を知らないほどであつた。こゝにおいて長篠監視隊もまた退却したので、貞昌はそれを見て城を出でて追撃し、昌澄等二百餘人を燈して凱歌を揚げ、進んで久間山の城を落した。

勝頼は急激なる追撃に遭ひ、二三騎と共に疾驅して辛うじて武節の城に入つた。この日の戦は、午前五時に始まつて午後三時に終つたが通計十時間の快戦であつた。わが軍の獲た敵の首級は一萬餘であつて、わが死傷も六千に達した。敵は來着した時には一萬五千人であつたが、敗走して故國に入つたものは三千に過ぎず、首級の一萬が我に在るのであるから、不明の二千は或は瀧川の魚腹を肥したのかも知れない。

この役を評する者に、

「織田、徳川の軍は合して三萬八千人、甲軍に至つては一萬五千人、衆寡の敵せざるは既に知れてゐたのである。」

といふがあり、或は

「信春が城を落してそれに籠るべしと主張したるに、その議行はれず、これが敗因である。」

といふがあり、或は又、

「甲軍が河を涉つて設樂原に出たのが、そもくの失敗である。」

といふがある。しかし著者はそのいづれにも首肯できない。武田の敗戦の直接原因は形勝の地を占む

るを怠つたこと、砲戦に對して騎兵戦で應じたことである。著者は織田氏の戦勝を見ることに、彼の時代に當つて卒先、銃砲を用ひ、常にそれを豊富にし、技術も亦人に超えてゐた。これが戦勝の大理由をなすのである。と思考してゐたが、今長篠の役に見て、いよくその然ることを知つた。

〔附言〕長篠合戦物語は記するところ詳ではあるが、半ば信ずることができない。蘆田記にはこの決戦を二十一日とし、諸書はみな二十一日としてある。著者は二十一日説を取つた。

三一 北陸の亂

長嶋役の後、長篠役の前であつた、信長はいはゆる徳政を行つて公卿の困窮を救ひ、また三好笑岩を高屋に圍み、或は天王寺に軍して本願寺を攻めた。本願寺攻撃は三年四月十三日、當日の軍は十萬と稱し、天下の耳目を聳動した。けれども此の時は利すること甚だ多からず、二十八日に岐阜に歸つた。長篠の役は實にその翌月であつたのである。

長篠の役の後、信長は參、遠の兩國を家康に與へ、六月二十七日に入京して別所小三郎等の新附の諸將の調を受け、七月三日、禁闕に上つて、蹴鞠を陪觀した。その時勅命あつて官位を陞進せられんとしたが、信長はたゞ四五の宰臣に請うて、自分は固辭した。そこで有閑は宮内卿法印となり、夕庵は二位法印となり、光秀は惟任日向となり、築田左衛門太郎は別喜右近となり、長秀は姓を惟任と賜つた。この時秀吉も亦從五位下に敘し、筑前守に任ぜられ、その氏稱を羽柴と改めた。羽柴とは丹羽長秀の羽と柴田勝家の柴とを一字づつ請うて名づけたのだとの傳説があるが、これは少々疑はしい、秀

吉は當時既に小谷、二十萬石の大名である。長秀、勝家の下風に立つてはゐない、その秀吉が兩人の猛勇に肖かるなどといふことはないはずである。丹波多紀郡の八上村を、土地の人は羽柴實原といつてゐたとのことである。羽柴の氏稱は多分この郷名から取つたものであらう。由來の俗説は信するに足らない。

八月、信長は一向宗の亂民を討伐せんとして、軍を帥ゐて北陸に向つた。その月の十三日、信長が小谷に至るや、秀吉は彼を迎へて犒ひ、且つ總軍に食を供した。信長は感悦して翌日敦賀に出でてここに營し、全軍を指揮した。この時秀吉も従ひ行き、諸將の列に在つた。亂民の城砦に籠つたありさまは、虎杖には下間和泉以下の宗徒あり、本目峠には本覺寺、西光寺の宗徒あり、鉢伏には杉浦壹岐、阿波三郎兄弟以下の専修寺眞宗寺の宗徒あり、今庄火燧には下間筑後以下の起勝寺、興行寺の宗徒があり、杉津には七里三河守、堀景用以下の圓強寺の宗徒があり、龍門寺には三宅權之丞があり、加ふるに加越二州の亂民が命を彌陀に捧げて、上記の諸將と共に死守してゐた。

十五日に信長は三萬人を遣はして先づ杉津を攻めた。こはけだし堀景用が本願寺と善からずして、信長に内應の約を結んだからである。當日の先鋒は越前の浪人である前波九郎兵衛父子、富田彌六、毛屋猪介等で、これに次ぐに、信盛、勝家、一益、秀吉、光秀、長秀、別喜右近、細川藤孝、原田備中、蜂屋頼隆、荒木村重、稻葉一鐵、同彦六、氏家直重、伊賀伊州、礎部丹波、阿閉淡路、同孫五郎、不破河内、同彦三、武藤宗右衛門、神戸信孝、津田信澄、織田上州、北畠信雄等があり、又海上に別働隊があつた。粟屋越中が若州の兵を催し、丹波の一色が丹波の兵を募つて、津々浦々に放火したのが

それである。この日秀吉は最も善く戦ひ、光秀と共に首級三百を取り、且つその城を燔いた。又その夜府中に往つて木目峠、鉢伏、今庄、火燧の脱走者二千餘人を斬つた。阿波兄弟は罪を謝したが、信長許さず、原田備中にこの兄弟を自裁させた。十六日に信長は敦賀を發して龍門寺に行つたが、この時下間筑後、同和泉、専修寺の僧徒等は既に敗れて山中に在つたのを、朝倉孫三郎人を遣してこれを捕へ、その首を斬つて信長に獻じ、そして自分の罪を謝した、が信長は聽かずして自裁させた。十八日には勝家、長秀等が鳥羽を破つて首級六百を得、十九日には金森五郎八、原彦次郎の送つた捕虜一萬二千を斬つた。亂民はこれを見て震懾し、殆ど鎮定するに至つた。信長は九月二日に北庄に入り、諸將の功を論じて賞を行ひ、越前を勝家に賜うて彼れを北庄に置き、利家を府中に置き、金森、原を大野郡に置き、江藤三左柴田衛門を敦賀郡に置きこれ等をして勝家の旗下に屬せしめた。又別喜右近には金澤を賜ひ、佐久間玄蕃には尾山を賜ひ、佐々成政には小出を賜うた。かくして信長は同月二十六日府中を出でて岐阜に歸つた。これより先、信長が北庄に在るや、賀州奥郡の亂民が又蜂起した。秀吉はそれを見て

「天の與ふるところでござる。」

といひ、疾驅して逆へ、立ちどころに撃破して斬首二百五十を獲た。

三三 本願寺を伐つ

十月に信長が京に入るや、播州の小寺氏、別所氏、赤松氏等が來り謁した。別所氏は既に去年の夏

謁見して親附の心を示したが、今又來つて別心なきを示したのである。小寺氏は今初めて謁するのであるが、これも亦既に黒田孝高が岐阜に馳使して麾下に従ふの約を致してゐたのであつた。十一月、天皇は信長を右大將に敍したまうた。信長は敍を受けて金銀を献じ、諸々の公卿にも領地を贈つた。その月の十四日には信長岐阜に歸り、二十八日に家督を信忠に繼がせた。かくして信長は翌年正月、長秀に命じて城を安土に築き、本營を美濃から近江に移さうと圖つた。長秀が命を受けて工事を督すると、秀吉も亦長秀を援けて竣成を急いだ。正月、二月、三月と工事に疆めてゐると、信長は二月には移つて來て、四月には又京都に入り、五月には俄に大阪に下り、秀吉、長秀にも動員令を下した。秀吉が馳せ至れば、原田備中、塙喜三郎、丹羽小四郎等は既に戦死し、佐久間信勝、惟任光秀、猪子兵介、大津傳十郎、筒井順慶等皆茶臼山の城砦に圍まれ、命旦夕に迫つてゐた。信長は遽に下つたので兵を招くに由なく、一萬五千の攻圍軍に僅か三千の兵を以て對しなければならなかつた。人々がその無謀を危ぶむと、信長は、

「城兵の命は旦夕に迫つてをる。見殺しにしては、世評をどうする。寡兵といへども戦はねばならぬ。」

と三千を三隊に分ち、第一隊には信盛、久秀、藤孝を配り、第二隊には一益、頼隆、秀吉、長秀、一鐵、直重、伊賀伊州、池田信輝を置き、第三隊は自ら近侍を率ゐてこれに當つた。敵將鈴木孫一は、五千を以て茶臼山の監視とし、一萬を帥ゐて阿閉野に出でて信長の至るを待つた。信長これを見て、敵は多し、相對して戦ふは不可、突貫して茶臼山に至り、監視の兵を破つて入城するにしくはない。

と隊を固めて一團とし、砲を發ち、関を作つて突貫した。敵は多しとはいへ、その不意に驚き、鋭鋒に恐れ、我軍を破ることができなかつた。信長は茶臼山に至つて監視隊と奮戦し、これを破つて城に入つた。この時信長は足輕に混じて終始先鋒に在つて號令したが、ために飛丸にあつて創を被つた。けれども剛膽な彼れは入城後また直に兵を出して戦はんとした。諸將これを諫めたが彼は聽かない。

「今や大阪城下に迫る。天の與ふるところではないか。」

といつて兵を二隊に分ち、一隊を信盛に附し、一隊は自ら率ゐて、城を出で、突貫した。敵が大敗して大阪に逃ぐるや、信長は追撃して城に迫り、二千七百餘の首級を取つた。これ實に五月七日である。信長は奇勝を博して歸らんとするや、先づ大阪を繞つて城砦を築き、茶臼山には信盛、信勝、久秀、久通等を置いた。そして六月安土に歸り、七月朔日から又安土築城の工を起した。長秀、秀吉も亦至つて工を督するや、信長は兩人に名書を賜うてその勞を犒うた。

三三 雜賀の亂

安土の城が既に成つて天下の美を極むるや、信長の勢威も亦自ら西に振つた。五年二月、紀伊雜賀の民が亂するや、信長は討平の令を四方に發した。中國の別所小三郎、同じく孫右衛門は、忠を竭くすはこの時に在りと兵を率ゐて來り投じた。

その月の二十二日、信長は志立に軍し、根來杉坊三絨衆を先導として雜賀を攻めた。この時に當つて、秀吉は信盛の先鋒に次し、村重、小三郎、孫右衛門、堀秀政等と共に大に火を縱つて戦つた。時

に秀政は馬を躍らして川に入り、彼岸に至つて上らうとしたが、岸高くして馬上るべからず、彈丸雨の如く下つて兵進まず、仰いで切齒して馬を回すや、ために手兵は少からず伐たれた。稻葉父子、氏家直重、飯沼勘平は紀川に陣し、一益、光秀、長秀、藤孝、順慶等は海上より至り、進んで谷輪口に入るや、峻崖空を衝いて、わづかに攀躋すべき一道あるのみであつた。諸將は鬪を採つて三方に分れ、山に登る者があれば、谷を渉るものもあつた。藤孝、光秀が中道より入るや、敵出で支へ、鋭鋒は當るべからず、信忠、信雄及び織田上州が來り援けた。時に藤孝に下津權内といふ勇猛の士があつて、この日、槍を揮つて敵中を横行し、首級を取り、火を縦ち、阿修羅王の荒れたるが如く、遂に敵の鋭鋒を折ぎ、且つ撃退した。信長はこれ聞いて諷を容れ、當日拔群の功と稱していたく感賞した。二十八日、信長は丹和に移つて中野城を降し、三月朔日、一益、光秀、頼孝、藤孝、順慶をして鈴木孫市を攻撃させ、二日、若宮八幡祠に陣し、秀政を初め不破、丸毛、武藤、福富、中條、山岡より牧村長兵衛、福田三河、丹羽右近、水野大膳、生駒市左衛門、同じく三吉等に至るまで紀川より山に沿うて陣取らせた。かゝる長圍の計を見て到底敵すべくもないと覺つた鈴木孫市を初め、土橋平次、岡崎三郎太夫、松田源三太夫、岡本兵太夫、島本左衛門太夫、栗本二郎太夫等七人は遂に降を請うた。信長は忠を大阪攻城に誓はせてその降を容れ、三月二十一日、兵を收めて佐野郷に至り、信盛、光秀、長秀、秀吉、村重等に命じてこゝに砦を築かせて、二十七日、安土に歸つた。雜賀の亂は、さきに鈴木孫市が大阪に敗れ、走つてこゝに抵つて衆を催し、遂に兵を擧ぐるに至つたもので、その勢ひは甚しくはなかつたが、所在に出沒して剿滅し易からず、信長は大に手こずつたものであつた。

一蠅拂へば又一蠅、實に、うるさきは蒼蠅である。一向宗徒の亂をなすや、その始は蜂蟄の如く、その末は蒼蠅の如くであつた。うるさくも八月、又もや北陸が亂れた。信長はまた兵を遣してこの蒼蠅を拂つた。勝家はその遣兵の大將であつた。一益も行き、長秀も往き、利家も従ひ、成政も伴はれ、秀吉も亦至つた。遣兵は北陸に入るや、先づ加賀を攻め、小松、本折、安宅、富樫を燔き、所在を従へたので、敵は震懾した。この時秀吉は信長に告げずして歸つたが、ために大に信長の怒りに觸れた。しかし、羽柴筑前は迂氣ではない。草履取りの藤吉郎時代から癩癩將軍の氣心は能く呑みこんでゐる。大に恐縮畏怖の體を裝うて、懼々焉として退いて、罪を待つた。

三四 松永久秀の叛

古人は曰つた、「生、一粒の中に藏するや、久しきと無く近きと無く、物に遇へば必ず榮ゆ。惡一念の中に藏するや、久しきと無く近きと無く、物に遇へば必ず發する」と。松永久秀の如きは、その惡を一念の中に藏し、久しきと無く近きと無く、物に遇へば必ず發するの徒であつたらう。往に臣下の身を以てその主君義長を弑し、信長に對しても、謝して又叛き、叛いて又謝し、五年八月、又亦一度背いて大和の信貴山に籠つた。

信長は久秀の叛を聞くや、友閑法印を遣して叛意を訊し、且つ如何なる望みも心に任せてかなへさせやうといひやつた。けれども久秀はこれにこたへず、敢て戦備を専らにしたので、信長は兵を發して信貴山を圍んだ。これが十月三日のことである。これより先、信長は矢部善七郎、福富平左衛門の

兩人に久秀の質子を誅させた。質子は二人あつて、兄は十三歳、弟は、十二歳、稀有の美少年であつた。そして外貌はいかにも優柔にして、内心に至つてはすこぶる剛毅であつた。平生は永原に在つて佐久間與六郎に養はれてゐた。矢部、福富はこれを京師に檻送して、一日、村井長門の館に留め、

「明朝、闕下に奏して必ず命請ひをして進ずる。速かに髪を結び、衣服を改めよ。」
といふと、二子は同音に曰く

「髪は結びませう、衣服も改めませう、助命といふことは心に願ひしこともなし。」
矢部等はこれを聞いて暗然として曰く

「父母兄弟に言ひやることはないか。」
二子は又

「今にして何をか父母に言ひやりませう。しかし、われ／＼が心に刻んで感謝してをる人がござります、せめてはその人へなりと一言、遺しておきたく存する、何卒筆紙墨をかしたまはれ。」

といふ、矢部等はよくぞ申したと、筆硯を與へると、二子は筆を走らせて感戴の辭を敘し、これを佐久間與六郎につかはしたまはれと矢部等に手交した。そこで二子を檻車に乗せ、市中を引き回して六條磔に斬つた。二子が刑場における態度は到底大人も及ばざるほど立派なものであつた。二子は刑場において自若として合掌し、聲高々に念佛を唱へ、刀降つて首は飛んだが、それでも誦唱の餘聲が人の耳底に留まつたほどであつた。

信長が信貴山を圍むや、その總大將は信忠であつた。これに従ふ者は信盛、光秀、順慶、長秀等で

あつて、秀吉も亦來てをつた。三日に城を圍んで、十日に攻めた。信貴山は高くして道は險阻である。信忠は大に攻めたが抜けなかつた。時に雜賀の兵が來て我と戦つた。信盛は順慶と相議して密に謀り信盛の兵を雜賀の兵に雜へ、ことさらに順慶の兵と戦はせて城まで壓した。久秀はこれを見て門を開き、雜賀の兵を迎へて城に招いた。この時信盛の兵もみな城に入り、信盛も順慶も亦それに續いて入つたので、久秀は錯愕して天守に登り、城兵もみな色を失つた。久秀は事の急なるを見て、目皮相怒り、

「我は骸骨となつても信長の死様を觀ずにはおかない。」

と遂に火を放ち、自ら剄つて死んだ。その子の久通は亦大に戦つた後、力竭きて擒となり、信貴城は全く落ちた。一世の奸雄はかくして空しく灰となつたが、これ實に十日の夜のことである。

初め信長は久秀の叛を聞いて人を遣し、その叛意を訊して、久秀の望む所を聽さうとしたが、久秀はこの寛宏なる信長の態度にこたへやうとせず、むしろ備へを嚴しくした。けれどこれより先のことであるが、久秀は信盛と共に天王寺に在つたが、一日突如として城塞を捨て、その子の久通と共に信貴山に去つた、その時は既に豫め光佐及び雜賀の亂民と謀つてゐた。信長の勢威に抗するに至つたのは、多分かうした計畫的陰謀があつたためであらうか。傳へるところに依れば、或日久秀が信長に謁見すると、信長は久秀を家康に紹介して曰く、この爺が有名なる松永久秀である。この爺に天下の人の及ばざるものが五つある。一は將軍義輝を弑したこと、二は三好義長を弑せること、三は三好と戦つて東大寺を焼き、大佛を滅したこと、四は義繼を挾んで天下に號令したこと、そして五は遂に義繼を弑したことである。と久秀はこれを聞いて大に愧ぢたが、それから深く慍んで、かくは叛するに至

つたものであるといふ。しかし著者はこの説を信じない。久秀の爲人を視るに決してさやうな單純な性格の持主ではない。久秀は一世の奸雄である。一場の戲言を憤つて叛旗を翻すやうなそんな熱狂兒ではない。彼は冷かなること氷の如く、横着なることは戰國第一であつた。戰國の創開者にして叛逆人の標本である。かゝる奸雄がどうして一場の戲言に對して事を構へるやうな淺慮なことをするものか。彼の背いたのは光佐の勢力が意外に強く、毛利の援助がまた十分であつて、信長のてこずりがひとほりでなかつたからである。恐らくは光佐を援ければ天下を取ること容易であると光秀同様に考へた結果であらう。けれど、信長が態度、その口禍はこの場合にも後の光秀の場合におけると同様のものがあつたであらう。但し念中の惡の、物に遇つて發したものは違ひない。

三五 播州出陣

秀吉が信貴山より歸ると、信長は彼を播州に下して、中國討平の序幕を開けた。中國の討平は、一言にして盡せば、天下經路の一端である。信長が中國討平を考へたのは、一日の事ではなかつた。今日までその手を伸さなかつたのは、畿内、海道、北陸に干戈があつたからである。手を伸さなかつたのではなく、手を伸すことができなかったのである。今や畿内、海道、北陸が漸く平ぎ、且つ後顧の憂たりし勝頼には長篠に大敗を與へ、謙信には勝家を北陸に備へて勝頼侵略の力を斷ち、謙信上京の道を扼した。餘すところはたゞ本願寺があるのみであつたが、これとても最早孤立の姿で敢て恐るゝに足らなかつたので、こゝに始めて中國討平の宿志を決行するに至つたのである。

初め信長は近畿、北陸に事あるや、憂は毛利氏の東上に在つたので、將軍義昭が眞木島に籠り、旗色振はずして一敗地に塗るゝに當り、毛利が人を遣して秀吉に頼つて敢て義昭の助命を請ふや、信長は使者を引見してその乞を容れ、又使者が更に尼子氏不援を悃願するや、これをも快諾して、

「予はこれより東北を經略せんほどに、毛利は西國を略定せられよ。」

といつた。かくして義昭は恕されて若江に送られたが、そのうち義昭は性懲りもなく又亦ひそかに信長に構へ、何とかして信長を滅ぼさうと圖つた。そして毛利にひそかに助勢を請うた。けれども毛利氏は當初の約を違つて義昭の請を容れず、再三促したが遂に應じなかつた。固より尼子氏がその後を窺つてゐたのを恐れたのもあるが、又義を守つてさうしたことであつた。しかるにその後和親は一亡命客に由つて破れた。それは義昭の西下である。義昭は毛利に出兵を促したけれども應じてくれないので、遂に西下して備後の鞆に至り、敢て出兵を哀願した。これを見た信長は、毛利が義昭を擁して東上することを恐れ、陽に尼子氏を退けて、陰にこれを助け、尼子氏を山陰に入れ、又備前天神山の城主浦上宗景、備中松山の城主三村元親に備前、美作、播磨、備中、備後の統轄を許し、以て一をしてその後を制し、他をしてその前を扼させた。かくなると疑惑は兩方の胸にはらむ、毛利は信長の誠意を疑つた、そして遂に義昭を援け、且つ本願寺を救はうと決意した。それから戦備を修めて信長と大阪に戦ひ、糧食を大阪に入れて本願寺をたすけ、そして全然信長と和親斷絶の意を表した。

西征の口實は多分この邊に在つたらう。けれど西征を促進したものは、中國に在つた。宇喜多直家が播州を蠶食したのがその一であり、小寺孝高が歎を信長に入れたのがその二である。直家は備前岡

山の城主で、備前、美作を領し、なほその手を播州の西部に伸して、置鹽の城主赤松義祐、三木の城主別所長治、御着の城主小寺政職等の領地たる佐用、赤穂、揖東、揖西、宍粟の五郡を侵略して、中國の大名となつてゐた。孝高は父職孝と共に小寺政職の臣であつて姫路城にゐた。直家の蠶食を見て一日、政職の家に會し、天下の形勢から説き至つて、社稷を安んずるの計は一に信長に附するにあると切言し、終に信長訪問の使者となつた。これが西征の促進とはなつたのである。孝高は官兵衛と稱し、後に氏稱を黒田と改め、薙髮して如水軒と號した、一代の智將である。彼が信長に謁したのは、天正三年で、齡は漸く而立に達したばかりであつたが、その時すでにその智辯よく英雄の心を捉へてゐた。彼は説いて曰つた。

「中國の討平は今が絶好の機會でござる。公よろしく一將を下したまへ。我等それを姫路に迎へて嚮導つかまつらう。」

信長は悦んだ。

「善く言はれた。予も亦さやうに思つてゐる。四隣の定まるを待つて藤吉郎を遣はすであらう。」
孝高の勸説こそ西征促進の導火であつた。前後六年の中國に於ける龍戰虎鬪は孝高の智辯に由ることまた多きものがあつた。

三六 中國管領

秀吉が信長の命をうけて播州に入ると、別所長治、小寺政職及び孝高等は、彼を姫路城に迎へた。

秀吉はその本丸を借りて居住し、又本營ともして、こゝで中國討平の秘策を廻らした。この時に當つて、秀吉の双手となり、智囊となつて、その謀議に與つたものが二人ある。一を竹中半兵衛重治といひ、他は新附の官兵衛孝高であつて、世にこれを二兵衛といつた。秀吉の功業の大半は實にこの二人の神算鬼籌に依るといはれてゐる。

秀吉は姫路に在つて、ほとんど全播州の諸侯から人質を執り、これを信長に報じて曰く、

「播州はこゝ十日以内に平げ申さん。安土に伺候つかまつるは、來月の十日を出でまじく存する。」
信長はこれを聞いて大いに喜び、早速書面を遣してその神速を賞し、且つ秀吉を播州に合封した。秀吉は使者を派して中國の管領となることを願つたが、信長は許さなかつた。秀吉は但馬に入つて、川口、岩淵、竹田の諸城を攻落し、木下小一郎秀長を竹田の城代として置いた。信長はこれを見て漸く秀吉の管領を許した。

秀吉が管領を請うたことについて種々の説がある。その一は、秀吉が中國管領を請うたのは、一家の計を爲すの外他意なきことを示したもので、要するに信長の猜視を避けやうとしたものである、といふことである。他の説は亦秀吉は百戰百勝したため、漸く慢心して管領を請うたものである。といふのである。しかし著者は、この二説を以ていづれも淺薄なものと思ふ。なるほど、信長は猜疑心の強い男であつた。けれども信長の秀吉に對する信任は、他の諸侯に對するそれとは違つてゐた。他のものよりは、より遙かに以上のものがあつた。藤吉郎の時代から今日に至るまで、信長は未だ嘗て一度も秀吉に猜心を與へたことはない。正確な史料には、時として信長が秀吉を叱つたことが載せてあ

る。しかもそれは單に秀吉の過を咎めたに過ぎなかつた。何れの場合にも猜心を挾んだ形跡はない。むしろ彼は、多くの場合、秀吉を褒めてをる。時には諸將に超えた行賞もしてをる。信長の態度がすでにかくの如くであつたとすれば、秀吉たるもの、何を苦んでことさらその猜心を避ける必要があらう。昔、秦の名將王翦は、始皇の猜視を避けるため、出征に臨んで美田、邸宅を請ひ、戦地から再びこれを求めたといふ。信長の爲人から推して秀吉の地位を考ふると、秀吉も亦、王翦の故智を學ぶのではないかと思はれるが、それはあまりに穿ちすぎてをる、秀吉の請うた本心は、實に外にあつたのである。またその慢心の説に至つては、秀吉の氣宇の濶大、その抱負の遠大さを知らないところから來た誤解であり、秀吉を尋常一様の將士と同一視する者の臆測に過ぎない。

秀吉が管領を請うたのは、實にその位に據つて、その地を略定するにあつたのである。單なる一將として力戰攻取するよりは、管領となつて民を安んじ、諸侯を歸服せしむるに如くはない。これが秀吉の願であつた。秀吉は平生、善く戦つたが彼は決して戦を好むものではない、諸葛亮のいはゆる心を攻むるを上となし、城を攻むるを下となす、心を以て戦ふを上となし、兵を以て戦ふを下となす、といふ交戦心理を會得してゐたものである。これを會得して實際に行はんとするならば、一將の卑位を以てするよりは、管領の高位を以てするに如かない、また事の難易も、一將を以てすると管領を以てするとは、同日の談でない。秀吉の管領請求の眞意は、誠にこゝにあつたのである。けだし屈する者は能く伸びるとは秀吉のことであらう。永祿元年、清須の城にはゆる草履取りとして仕へてからこのかた、彼は唯々として癩癩將軍に従ひ、世臣や宿將にも屈伏して逆はず、功あるときも功に伐らず、過あれば慎んで改め、かくて二十年を經過したのである。これぞ能く屈するものではないか。そして久秀誅戮の月を以て中國へ遣はされた。これより漸く主公の願使、箝制から遠ざかつて、ほとんど獨歩の活動を開始するに至つたのである。これまた、よく伸びるものではないか。

三七 上月城攻陥

これより先、佐用郡を蠶食した宇喜多直家は、上月政範を上月城に置いた。上月城は上月村の太平山上に在る。その地は備前と美作の國境に近接し、山陰の入口に當る要所であつて、東には市川を控へ、稍々南には狼山があるなど、また一箇の要害堅固な山城である。

秀吉は遙に熊野川を涉つて進軍し、上月城下に至つて火を縦ち、一方には重治、孝高を福原に遣はして、城將福原右馬允を攻めた。これ實に十一月二十七日である。秀吉二城を攻むとの警報が飛んで直家の下に至るや、直家は大に驚き、兵三千を發して上月の急を救はうとした。その兵が途中まで發するやこれを探り知つた秀吉は支隊を放つて邀撃し、潰敗せしめてしまつた。又、上月は如何に要害堅固と雖も、何分にも不意のことであるから、攻圍七日に及ぶと、城兵は支持することできず、城將政範を斬つて降を請うた。秀吉はその降を入れて、政範の首を信長に送り、また降兵數十人を備前と美作の國境で磔にし、その城には、尼子勝久山中鹿之介幸盛とを置いた。一方重治等は、即日福原城を攻落し、城將以下二百五十餘人を斬つた。

秀吉が播州に下つてから今に至るまで、日子は僅に四十日にも足りないが、人を従へ、將を降し、

城を落すこと、夥しき數にのぼつた。全く神速といふべきである。しかもかく神速に活動して、秀吉は、十二月下旬には既に江州にゐたのである。光陰白駒の如く、極月まさに去つて、明くれば天正六年正月元日である。旭日の東天に昇るを待つて、秀吉は安土に伺候して、信長に謁した。信長はその朝茶の湯の會を開き、信忠、藤孝、光秀等十二人を召し、秀吉をその席上で十二人の列に加へた。信長は永祿三年に桶狭間に大捷してからこゝに十七年、その間、日として月として戦を起さぬ時とはない。しかも戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取つて、自稱の天下布武なるものが着々と實現しつゝある得意の時に當つて、正月元日を迎へたのである。その喜びや果して如何であつたらう。そのまた得意の色に接した秀吉の意中は、どんなであつたらう。さるにても今、安土城、六疊の茶室には、五年の後は、その眼前に在る新進に弑さるゝを知らない主公があり、またその同列の新進に亡されるを知らざる新進があるのである。これを知るものは、たゞ神と安國寺惠瓊とのみである。一室の中、一服の茶は、苦甘交々舌を刺せども、茶釜に發る松風の音は、遂に人の心を激することなく、徹頭徹尾、太平の奏樂であつた。誠に人生は奇であり、人心は測り難い。

秀吉は賀詞を終つて安土を辭し、正月から二月にかけて、その封地たる長濱に滞在して庶政を見、同月十日、再び播州に下つた。この時、秀吉が出發に際して信長に謁すると、信長は曰ふ

「予は既にその方に播州を與へた。その方の運籌畫策で毛利を滅したら、その方また中國を管するがよい。」

秀吉は對へて曰く、

「我君の餘威を以てせば、中國征伐の如きは竹をわるも同然でござる。必ず中國を平定してこれを獻上つかまつらん。しからば亦、九州管領の職を賜はれ。九州を討平したる後は必ず大明を征伐いたすでござらう。これ實に某の素志でござる。」

信長はこれを聞いて莞爾として曰く

「大氣ものとはその方のことである。」

秀吉は播州に着するや、馬を加古川に駐め、糟谷内膳の城に入つて、新附の諸將と謀議した。この時別所長治は、軍議が合はず、且つ秀吉は不遜であるとの故を以て、自分の城に籠つてしまつた。秀吉はその不逞を憤り、別所の居城の三木を攻め、長圍の計をなして、自ら書寫山に陣取つた。時に飛報あり、毛利の大軍上月を圍む、と。こゝにおいて秀吉は、三木の攻撃を中止し、援兵を信長に請ひ、且つ走つて上月に到つた。これ四月中旬のことである。

〔糾纏〕 秀吉が播州に下つたのを、秀吉事記は三月七日とし、信長公記は二月二十三日としてある。しかし、三月六日には、彼は既に書寫山に在つたから、秀吉事記の記するところは、恐らく後人の誤寫であらう。又、信長公記の二月二十三日説に従へば、長治が城を修築した時日と合はない。そこで著者は、本朝通鑑の二月十日説に従つた。これは秀吉事記を誤寫として二月七日に改めれば、僅かに三日しか違はないからである。又、上月城に關していふほどのものは、みな現今の城山を指して、それであるとなし、太平山城にその本丸のあつたことを知らないが、それは大なる誤謬である。彼の城山は尼子氏の籠つたところで、上月城の搦手である。上月政範の籠つたのは本丸であつて搦手ではない。これ著者が實地調査に依つてたしかめた事實である。

三八 上月の對陣 (上)

去年、秀吉が上月を取つてそれに尼子を入れ、しばらく安土に上つてをると宇喜多直家は、秀吉の不在に乘じ、一擧して上月を恢復しやうと、使を毛利に遣して曰く、

「尼子が上月に據つてをる。彼は毛利氏の宿敵ではないか。今にも殲滅せざれば、他日必ず後悔する時があるであらう。我等は今兵を出さんとしてをる。毛利氏も亦速に援軍を向けられよ。」
毛利はこれを承諾し、三月軍を派遣した。その數は、小早川隆景の兵二萬人、吉川元春の兵一萬五千人、合せて三萬五千人、これに直家の兵一萬四千人を加ふれば、總計實に四萬九千人である。毛利の大軍は進んで、四月中旬、上月に逼り、小早川勢は狼山から市川の右岸に沿うて陣を敷き、吉川勢は大平山に軍し、宇喜多勢は東部に屯した。尼子氏は當時僅に七百の兵を有するばかりであつて、その臣に山中幸盛の如き、智勇兼備の名將があつても、策の施しやうがなく、わづかに本丸を脱れて、搦手に籠り、只援兵の來り援くるを待つばかりであつた。秀吉が到着したのはこの時である。秀吉は、村重と共に高倉山に陣取つて毛利と對陣したが、高倉山と上月の間には、谷あり、河あり、地の利は彼に可にして我に不可、城を救ふの策とは何等施しやうがない。五月上旬には、一益、光秀、長秀、順慶及び武藤舜秀等が、ほとんど二萬の兵を率ゐて高倉山に來り會したが、これまた無策の隊長たるに過ぎなかつた。これより先、信長は秀吉からの警報を聞き、將に自ら起たうとしたが、信盛、一益、隆正、光秀等が諫めたので思ひ止つた、一益等が派遣されたのはそのためである。信長の意味は右の如

くなるがゆゑに、五月朔日には、また信忠を總大將とし、信雄、信孝、信包、藤孝、信盛、頼隆、直重、範俊、長通等を附し、總勢三萬の兵を與へて東播州に下向させた。信忠は先づ大窪に軍し、隊を分つて、一を加古川に放ち、一を神吉に置き、一を志方に派し、一を高砂に遣した。これ實に三木及び附近の小城を監視して、秀吉等の後顧の憂を除くためであつた。信長はかく大軍を發し、秀吉をして戦ひ易からしめたが、それでも安心しがたく、五月十三日には、いよく自ら進發しようとして、既に命令を下して出發の準備をしたところ、十一日より猛雨降りつゞき、近江、山城に洪水があつたので、信長は再び進發を思ひ止つた。秀吉は上月に對陣中、八幡山城主を歸降せしめ、重治をしてこれを信長に具申せしめた。信長はこれを聞いて秀吉及び重治を賞した。秀吉は、高倉山上に在つて、地の利の惡きが上に、一益、光秀、長秀等は秀吉と事を共にするを好まず、あまつさへ村重も毛利方に内通したではないかと疑はれるほどの様子になつたので、敢て進んで戦はうとはしなかつた。なほ又、信忠に赴援せんことを議つたけれども、信忠も應じなかつたので、秀吉は遂に城の圍を解くべからざるを察し、龜井茲矩を城中に遣して曰く、

「援軍は來着してをるが、地の利が悪くて、策の施しやうがない。貴殿の一命を救ふことは、貴殿がたゞ城中から突貫して我軍に來投するの外方法はない。機を見て脱出を斷行したまへ」
幸盛はこれを聞いて感謝はしたが、

「貴命は誠にありがたい、心胸には銘するが、さりとてその事は至難のことではあり、且又我等二三人が命を全うしたところで、七百の士卒を何としやう、此際彼等を遺棄することは某の忍び得ざる

ところでござる。」

と云つて、秀吉の言に従はなかつた。秀吉は、あたら名將を見殺にするのを憾み、且つ一益等の態度に憚らなかつたので、六月十六日、窃に數十騎を率ゐて京都に急行し、信長に謁して共に議した。信長は、秀吉に、

「その方、立歸つて諸將に、謀成らず圍の解けない以上は徒に對陣するも益なきことであるから、速に信忠に屬して三木を攻むべしと傳へよ。」

と云つて、秀吉を歸陣させた。高倉山に歸つて、一益等に信長の命を告げ、二十六日に、一益、光秀、長秀を三日月に殿させて、村重と共に書寫山に退いた。

三九 上月の對陣 (下)

これより先、二十一日の曉に、我兵が市川で馬に飲つてをると、宇喜多の一隊長中村三郎左衛門が、伏兵を置いて射撃した。こゝにおいて時ならぬ花が戰場に咲き、豫期せざる戦が始まつた。秀吉の一隊長尾藤知定は中村三郎を撃つて我兵を救ひ、吉川の一隊長宍道正義は中村三郎を助けて尾藤を攻め、秀吉の一隊長中村一氏は馳せ付けて中村三郎、宍道を圍んだ。すると吉川方から南條元續、小嶋元清、山田重直、吉田肥前守、都野經良、小早川方からは包久内藏が出て、我軍からは一益、光秀、長秀を除く外はことごとく出で、彼に對した。敵は我軍の多いのを見て、戦ひながら退いた。然るに吉川に三子あり、元長、元氏、經言といひ、何れも年少ではあるが、その氣鋭は父に劣らず、この時一萬を率ゐて進んで来て、一氏の五千と孝高の三千とに對つた。この兩軍が市川を隔て、砲を撃ち、矢を放つや、

經言は川を涉つて突撃し、元長、元氏がこれに次ぎ、更に松原盛重、南條等が従つた。一氏はこれに逆ひ戰つて利あらず、孝高またこれを救はうとして果さず、且つ盛重等二千の突貫に遭つて、秀吉の諸隊は、三四町も退却した。秀吉はこれを見て本隊を指揮し、順慶も亦馳せ來つて味方を救ひ、以て吉川の諸隊を撃退した。秀吉はこの時、進んで敵を撃破しやうと思つたが、かゝる場合にもかゝはらず、隆景、元春等が平然として城を圍み、些の動搖も見せないの、輕々には乗り出せぬと考へ直した。そして再び元長が高倉山に押寄せて來たけれども、隆景、元春等に背後を突かるゝことを慮つて戦はず、かくして間もなく上月を放棄して書寫山に去つたのである。

敵は秀吉が去ると同時に力を攻城に集中し、晝夜の別なく攻め立てた。勝久は城兵の力の盡くるを見て、使者を敵陣に遣し、自分の一命に代へて、妻子や士卒の命乞をしたところ、敵はこれを容れて開城を命じた。勝久は、七十餘日の堅守を捨て、七月三日に自盡して城を開いた。毛利は城を收めて堂々として歸國の途に就いたが、この時尼子の名將幸盛は、伴り降つて、元春に面接し、彼を刺さうと豫め期してゐたところ、いざとなつて元春の席が餘りに遠く、志を遂ぐるに由なく、遂に安藝に送られたが、その途中、備中阿部川の邊で斬られた。これ元春が護送兵に命じて殺させたのである。その時の有様なりとて傳ふるところによると、幸盛が阿部川に到つて、水中を臨んでをると、河村某といふものが幸盛の背後から刀を振つて幸盛に斬りつけた、幸盛は不意のことゝて、刀を浴びたまゝ河中に轉落したが、福間某といふが河中に飛び込み、幸盛の首を搔いた。幸盛は剛勇無双といはれた豪傑であつた。福間某あたりに首を搔かれるものではないが、この時は不意打を食つて非常に痛手に苦ん

でゐた様子であつたから難なく福間に搔かれたものであるさうだ。けれど毛利としては實に卑劣な處置である、全然暗殺であつて、降將を扱ふ法ではない。固より毛利氏が幸盛に苦められたのは一再ではない。しかしその事の起りといへば毛利が尼子を亡したことにある。故に幸盛は中絶した尼子を興した義人である。たとひ自家の存亡に關する仇敵であるといつても、義人を選ぶには、自ら禮があつた筈である。

四〇 三木城攻圍 (一)

滕の文公が、曾て孟子に問うたことがある。「滕は小國であり、齊と楚に挟まつてゐる。齊に事へやうか、楚に事へやうか。」と。播州の諸城主も亦滕文の類である。彼等はみな我等は小名である。織田と毛利に挟まつてゐる。東して織田に事へやうか、西して毛利に仕へやうかと、その腹を決め兼ねてゐた。別所等はこの心あつて、一たびは織田に事へた。けれども、織田の勢力の西漸は、どうも毛利の勢力の東漸ほどではない。播州が未だに毛利の勢力範圍から脱し得ないのみにて、彼等は常に去就に迷つてゐたのである。

この時に當つて秀吉は、安土から歸り、加古川に至つて軍議をなし、長治の寵臣三宅治忠が、焜々數千言の戰略を進言すると、

「貴殿等のいふところは陳腐である。」
と曰つて退け、治忠が尙もいはうとすると、秀吉は、

「貴殿等は先鋒である。たゞ命を守ればよい。戰略は總て我方寸にある。」
ときめつけた。治忠は、一緒に來てゐた長治の伯父の別所賀相と共に色を作して退出し、三木に歸るや賀相は、極力長治に叛旗の掲揚を勧めた。そこで長治は毛利と結び、城を修理して立て籠つた。表面の事實から見れば、秀吉の排議を憤つて叛いたのであるが、そんなことは一朝の口實に過ぎない。實に去就に迷つて毛利に付かうとしてゐたのであるが、その口實の見付かるまで織田に付き、窺に機會を待つてゐたのであつた。長治の叛するを見るや、果して諸城主も亦叛いた。強國に挟まれる小城主の面目躍如たりではないか。

三木城は美濃郡の西方に在つて、東は竹林に接し、南は岡陵に倚り、北に三木川を伏瞰してゐた。且つ本丸、二ノ丸、新城を合せて、これを壘壁で圍み、その壁外には空壕を掘つた。更に城を隔て、二壘あり。一は鷹ノ尾といひ、他は宮ノ上といふ。長治はこの一城二壘に、總兵七千五百を配した。當時、別所に屬してゐた小城が六つあつた。その一は志方城といつて、榑本治家が兵一千を以て守り、その二は神吉城といつて、神吉長則が同じく兵一千を以て守つてゐた。その三は高砂城で、梶原景行が兵若干を以て守り、その四の野口城は、長井四郎左衛門が亦兵若干を以て守り、その五の淡河城には淡河定範が二百六十餘人を率ゐて籠り、その六の端谷城には、衣笠範景が同じく若干人を以て籠つてゐた。前の四城は三木の西方に在り、次の一城は東方に在り、最後の一城は南方に在つて、近きは三木と二里を隔て、遠いものも五里とは隔たらず、以て三木と聯絡してゐた。

秀吉はこれを攻めんとして、その計を孝高に問ふや、孝高對へて曰く、

「愚計を以てしますれば、書寫山に據つて攻むるに如くはござりませぬ。」
秀吉はこれを聽いて、三月六日、書寫山に登つた。書寫山には古刹があつて、數百人の寺僧が住んでゐた。彼等は秀吉が登山すると、大に驚いて逃げ出した。けれども、

「寺僧に罪はない、殺してはならない。」
と秀吉が軍に令したので、彼等は漸く安堵した。秀吉はその月の二十八日に、三木の城下に火を縦ち、四月三日には、長井四郎左衛門を野口城に攻めて、七日を出でずしてこれを降し、その勢に乗じて三木に肉薄しやうとしたが、彼の上月の事が起つたので、直ちに上月に赴いたのである。そしてその間は、信忠がこゝに軍してゐた。

四一 三木城攻圍 (二)

さて上月から來つた秀吉は、信忠と謀り、一益、長通、頼隆、順慶、舜秀、光秀、範俊、直重、村重等に神吉を攻めさせ、自分は但馬に入つて、秀長の庶政を見た。

神吉の城を攻むるや、上記の諸將の外に、信忠が豫備隊として備へ、且つ信孝、通勝、藤勝、信盛等もその手に屬した。なほこの外に志方城監視隊もあつて、信雄、長秀がその任に當つてゐた。いよ、六月二十六日から、力を極めて攻め圍み、二十八日には、更に長秀を加へて攻め、夜となく晝となく寸時も休まず攻撃するや、城兵は出で、防ぎ戦ひ、味方の死傷も甚だしかつたが、寡は衆に敵せず、遂に力竭きて降を請うた。しかし信忠はこれを許さず、敢て攻陥しやうとした。これより先、信

長は監視八人を下して置いたが、今又、三木と毛利との連絡を絶たんが爲に、海上を警備するやうにと、遂に命令を發したので信澄と通勝とが、直ちに海上に向つた。神吉を攻めること二十日にして、七月十五日、信盛の土某が城將長則を斬つたので、城は陥つた。神吉の陥るや、直ちに志方を攻めたが、これ又十日餘りで城將治家が降を請ひ、八月十日に落城した。

信忠は二城を取るや、軍を進めて三木に向つた。これ、神吉、志方の二城は三木の兩翼であり、三木はこの兩翼があればこそ、飛びも翔けりもするであらうが、これがなければ離伏するより外はない故にこの二城を取れば、他の小城はいふに足らず、そこで直ちに三木に向つたのである。この時、但馬から歸つて信忠と共にゐた秀吉は、命を受けて二城を守つた。

信忠は三木を攻めたが、長治が能く守つて、なか／＼抜けさうもないので、秀吉に命じて長圍の策を執らしめ、八月十七日、岐阜に歸つた。その他の諸將も亦東に去つた。

秀吉は平井山を中心としてその四方に砦を築いて三木に對し、南方にも亦砦を築いて、毛利が魚住から糧食を送る道を絶ち、これを秀長に託して東上し、十一月、信長に従つて叛將村重を有岡城に攻め、翌月中旬、信盛、光秀、順慶と共に平井山に歸り、大に糧食、彈藥、戎具を補つて、信盛等三將を還し、秀長と共に對陣した。この時に當つて秀吉は、村重のために智慧囊を一つ奪はれた。それは孝高が、十一月、村重に有岡に幽閉させられたことである。

長治は城に籠つてから、月を閲すること十二、即ち七年二月に至り、將士を集めて議して曰く、
「敵は長圍の計を執つた。これ我が餓うるを待つためである。われ窃に敵の數を見るに僅に三四千

に過ぎない。果して然らば我軍の半数である。それ小敵の堅は大敵の虜といふことがある。未だ大敵を以て小敵の虜となるはこれあらず。逆襲を試みて、平井山の本陣を破るに如かずと思ふが如何。」衆みなこれに賛成し、長治は三千二百人を前後の二隊に分つて、平井山に向はせた。

四二 三木城攻圍 (三)

敵が平井山を襲ふや、秀吉は千人を以て前隊を防ぎ、更に若干を以て秀長と共に後隊を挟み、敵を撃破して退却させた。この時、前隊も亦敗走した。されど後隊は脆くも破れて退いたのを遺憾とし、更に精兵百五十を選んで突貫して来たのを、秀吉は闘つて、殆ど全滅させた。賀相は敵すべからざるを知つて、敗兵を収めて城に入つた。この日、我兵能く戦つて、將士を討つこと三十五、卒を瘞すこと八百に及んだ。後人これを稱して、平井山の戦といふ。

長治は小敵に破られて、その悔るべからざるを知り、且つ糧食も乏しかつたので、援兵と糧食を毛利に請うた。毛利は承諾して、三月に糧食を魚住に送つたが、魚住から三木に至る沿道は、我軍の監視が厳しくして、遂に納れることができず、空しく魚住に積んで置いた。

四月、信長は再び信忠、信雄、信包、信孝、信澄、秀政、利家、成政、順慶、長秀及び原房親、金森長親等を遣して秀吉を援けた。信忠は三木城の未だ抜けざるを見るや、二十六日小寺政職を御着の城に攻めた。政職は往に孝高の勸めに由つて織田に従つたが、彼も亦藤國の主で、その意、長治と同じく、背叛の機会を待つてゐたのである。故に村重の叛に由つて畿内が亂れると、意を決して籠城し

たのである。信忠は城下に火を縦つて暫く攻めたが、城が抜けなかつたので、池田に還つた。諸將も亦信忠に従つて歸つた。

こゝに至つていさゝか注意すべきものがある。それは利家、成政がこの役に加はつて来たことである。これ實に去年の三月、北越の猛雄上杉謙信が卒去して、北陸の鎮守がやゝ閑を得たからである。攝津と播磨の境に一つの山がある、これを丹生山といふ。こゝから東へ行けば村重の支城の花隈に至り、西に行けば淡河城に達する。でこの山地は攝播の連絡を保つに屈竟の地である。長治はこゝに城砦を築き、二千の浮浪を納れた。そこで毛利は魚住に送つて置いた糧食を花隈に移し、それから三木城に送らうとした。秀吉は間者をはなつてこれを探知し、未だ糧食を三木に運び入れない中に、風雨に乗じて丹生山を攻め、わづか三百の手兵で、一舉に占領した。これ實に五月二十五日のことであつて、翌日は秀長を淡河に派した。秀長は五百人を二隊に分つて定範を攻めた。定範が二百の兵で討つて出で、三百の前隊を破るや、その弟新三郎も亦、百五十を以て、後隊をしりぞけて大勝を博した。けれども定範は、秀吉の再襲を恐れて城を燔き拂ひ、三木に合した。丹生山が落ち、定範が逃げると、花隈の使者が毛利に飛んだ。毛利は報告に接して徐ろに謀り、九月上旬、元春、隆景が魚住に來た。

これより先、秀吉は一將を失つた。それは竹中重治が病死したことである。重治は播州に下るや、孝高と共に秀吉の兩翼であり、智囊であつた。子房の劉邦におけるが如く、孔明の劉備におけるが如く、重治は秀吉の帷幄に參劃したものであつた。三木攻圍の如きも、主として重治の立案に成つたの

である。重治はたび平井山に病を得て京都に歸つたが、再び起つ能はざるを知るや、又も播州に下つて平井山に入った。秀吉は彼を見て、閑地で病を養ふべく諭したが、重治は、

「某、もはや再び起つ能はず。死なばむしろ陣中にて死したし。これ實に某の本望でござる。」

といつてきかない。秀吉はこれを聞いて涙を流して病床を設け、爾來醫を附して治療につとめさせたが、病、遂に癒えず、六月中旬、不歸の客となつた。去年、孝高が有岡に幽せられ、既に一翼を奪はれてゐるのに、今また一翼を失ふ。あたかも兩翼を挽れたかたちである。秀吉の胸中は、誠に察するに餘りがある。殊に重治を伴つたのは、淺井朝倉を伐つてからこのかたのことである。孝高に對するとその愛に差等のあるべき筈はない。果して秀吉は、心を傷めて大に哀んだ。時人も亦、重治の死を孔明が陣中の死に比して悼んだ。重治は天文十三年、美濃の菩提の城に生れ、年少にして稻葉山城を奪つて智勇を見し、二十歳前後に亡命して、信長に事へ、六年の後、秀吉に附して以來十餘年、運籌、戰鬥、兩つながら併せ行ひ、寡欲、恬淡、誠に道德の地に墜ちた戰國時代には珍しい人格の名將であつた。享年僅に三十六。實に惜しいことをしたものであつた。

四三 三木城攻圍 (四)

元春と隆景は魚住に来るや、三木魚住間の沿道にある我が壘營を撃破して、糧食を納れることを長治と約した。長治は先づ兵百餘を魚住に派して案内させた。隆景も亦、生石中務少輔をして我軍を攻め、且つ糧食を運ばしめ、平田村に行つて、我が谷衛好の壘を襲撃させた。衛好は剛勇の士であるか

ら、大に戰つたけれども兵少く、遂に死して壘を敵に奪はれた。この時より少し前、敵の士手島市之助は大村に至つて狼烟をあげて三木に出兵を求め、糧食を路傍に遺棄して、生石と共に衛好を攻めた。

秀吉は衛好の急を聞いて一千を率ゐて出で、加佐村の坂に據つて、三木、大村間の通路を絶ち、豫め三木出兵の防禦に備へた。ちやうど備が成つた時である。案の如く賀相が三千の兵を率ゐて出かけて來て、大村に行く途中で秀吉と衝突した。秀吉は士卒を激勵して賀相と奮闘し、一千の兵で三千の兵を撃退して城中に追ひ返した。賀相が遁走するや、秀吉は兵を分つて、一部を平田に向けて、奪はれた我が壘を取り還した。この時、衛好の子に衛友といふがあつた。衛友は父に譲らぬ大勇で、衛好と共に奮戦してゐたが、敵の由井小兵衛に、衛好が力竭きて首を授けたのを見るや、馳せ行きて小兵衛を斬り、父の首を取り返し、秀吉の赴援の兵と共に壘營を復し、且つ糧食を奪つた。この日、長治の將士で死んだものは、別所安之、淡河定範等七十三人、兵卒は八百に及び、毛利の兵も亦死者七百を出した。これ實に九月十日午前二時である。

糧食を納れることができなくて、三木城の饑餓はますます甚だしく、馬を屠り、紙を喫し、死者の肉を食つてわづかに露命を繋いだ。昔、趙の邯鄲が秦軍に圍まれた時、その人民は窮して、人骨を薪に代へ、また子供を取り易へて食つた。三木の窮状は、實にこれと同じである。その子を取り易へたか否かは分らないが、人肉を食ふに至つては、人生の悲惨も極まれりである。秀吉は窺にこれを聞いて、落城の遠からざるを知り、いよく圍を厳しくして、時を待つた。翌八年正月六日に至つて、秀吉は一舉して宮ノ上の壘を奪ひ、再舉して鷹ノ尾と新城とを取つた。初、秀吉が兵を進むるや、敵は

みな餓ゑ疲れて起つ能はず、刀を杖にして、眼を瞶らし、齒を食ひしばり、怨望し、恨視して、殆ど全部腰を抜かしてゐた。

かく敵が抵抗し得ざるまでに立ちいたつたので、秀吉は牙營を鷹ノ尾に移した。宮ノ上、鷹ノ尾、新城は、三木の手足のやうなものである。饑餓刻々に迫り、且つ手足を断たれるに至つては、誰か命を繋ぎ得よう。そこで同月十五日、別所の一族で秀吉に従つてゐる別所孫右衛門から、最後を善くするやうにと長治にいひ遣るや、長治はこれを好機會として、淺野長吉長政のに書を致し、賀相及び弟の友之と三人、自殺して士卒の命に代はることを請うた。秀吉はこれ聞いて激賞し、請を容れて酒肴を贈つた。長治は十七日午後四時、友之と共に、先づ各々妻子を刺してから、徐ろに自盡した。この時賀相は約に背き、士卒と共に戦死することを主張して肯かなかつたので、遂に長治の寵臣衣笠八郎に殺された。これに反して賀相の妻は、約束の時刻に後れず、子女三人を刺して自害した。長治は享年二十三、友之は二十一。長治が年少の身を以て一城に籠り、三年の久しき間を堪へたのは、能く戦つたものであるはもちろん、また能く部下を統べる才があつたものである。秀吉が三木を攻陥するや魚住、高砂、端谷は自ら秀吉に歸し、御着も亦、政職が柄に走つたので、手に入つた。こゝにおいて秀吉は三木に移り、六月には宍粟郡の長水山城と廣瀬城とを攻落して、遂に播磨一圓を略定した。秀吉が三木に移つた時に、一佳話がある。秀吉は従來孝高の居城姫路に借居してゐたが、三木が陥ると直ちに三木に移つた。孝高はその不可を諫めて曰く、

「姫路は中國の衝地ゆゑ、中國に號令するものは姫路を離るべきでない。然るに君は姫路を去つて

この偏僻の地に來れるは何事ぞござる。」

秀吉肯いて曰く、

「汝の言、尤もである。我はたゞ汝が久しく居りし城を奪ふに忍びない。」

孝高曰く、

「臣、往に君を迎ふるや、既に彼の城を君に獻じたのである。何を以て奪ふといひたまふや。」

こゝにおいて秀吉は、たちまちまた姫路城に歸り、大に城を修築し、孝高には宍粟郡において二萬石を與へて、山崎城に居らせた。孝高が姓を黒田と改めたのは、この頃であらうか。

四四 宇喜多直家を招降す。

宇喜多直家も滕の文公の大なるものである。織田が強ければ織田に付き、毛利が盛んなれば毛利に従ひ、以てその命脈を繋ぎ、その虎威を借り、しかして社稷の計をなさねばならない。但し宇喜多は二備と作州を領し、且つ播州の一部をも蠶食した。自發的な勃興力はないとはいへ、その優勢なることば、三木と同日の談ではない。

初め、秀吉が上月を取るや、直家は密使を毛利に派して、毛利と共に上月を復した。しかし、織田は矢張り恐ろしいので、上月に出軍するに當つて、病と稱して家に隠れ、弟を自分に代はらせた。それ故、元春、隆景等は、凱歌を奏して歸國の途に就いた頃、直家が病が癒えたと稱して饗應しやうとしたのを断つて、岡山城を訪はすに通過してしまつた。

かく直家は兩端を持して去就を明かにせず、表面はわづかに毛利に付き、別所が籠城するや、僅に三木を聲援して、毛利の心を繋いでゐた。秀吉は直家の地に接近し、また毛利の態度から考へて、疾に直家がわれに親附の意あるを知つてゐたが、未だその地の形勢に明かでない信長は、直家が三木に聲援すると聞くや、赫となつて秀吉に、三木の攻陥を後にして、先づ岡山城を屠ることを命じた。

秀吉は、その策の當を得ざるを憂ひ、信長の命を果すことを躊躇したが、孝高がこれを聞いて

「三木の一城といへども、なほ且つ抜くこと容易ならず、ましてや三州併有の宇喜多は攻め難い。」

これを討伐するは、招降するに如かず。某をしてその任に當らしめたまへ。」
 といふので、秀吉はそれを許した。孝高は人を岡山に派して、天下の形勢を語り、毛利に附するよりも、織田に従ふ方が、遙に得策であると説いた。利害に明敏な直家は、早速尤もでござると心を翻した。孝高のこの計は、彼が未だ有岡に幽せられない時であつた。

その後、一年餘を経て、七年九月、直家は小西彌十郎を使者として、歸降の旨意を秀吉に納れた。秀吉はその旨意を諒解して、その月の四日に安土に急行し、情を陳べて朱印狀を請うた。ところが信長はこれを聞いて大に怒り、

「我が命を待たずして濫に約するとは奇怪千萬でないか。早々歸陣せよ。」

といふ。信長の氣象を知る秀吉は例に由つて唯々として播州に歸り、再び信長を説く機会を待つた。秀吉が直家と約束したのは、直家歸降の條件として、封土をそのまゝ宇喜多に與へて置くといふことであつた。信長が怒つたのもこの封土の件である。けれど信長は、かかる重大な案件を秀吉が獨断で

處理して、事後承諾を求める如きは、君を蔑にした所業であるとして嚇怒したのである。

一喝を食つて播州に歸つた秀吉は、毫も主公の短慮を憤らず、またしても例の癩癩だ、時が来れば忘れたやうになるだらうから、その時を待つて、もう一度請へばいとばかり、専ら三木城の攻陥に力を盡した。すると信長は案の如く、數十日も経たない中に直家の歸降を入れ、封土もそのまゝ與へるといひこした。こゝにおいて十月晦日、秀吉は宇喜多與太郎を招いて信忠に紹介した。與太郎が信忠に對面したのは、直家の代理として赦免の禮を述べたに過ぎない。直家歸降の風聞が傳はると、秀吉の名聲が頓に中國に揚つた。

四五 荒木村重の叛 (上)

征播の師、耐なる時、攝州がまた亂れた。六年十月、荒木村重が有岡に據つて叛いたことである。村重は固、奴僕から抜かれて攝州の重鎮に擬せられたものであつて、その信長の恩義に感銘すれば、大馬の心を有すべきである。されば往時は戦場に出づる毎に軍忠が少くなかつた、信長もそれを見て屢々感歎した。然るに村重は一朝忽焉として大恩の主に叛いたのである。そもく村重の心中なるものは果して如何なものであつたらう。

初め村重叛くの報が頻に至るや、信長は大にいふかり、その月の二十一日に、有閑、光秀等を遣はして、叛意を訊し、且つ欲するものがあらば、望に任せて與へると告げた。村重は使を謝して、毛頭叛心はないといひ、その證據として慈母を質とした。信長は質を納めて、更に村重に安土に伺候せよ

と命じた。村重は命に従つて東上したが、途中茨木に寄つて中川清秀と語つた。清秀は、村重の東上は求めて死地に入るものとし、むしろ有岡に歸つて兵を擧ぐるに如かないと勧めた。そこで村重は東上を中止して有岡城に籠つた。信長はこれを見てこの上は已むを得ないと、遂にその年の十一月三日、兵を攝州に出した。

信長は京都に入つて二條の第に憩ふや、再び光秀と秀吉の二人を遣はして、叛心を翻すが利益であると説かせた。秀吉はこの時、三木を長圍してゐたが、たまく東上してこの命を被つたのである。

秀吉と村重の親善なことは、水魚の如くであるから、秀吉は使命を幸に有岡に赴き、村重に對面して懇々懇々力を極めて説いてみたが、それでも、村重は一念を翻さなかつた。そして彼が既に別所、毛利及び本願寺と相通じてゐることも暴露した。村重が有岡に據るや、高槻の高山右近、茨木の中川清秀、花隈の荒木村正、能勢の能勢十郎、尼ヶ崎の荒木村次、三田の荒木重堅、大和田の阿部仁右衛門等、みな村重に屬した。

九日、信長は馬を進めて山崎に軍し、先づ高山右近を招降した。右近は勇將である。然るに何が故に一戦にも及ばず軽々しく歸降したかといへば、信長が宣教師に説かせたからである。當時、宣教師が渡來布教して、それがために諸侯の中、基督教に歸依したものが五十餘名に上り、中にも右近は信仰が厚かつた。これに由つて觀れば、信長の宣教師を用ひたのは、また妙策ではないか。けだしかく招降したのは、招降を上策とし、討伐を下策とする秀吉の謀略ではなからうか。實に秀吉はこの時、信盛、有閑等と共に、宣教師に同道したのである。

右近が降るや、その月、中川清秀も降つたので、攝州の半ばは平いだ。十二月、信長は陣を古池田に移し、長秀、頼隆、一益、一鐵、信忠、信雄、信孝及び降將右近、清秀等をして、伊丹の在々に城壘を築かせて、有岡城を包圍した。

秀吉は信長に參畫して伊丹に在つたが、その月、信盛等と一緒に播州に歸つた。これより先、孝高は政職も亦荒木と通じて我に叛いたのを見て、馳せて御着に至つて、政職を諫めた。政職は詐つて、「我を信長に従はしめようとするならば、先づ村重を説きて心を翻さしむるが宜しい。然らば我も亦従ふことを辭するものではない。」

と曰つた。孝高はその詐りなるを知つてはゐたが、信長の命でもあり、且つ秀吉の命もあつたのか、走つて有岡城に入つて、村重を説いた。村重は既に秀吉の言をも却けた。今に至つて何ぞ孝高の言を容れやう。孝高をそのまゝ城中に幽した。こゝにおいて一代の智將も、哀れ圍圍に呻吟する身とはなつたのである。織田氏多難の時に當つて、孝高が有岡より歸らないと聞いて、信長は、孝高を村重に與したものとなし、孝高の質子松壽長政を、重治に殺すやうに命じた。孝高は智將であるから、人に疑はれることも深く、彼が村重に與したと思つたものは、獨り信長ばかりでなく、織田の諸將の殆ど全部がさう思つたのである。しかしこの時、群疑に超えて孝高を信じたものが二人あつた。秀吉と重治である。このことは、重治が主命を伴り聽いて、秀吉が預つて養つてゐた松壽を、菩提城重治の城に匿したことを以てしてもわかる。

四六 荒木村重の叛 (下)

信長は有岡を攻むるや、長圍の計をなして、敢て進み撃たなかつたので、村重は手を空しうして城中に籠つてゐた。毛利は來り援けず、別所はますます危く、本願寺また徒に城を固くするのみである。村重は形勢が日々に衰へ、月々に弱つて、遂に城を屠られる日の來るのを看て取り、九月二日、夜陰に乗じ、五六騎を具して尼ヶ崎に落ちた。城主既に落つれば、部下の士は誰か敢てこれを支へやうぞ。十月十五日、一益に内應するものがあつて、一益をして外廓を占領せしめた。城兵はこれを見て、命の旦夕に迫れるを察して大に動搖した。十一月十九日、將士數十人は妻子を質として城を出で、こゝに全く有岡城は陥落してしまつた。孝高が獄を脱れたのもこの時である。

將士が城を出たのは、尼ヶ崎に至つて村重を説き、花隈と尼ヶ崎の二城を、信長方に提供せんがためであつた。けれども村重は聽かず、將士の勞は空しかつた。信長はこれを聞いて、將士以下の妻子及び雜兵六百三十餘人を、或は磔にし、或は焼いて、村重のみせしめにした。これ十二月十三日午前八時のできごとである。當日これを行つたところは、尼ヶ崎の七本松である。磔にしたものは將士の妻子百二十人で、彼等を十字架に上すについては、村重の慈母に手傳はせ、殊更に無慘な思ひをさせた。かくて取り更へ引き代へ架上にして、或は槍を以て突き、或は長刀を振つて薙いだ。その泣き叫ぶ聲は、四方に達した。また焼き殺したものは五百十餘人であつて、これを四棟の家に入れ、一人も餘さず火を放つて焼き殺した。磔刑、既に無慘であるのに、焼殺に至つては至酷である。さてこそ叫

喚の聲は天に響き、見る人は眼を掩ひ、聞く人は耳を塞いだ。

信長は尼ヶ崎における處刑の終れるを見るや、今度は荒木の九族を絶たんと欲して、十二月十六日その質であつた妻子三十餘人を京都に上せ、一車に二人宛乗せて洛中を引き廻し、遂に六條磔で斬つた。この日は婢女の外、婦女子といへども多くは荒木の一族であつたが、さすがに悪びれたものは一人もなかつた。殊に伊丹安太夫の子息二人は、七八歳に達したばかりであつたが、刑場に入り來るや、最後所は此處かと問ひ、坐して自若として刀を受け、人をして感歎せしめた。

將士の妻子は既に殺され、九族また斬らるゝや、村重はいよく降らず、敢て尼ヶ崎に籠城してゐた。されど落日は復び回すべからず。一日は一日より、時は村重に可ならず、尼ヶ崎にも亦居ることができないで、備後の輛に出奔した。毛利に頼らうとしたのである。村重が出奔して尼ヶ崎も落城し、村重の叛舉もこゝに終りを告げた。

村重の叛するや、人はこれを光秀の讒言に由るものとなしてゐる。光秀は爲人が奸兇であるから、讒言の如きは、或は得意とするところであつたかも知れぬ。然し村重と光秀とが仲の悪かつたことを證するに足るものは更にない。その不和の證據がない以上、光秀は何の故に村重を讒したか不可解である。けだし村重の叛は、必ず時の形勢が毛利に可なるものがあつたからであつたらう。當時の形勢は、本願寺は未だ降らず、別所は三木を死守し、且つ毛利はこれ等と相通じてゐたのみならず、上月に大捷して大に得意の色があり、これに反して信長は、この形勢の間に處して頗る苦心の色があつた。村重ならずとも、一領土を保持して形勢のよいものに附かうと思ふものが、この際毛利に通ずるのは

人情である。村重の叛意も亦、必ずこゝに發したものであらう。

〔附言〕 諸書は、光秀の讒言に由ると謂ふのみならず、村重の東上を止めのも光秀だとしてゐるが、立入左京入道隆佐記には、中川清秀としてある。要するに光秀といひ傳へたのは、清と光とを誤つたものであらう。

四七 本願寺と和す

浅井、朝倉の滅亡はもろん信玄死し、勝頼破れ、謙信卒し、また村重奔り、長治自殺し、そして毛利も振はざるに至つては、本願寺も亦孤城落日に向はざるを得ない。今や野心を包藏した本願寺のお味方は、凡て死んだり去つたりで、石山城に残れるものは、たゞ寺僧と宗徒ばかりとなつた。

かく形勢が本願寺に非となるや、八年三月朔日、講和を約すべしとの勅諭が一下して本願寺に至つた。これはけだし信長が、機を見て聖旨を利用したのである。とはいへ勅諭は勅諭である。光佐上人はこれを拜して涙を流し、一に聖旨に従つて石山を開城し、雑賀に退くといふ存意を奉答した。勅使がそれを信長に告げたところ、信長は即時快諾を與へて閏三月七日、双方誓言を交換した。この時の勅使は、近衛前關白前久、勸修寺中納言治豊、庭田中納言重道であつた。

時に光佐に光壽といふ一子があつた。光壽は和を好まず、且つ雑賀、淡路の亂民も亦城を出ても行くところがないので、光壽と共に籠城の繼續を主張した。光佐はこれを聞いて大に怒り、

「子として父の言に逆ふは不孝ではないか。臣として君の命に背くは不忠ではないか。」

と詰つた。が光壽はそれを聽き入れず、どこくまでもその主張を固く持した。光佐は憤り、且つ泣

いて、

「我は勅諭に従はねばならない。今日只今限り、汝と親子の義を絶たう。」

と言ひ渡し、四月九日、雁中を召し、下間、八木の二家宰を連れて、雑賀に退いた。これに反して光壽は五ヶ月間籠城を繼續したが、何事もなし得ないで八月二日に、前の勅使に縋つて、城を開けて信長に渡した。こゝにおいて信長と本願寺とは、全く和親を見るにいたつたのである。

初め本願寺が、深井、朝倉に與して信長に抗してから今日に至るまで十有一年、顧みれば一緇衣の人、何をか爲さう。總ては宗教心に懇へて、舉國の宗徒を煽動したからである。信仰の力や、偉大なるかなである。が亦十有一年を續けて攻めた信長も根氣の強い男といふべきである。勝敗を一時に決するは易い。朝に東に亂れ、夕に西に起り、或は南に騒ぎ、或は北に擾れて、恰も蒼蠅の拂へども去らざる如きものを平げるは、至難な業である。信長がよくこれに堪へ、遂に和して終局の勝を取つたのは彼れが實に英雄であつたからである。英雄は獨り信長のみではない。譬へ信仰心に懇へたとはいへ、能くその人を用ゐて、十有一年を支持した光佐も亦一世の雄、一代の徳である。

本願寺との和親は、織田氏に取つて喜ぶべきことではあつたが、この和親と同時に、一場の悲劇が構成された。佐久間父子が追放されたことである。信長は將士に富んでゐるといつても、その二八年から信長に事へて來たものは、勝家を除いては、信盛だけである。信盛は戦場に出づれば必ず先鋒となり、その子信勝も亦勇將であつて、父子相共に多年の功を信長に捧げ、しかも二人は、同僚、後輩の多く封ぜられる中であつて、依然として無封の將に甘んじ、三十年一日の如く戦場に在つたにも

拘らず、信長は一朝にして追放した。誠に残忍な處置である。信長の書に依つてこの事件を見ると、父子は本願寺に對陣して五年の久しきに及んでゐながら何等顯著な功勳もなく、剩へ、動もすれば諫言を奉り、君命に抗辯するは、恕すべからざることであるといふので、追放となつたのであるから、その處刑たるやますます慘酷である。しかも父子は、信長の書を見て高野に入り、高野にもゐてはいけなさと命ぜらるゝや、遂に人跡の至らない熊野山中の奥深くに遁れてそこで餓死したといふ。おもふに佐久間父子は正直者であつた。諫言を呈するのは信長の好まないところではあつたが、信盛を外にしては、能くその痼癘將軍を諫めるものがなかつたのである。おもつてこゝに至れば、著者は、父子の行事を、君君たらずとも臣臣たるの道を盡して去つたものとして、大いに稱揚せずにはゐられない。

四八 鳥取城攻落

山名の一族は、足利氏以來、但馬、因幡の二州に據つてゐた。但馬には此隅山城に祐豐がをり、因幡には、鳥取城に豊國、出石城に照豐がをつた。鳥取が最も大であつて、豊國は祐豐の甥である。豊國は初め尼子に附いたが、尼子が衰ふるや、毛利に屬し、爾來毛利に隸屬してゐた。

秀吉は八年四月、秀長に此隅山を攻めさせ、祐豐を降して但馬を平げ、五月には兵を因幡に出して毛利の士將が守つてゐる鹿野城を落し、豊國の質子を奪つて出石に向ひ、たやすく照豐を降して、鳥取に至つた。秀吉は鳥取に至るや、使を豊國に遣して、

「歸降すれば因州一圓を與へる。さもなければ質子を磔にする。」

といはせた。豊國がその返答に窮し、躊躇、逡巡して決しないであると、家老の森下道與、中村春次が歸降に反對したので、豊國はそれに同意した。こゝにおいて秀吉は、豊國の質子を城外に磔にして、彼へのみせしめにしやうとした。その有様を遙に見た豊國は、遂に十字架上の愛娘の愛に溺れ、慄へ上つて降を請うた。けれどもこの時、道與と春次は一念を翻さず、その後遂に豊國を逐ひ出した。これ九月のことである。道與等が豊國を逐ふ前のことである、秀吉は兵を收めて播州に歸つたが、再び二萬の大軍を率ゐて、九年七月、鳥取城を圍んだ。豊國はこの時秀吉の陣中に従つてゐた。敵も秀吉の再び來るを豫期して、吉川經家を迎へて城將としてゐた。經家は經世の子である。經世は經家の出發に臨んで、首桶と短刀とを餞にした。

秀吉は長圍の計をなし、城に柵を繞らして人の出入を禁じた。城兵は糧食に乏しく、しばしば城を出で、毛利に報せんとしたが、警戒嚴重にして出ることができず、二千の城兵、二千の庶民中餓死するものが、日々に多くなつた。城兵は初め馬を食ひ、馬が盡きると人の屍體を食つたが、後には生きてゐる人を食ふやうになつた。すなはち子は親を食ひ、弟は兄を食つた、己が命を繋ぐとした。甚だしきは或日一人の子供が、柵を超えやうとしたのを、我兵が射たところ、城中のものが刀を提げて馳せ集り、また死なない子供を屠つてその肉を奪ひ、或者は手を持つて走り、或者は足を取つて逃げ、首を争つて狂うてゐるものもあり、胴中に集つて血を吸るものもあつた。月を重ねること僅に四にしてかくの如き有様であるから、道與と春次とは經家に進言して、自分達の命を城兵、庶民に代へやうと決し、福光某を使させて淺野長吉に通じた。秀吉はこれを聞いて許し、且つ經家を助けや

うと告げた。經家は謝して曰く、

「道興、春次の二人を殺して、われ何の面目あつて獨り生き永らへ申さうや。」

秀吉はそれでは已むを得ずとなし、酒肴をおくり、誓書を取り、經家の檢使として堀尾吉晴を遣した。初め經世は首桶を餞とし、經家はそれを受けて、正しくその中に入ったのである。そして秀吉に惜まれたことは、經家の死も亦餘榮ありといふべきである。經家に次いで道興、春次も自盡し、十月二十五日、城は全く落ちた、秀吉は城が落ちるや、城兵、庶民を救はうと部下の士に、

「彼等は久しく穀物に餓えてをる。俄に米飯を與へては、かへつて死を招くであらう。粥にしてやれよ。」

と命じた。又その地の窮民が谷間の方へ轉住しやうとするや、玄米三百俵を施し、城は宮部繼潤に守らせ、轉じて丸山を攻めてそれを抜き、吉岡を説いて降し、遂に因幡一圓を平げた。

鳥取の役は豊國に始つて經家に終つた。經家は死して餘榮があつたが、豊國に至つては、秀吉の招降に會つて遂巡決せず、數日の後に降を請うたので、秀吉にその歸降の遲きを責められ、因幡一圓といふ約束を、二郡に改められてしまつた。こゝにおいて豊國は鬱々として樂まず、秀吉から臣事を命ぜられても従はず、攝州の多田庄に幽居した。

秀吉はこの年に東上した。彼は東上に先だつて、淡路の由良に安宅河内守を攻め、數日にして降した。東上して安土に候するや、時恰も歳暮であつたので、秀吉は賀儀を申し上げた。信長は菅屋久右衛門、堀秀政をして、

「中國討平の勞、大いに察すべきものあり、また昔日の藤吉郎ではない。實に封國の將である。明日は城に迎へて饗應するであらう。」

と言はしめた。秀吉は感佩して翌朝登城し、その翌日、更に信長に謁見して、國久の名刀一腰、白銀千枚、衣服二百、馬十頭、杉原^三三百束、皮革二百枚、干鯛千荷、鑄物若干、蜘蛛三千連を献じた。これを無数の臺に載せて山上の城に運ぶや、先頭が既に城門を入つたのに、後方はなほ山の下にあつたといふ。以てその夥しきを想像するに難くない。人々はこれを見て前代未聞の献品だといつて眼を瞠り、信長も亦これを城樓から見下して、

「秀吉は天下無雙の大膽者ぢや。彼でなくてはこんな様な真似はできぬ。」

といつた。當日、信長は秀吉の爲に茶筴を聞き、また國次の銘刀を與へた。秀吉はありがたく頂戴してそこへ安土を辭した。

四九 高松城水攻 (上)

由來、名城の名が有つて、そして奇計に落ちたのは備中高松の城である。甲は險要の地に據ると評し、乙は難攻不落といひ、丙はまた眞に天下の名城と稱する。然も一たび英雄の奇計に遭ふや、たちまち自ら開いてしまつた。これぞ地の利も人の智に如かざるの證である。秀吉が高松を落したのは、人と戦つたのではなくて、地と戦つたのである。地と戦ふに地物を以てした、すなはち自然を以て自然を征服したのである。

天正十年三月、秀吉は軍を率ゐて西に向ひ、途中岡山に寄つて宇喜多の兵を合せ、四月十日に備中に入つて、冠山、宮路山の二城を攻め、一を抜き、一を降して、進んで備中高松を圍んだ。これより先、秀吉は岡山に在つて、正勝と孝高の二人を宮内に派し、高松城主清水宗治を、備中一國を興へるといつて招降した。併し宗治は謝して曰く、

「好意は謝するに餘りあれども、今にして節を變ずるは義の許さざるところ。死なんほどなら、むしろ城において死にたし。」

それではとて秀吉は兵を進めて高松城を圍んだ。これ實に四月二十七日である。

初め秀吉は一萬五千を引き連れて龍王山に軍し、秀勝信長の四子で秀吉の養子に五千を付けて平山村に陣取らせ、宇喜多忠家を八幡山に配した。この時忠家の軍勢は一萬からあつた。秀吉は龍王山から見下して、この城は東北に立田山があり、鼓山があり、龍王山があつて、西南には足守山がある。且つ三方に沼澤が繞つてゐる。今、來つて龍王山に在りといへども、尋常の策戦では抜くことできない。足守川及び山々の溪流を利用して水攻とするが一番よからうと諸將と議し、五月七日、陣を蛙ヶ鼻に移した。そして孝高の士の吉田長利の築堤案を採用して、西方の門前村から蛙ヶ鼻に至るまで、二十六町の長堤を築いた。堤上の幅は約六間あつて、宛然大道の如くであつた。

丁度長堤ができあがると、足守川が氾濫して、水は滔々として至り、雨はまた十日以上に亘つて息まず、城はたちまち水に浸つてしまつた。城兵は樹の上に巢を作り、屋根の上に寝るなど、五千の人は甚だ困憊した。これより先、毛利は秀吉の西下を聞いて、元春と隆景を派した。兩人は合計三萬を

引き連れて、五月二十一日、天神山、寺山、服部山に着到した。次に輝元も亦來つて猿掛山に陣し、その一部を幸山城に置いた。毛利は、來着するや直に一戦の下に秀吉を撃退しやうと欲したが、足守川が氾濫して戦ふに便ならず、城の水に浸つて城兵の困憊するを眼前に目撃しながら、空しく日を消してゐた。

秀吉も亦、毛利の到着したのを見て、これを撃滅しやうと、急使を安土に上せて、

「毛利を一擧して覆すはこの時に在り。速に援兵を送りたまへ。」

といつた。信長はこれを聽いて、

「予も亦さやうに信じてをる。毛利を覆滅して直ちに九州に入るであらう。」

信長はこの年勝頼を亡して後顧の憂を除いてゐたので、かくいつたのである。秀吉は使者の復命を聞いて得意の色を動かしたが、援軍の來らざる中に高松城を落して、主君の賞讃を博さうと、いさゝか焦慮の體であつた。

この時に當つて毛利は、宗治が忠を竭して城に在つて命の旦夕に迫れるをば救はねばならぬ。それに信長は必ず援軍を送るであうから、果してさやうな事態になつては毛利の危急存亡に關する。そこで隱忍自重の必要から一旦講和をなすに如かずと信じ、陣僧の安國寺惠瓊を遣して、孝高に講和を提議した。

五〇 高松城水攻 (中)

惠瓊は才智俊敏で、元就以來毛利に事へ、外交の事務を掌つてゐた。彼は我が陣營に來つて孝高に面會し、

「兩軍未だ雌雄を決せず、空しく時日を消費してゐるが、我等の方から一步を譲つて和議を調へたうござる。當方よりは備後、美作、因幡、伯耆及び備中の半國を割きて織田氏に譲る。織田氏はその代りとして、高松の城將士卒を助命せられよ。」

と提議した。孝高は退いて秀吉に謁し、毛利の提議を述べたところ、秀吉は頭を掉つて、

「城將の首は必ず欲する。」

こは誠に秀吉が平生の態度に似ぬところであるが、それはけだし信長の意中を慮つたからである。且つ信長の西下も近ければ、必ずしも和議を望まなかつたのである。孝高は再び惠瓊の前に出て、和議の容れられぬこと、並にこの際城將の首を獻するやうにと催告した。惠瓊が歸つて復命すると元春隆景の兩人は慨然として、

「盡忠の士を殺すには忍びぬ。再び至つて前議を容れさせよ。」

と命じた。惠瓊は再び蛙ヶ鼻を訪れて孝高に懇談したが、孝高は言下に拒絶した。この時、蜂須賀正勝と生駒親正の二將は惠瓊を別室に誘ひ、

「信長公の親發を眼前に扣へて、上原氏等は既に欺を通じてをる。一將の首を争ふ時ではござらぬ。」

と交々語つて、上原等の誓書數通を示した。惠瓊はそれを見て愕然として、一宗治の爲に和が成らな

いのである、この上は初に宗治を説いて首を貰ひ受け、毛利を覆滅から救ふに如くはないと、直ちに船を借りて高松城を訪れた。

惠瓊が城に入つて宗治に會見し、情理を盡して引決を促すや、宗治は快く承諾して曰く、

「吉川、小早川兩氏は、某の上を思はれ過ぎてござる。和が成らうとして我が爲に成らないのは遺憾でござる。某から首を差出して和議を成立せしめませう。」

惠瓊はこれ聞いて感賞して城を出で、その由を秀吉に報じた。これ六月一日のことである。その翌二日、更めて宗治から書を送つて、来る四日に首を渡す故、城兵の助命を誓はんことを懇願した。秀吉は聞いて感歎を禁じ得ず、快諾し、且つ酒肴をおくつた。宗治の自裁が確定するや、秀吉は孝高を隆景に接衝せしめて、講和條件の大體を決めた。

未だ四日の朝とならず、和議も十分確定しない三日の夜半十一時頃である、信長が光秀に弑せられたとの凶報が、秀吉の頭上に落下した。信長は、一日の夜半過ぎに弑せられたのである。この報は長谷川宗仁の急使が齎した。秀吉は聞いて大に慟じ、暗涙を湛へて、暫くは言ふところを知らなかつた。孝高は入り來つて秀吉の膝を敲き、

「御運が向きました。御運が向きました。」

秀吉は稍々あつて肯き、使者を正勝に託して獨房に監禁し、且つ既に一報を得れば再報は用無しといつて、人を數里の外に派して、次々に來る使者を止め、且つ光秀の使者を警戒した。秀吉が人を派するや、使者は果して續々と來り、密使も亦幾人か來つた。秀吉はそれ等を悉く制縛して西下を止めた。

明くれば宗治が死を誓つた四日であるが、秀吉は京都の變を嘘にも出さず、早朝殊更に陣中を廻り、堤上を往返して軍紀を警戒した。午前十時に至つて宗治が蛙ヶ鼻に來り、一死の約を履まうとして再び士卒の助命を請ふや、秀吉は、

「われ何ぞ二枚の舌を用ひん。汝の生前これを示さん。」

といつて、直に正勝に命じて大船小舟を城に派して、城兵及び器物の類を毛利に送らせたが、宗治はまた見るの要なしといつて、吉晴の檢使の下に、兄月清と共に割腹した。この時、宗治の小性の松本平藏は、主に従ひ來つて宗治を介錯し、自分も腹を切つて舟中の者に介錯を請うた。吉晴が清水兄弟の首を收むるや、秀吉は陣中に令して萬歳を三唱せしめたが、その聲は山嶽を震動した。秀吉は飽くまで京都の變を祕さうと思ひ、清水兄弟の首を鹽に漬け、信長の實檢に供すると稱して、使者三人を附して賑々しく京都に上させた。但し使者には、窺かに、姫路に至つて留守の將三好武藏守に渡すべしと命じたのである。

毛利の陣では、秀吉方の凱歌を聞いて宗治の死せるを知り、みな相顧みて歎惜した。この時疾くも秀吉の使者が來て惠瓊を招いたので、惠瓊が出現すると、秀吉は孝高をして、

「城將が死んでしまへば、我等の要求も満されたのである。當方より讓歩して、山陰は伯耆の八橋川を以て、山陽は備中の河邊川を以て分界線としやう。これにて異議なく講和を締結いたされよ。」といはしめた。惠瓊は喜んで肯ふ。早速誓書を作つて惠瓊に與ふ、惠瓊は我が陣僧大和坊を伴つて毛利の陣に歸り、これを兩川に告ぐる。隆景は既に前日孝高と大體案を議了してゐたので、もちろん異

議なく、元春も亦論がなかつたので、議はたちまち成立して、輝元、元春、隆景も亦誓書を作つて我が誓書と交換し、且つ輝元の末弟元綱と元春の二子經言の二人を質とした。これ四日の正午前後のことである。

既に和議が成立すれば、寸時もをることはできぬ。城には杉原家次を入れて、その夜の八時に忠家の軍を還し、同時に森高政に、

「夜半になつてから退却しやう。其方は残つて毛利の舉動を監視してをれ。京都の變が毛利の耳に入るのは案外速いであらう。さうすれば毛利は誓書を破棄するやも計られぬ。何となれば彼の誓書は變報の至らざる中に作つたもので、我が方に曲が在るからである。若し敵陣が動搖したら、速に長堤を破れ、河水氾濫して、敵は如何にもがくとも、一日二日は渡り得まい。山路から來るにしても、羊腸たる坂を匍匐するのであるから、一日に一萬も出し得まい。明日の午後二三時頃まで監視して何事もなかつたら東上せよ。」

といひ置いて、孝高に殿を命じて、五日午前二時に退却を開始した。

五一 高松城水攻 (下)

秀吉が退却するに先だつて、京都の變は、四日の午後五時に、既に毛利の陣に達してゐた。當時在京してゐた紀州雜賀のものが知らせたのである。

これを聞くや、隆景はもちろん、穴戸備前も元春の陣に集り、謀議した。元春は憤り、且つ慨々、

「今日の事は全く秀吉に騙されたのである。曲は彼に在り、誓書を破棄するも何かあらん。」
隆景は黙然として暫く沈思してゐたが、

「兄上の御心中お察し申す。然し古よりこのかた、事を約するには必ず誓書を以てする。誓書は實に明鏡でござる。先人元就が死に臨んで輝元の輔佐を我等兄弟に命するや、我等また誓書を作らしめられ、日下の印は兄上が押され、某次に印したではござらぬか。それとこれとは異なれども、誓書たるは一である。然るに今この誓書を破るとあつては、取りも直さず元就に對する異心でなくて何であらう。且つ誓書を交へておきながらそれを破るは信義あるものとは申されじ。秀吉が國に歸つて約を遂げた後、始めて兵を出すも遅くはござらぬ。」

と説いた。元春はその理に屈したが、なほ隆景は元春が輕舉に出ではしないかと、竊に監視を置いて歸陣した。果して監視は報じて曰く、

「何事かは存ぜぬが、陣中舉つて馬に鞍を載せ、宍戸もこれに倣つてござります。」
隆景それを聞いて、

「兄上には我が諫言に憤られたか。然し誓書を破るからは必ず我に告ぐるであらう。」

と、鵜飼新右衛門、井上又右衛門に命じて俳優を招んで酒宴を開いた。鵜飼は主人の意中を察し、四海波靜かにして國も治まる時津風と諷ひ出した。俳優はそれに伴れて舞ひ納めた。元春は人を派して物に隆景の陣を窺はしめたが、陣中の體たらくの報告を聞いて苦笑を禁じ得ず、遂に追撃を止めた。

高松城の攻陥は、自然の水を以て自然の地を征服したのである。宗治の自裁と否とに拘らず、今數

日も放任して置けば、水は城を没して、人は魚と化するところであつたのである。然し宗治は竭忠の士である。彼は秀吉の到着する前、隆景に召されて、冠山、宮路山等の諸城主と共に隆景に調した時隆景から、織田氏に附するも憾みすと告げられたが、その時慨然として曰く、

「何を申さるゝや。我等は毛利氏に忠を盡すことは知れど織田氏に隸屬すべき所以は存じ申さぬところ。」

一座の者はこの言を聞いて大に勵まされ、各々籠城に決したのであつた。その時隆景が諸城主に刀一口宛を與へると一座のものはみな喜んで、必勝を祝したが、宗治は又慨然として曰く、

「いつも柳の下に鱒はゐい。」

宗治はこの時既に死を決してゐたのである。誠に彼は智勇の士であつた。

然し、宗治に智勇ありといつても、到底秀吉の敵ではない。秀吉の彼の水攻の如き壯大な策戦計畫は、宗治の思ひ及ばぬところであつた。然も秀吉のこの策を爲したのは奇に似て奇に非ず、京都の變以後の彼の神讐奇策を見れば、英雄の業として亦當然の計畫である。けだし秀吉の眞價は、高松城の水攻に非ずして、京都の變後の事態に處したところにあつた。京都の變は秀吉に取つては死活の大問題である。尋常の將士ならば、周章狼狽して爲すところを知らず、見るに堪へぬ醜態を演じたであらう。實に彼なればこそ、默想沈思の間に百計を案出したのである。すなはち使者の口を錯し、續いて來る者を返し、陣中を廻り、宗治を殺し、和を結び、忠家を還し、敵の追撃に備へ、そして東に歸つたのである。絶代の英雄ならざるにおいては、短時間にこの周到なる處置は爲し得ないものであつ

た。實に秀吉は逆境を利用して順境となすの神算を持つものであつた。けだし彼れが常に大處、高處遠處に着眼してゐたからできたのである。元春は驍勇にして、善く變に應ずるの術を解してゐる。隆景は明智にして善く事に處するの法を知つてゐる。とはいへ、兄は善く戰ふことを解し、弟は信を守ることが知り、たゞ少しく彼我を知るばかりであつて、秀吉の如き遠大なる着眼は持ち合せなかつた。若しも彼の時毛利が秀吉を追撃したら、三萬の大軍は水中に深く溺れたであらう。また過半の兵が追ひ至つて戰には勝つたとしても、秀吉の得意の擒縱術に陥つて、講和するのが落であつたらう。名は戰勝しても實が伴はず、信を破つて武名を汚すの謗を免れなかつたことは明かである。毛利がこれに陥らなかつたのは全く幸であつた。

五二 講和に關する謬説 (上)

秀吉が變を聞いて東に歸らうとし、毛利と和を結ぶに當つて、自分から京都の變を語つて毛利の義俠に懇へたとは、甫庵太閤記に記するところであつて、それ以來秀吉の傳記と稱するものももちろん正史に至るまで、みな殆どその説を傳へざるはない。三百年來人々は大概これを信じてゐるが、それは大なる誤である。尊重すべき史料や正確な史料として我々が採用してゐる記録や文書には、毛利の義俠に懇へたなど左様な呑氣な話はない、それはすこしの形跡もないことである。

これに對する研究は、既に一二の先輩において試みられてゐる。然し著者にも多少の研究はある。諸家に一步を進めたるものがないでもない。敢て著者の研究を略述しやう。先づ事變を告げて講和し

たといふ數多の書の根本史料となつたものから見て行かん、それは實に甫庵太閤記であるのである。それには、

六月三日の子刻、京都より飛脚到來し、信長公信忠卿二條本能寺にして昨日二日の朝、惟任がために御切腹にて候、急御上着有て日向守を討平げられ然るべく旨、長谷川宗仁より密に申來しかば、秀吉慟せること淺からず、然れどもさらぬ體にもてなし、四日の朝御馬じるし許持せ、陣廻りし給ふ、つねは百騎計めしつれられ見廻給ふが、此事を聞かれしより、一しづめ、しづめ堤を打廻り給ひければ、輝元彌降參をぞ請にける、先月下旬より備中備後伯耆三ヶ國を上げ申す可くの條、御和睦の義ひとへに奉頓の旨再三に及び、其上諸事御入魂に預り候はゞ向後疎意を存まじき旨、牛王寶印の裏を懸へし上卷の起請文並に人質を進上申す可しと小早川吉川より申し來りしなり、秀吉信長公の御事を聞召しかたゞ相ひ濟す可しと思はれけれども、明五日の朝返事に及ぶ可とて其日は使者を歸されにけり、五日の朝、小早川吉川より使者來りぬ、爰に於て秀吉、隱より見るゝはなし亡君の御事隠すとも、やはかくるべきかと思惟し今度信長公去二日惟任日向守逆心により、御父子京都に於て弑せられ給ひぬ、以上にも最前承及の筋目の如く相違無く仰談せられ候はんや否の事、兩使還て輝元へ申届候へ、其上を以て相極む可しとて又使を歸し給ひけり、即兩使立歸て輝元へ小早川吉川を以て信長公御父子の事を申ければ、家老の面々よび集め、いかゞ有べしと評議有けり、年わかうして勇勝なる人々は是天の與る幸なり、打破て歸陣し世中の體を御見合せ宜しからんと高言を吐も多し、又心有はとかうを云ぬも半ばせり、何れを是とも、何れを非とも、一着まちくになりし處に、小早川存知寄し通申上みんと、指を折て云けるは、今度信長亡給ふ事、秀吉のためには一往不吉の兆なり、爰を鍛直し惟任をも討平げ逐年威勢加り行事あらば、今度變約の義、骨髓に徹し忘れもやらず恨ふかゝるべし、然れば則ち當家をば葉を枯し根を絶す計に打果さる可く候かは一。信長御父子切腹の注進は、とく秀吉聞申さる可し、然るを取しづめたる事共多かりし、尤なる裁

判とこそ存候へ、其上百人は百人千人は千人昨日の無事の扱かやうの節を幸に、濟し申さる可き處なり、其扱をも甚以てよしとせず、昨今兩使を徒に歸し侍りし事至剛なる所存是を以て能く存ぜらる可きか是二。秀吉年來文武の達者なりし事共、問ても之を知傳へても之を識るに、離倫絶類の武勇才智兼ね備りし人なれば、是天下の大器なり、天下の大器は天の生せる所ぞかし、豈人力の及ぶ所にあらむや是三。かやうの危き節を見續給ひなば、秀吉も一入の合力に存ぜられ、當家入魂根深帯固るべし、願ば昨日の筋目聊相違無く仰談せられて宜しくおはしまさむや、然れば信長公の御弔として、先づ年寄中の中、一人つかはされ宜しからむや、又弔合戦は秀吉上洛ましまさば加勢の義をも御沙汰然る可く候はんや、と隆景おいらかに諫ければ、滿坐黙止してけり。輝元尤にや思はれけむ、其議に同じ右の兩使に福原越前守廣俊を相添、信長公御弔として、秀吉の陣へまいらせらる、兩使蜂須賀彦右衛門尉を以て、信長公かくならせ給ふ共、最前約諾の筋目相違有まじきとの事におはしまし候條、御入魂の儀奉頼由、輝元並に小早川吉川、向後疎意存まじき旨、誓紙を以て申されしかば、秀吉も斜ならず悦給ふて、有のまゝ心底を残さず申されけるは惟任を早速討平げ、亡君尊靈の憤を散ぜむ事掌握に在り、其元只今輝元入魂の義によれり、何より以て大慶に候なり此節を窺ひ、連々承候筋目相違せらるゝに於ては浮田を是に残しをき、某は上洛して、弔合戦を挑なんと心腑に銘じ候し、然處に向後他事無く入魂有る可く誓紙固く信を守らるゝと云、危節を相救はる可きの結構と云、傍以て大慶甚深候、信長へ忠孝を報謝せしむ可き前表此上有間敷と感悅再三に及べり、さらば明日打立つ可きの條、鐵砲五百挺弓百張旗三十本御合力有給り候へ、予も又向後疎略有まじき旨誓紙あらんとて福原越前守並兩使を呼寄せ、血判に及び口上を委く宣られしかば、何も承其旨輝元兩川にも申聞せ候はんと御暇申けりと曰つてゐる。この説が一たび源となつてから、流れは滔々として三百餘年に及んだ。けれども尊重すべき記録は孰れも甫庵の證人たることを避け、正確な古文書は、甫庵の説と正反對である。

五三 講和に關する繆説 (中)

今尊重すべき記録の一たる秀吉事記を見ると、その惟任退治記に曰く、
擬備中表の秀吉陣には、六月三日夜半計に、密に注進あり、秀吉之れを聞きて、心中愁傷限り無しと雖も、少も色に出さず、彌々寄陣を張り、日畑の要害、奇策を以て現形せしめ、其の外一統の者を引き着けり、此の時秀吉狂歌を讀みて諸陣に觸れたり。

兩川のひとつに成て落ぬれば

毛利高松ももくづにぞなる

兩川は吉川と小早川を云ふのみ、敵陣に之れを傳達せり、其の後高松城大將五六人切腹して殘黨相ひ扶けられ可きの旨降參致し、又毛利家よりも懇望の條々有り、國の中を分ちて備中備後伯耆出雲石見以上の五箇國を渡し進め、誓紙に添えて人質を出し、御旗に續く可きの由、再三申來る。然れ共高松の事、生有るの類は、鶏犬に至るまで悉く之れを攻め殺し、毛利家に對しては、其の根を斷ち其の葉を枯す可きの存念たりと雖も、速に此表の弓箭を果し、京都の本意を達す可きを思惟せるを以て、高松城主清水兄弟と藝州より加勢の主なる人三人を切腹せしめ、雜兵は命を扶け、杉原七郎左衛門尉を檢使となして城を請け取りて、丈夫に人數を入れ置き毛利家より懇望の條々に任せて、五箇國並に人質誓紙を請取り、先づ毛利家が陣を拂ひ、秀吉は心閑に持ち成して六月六日未の刻に備中表を引き云々、(原文は日本式漢文、今これを直譯す)

これを見れば、一言も事變を告げて講和を締結したといふ文意がない。更に古文書に徴すれば、豊臣秀吉披露書には曰く、

一明智め構逆心、上様京都に御座候を、夜討同前にいたし、御腹をめされ候、我等在京をいたし於在之は小

者一人にて成共、御座所へ走り入り、腹十文字に切申候は、本意の上にて御座候、其刎備中國へ罷立、かしかしや城、すくも城責崩、悉刎首候て、重而高松と申城は名城にて、三方ふけを抱、其上堀ひろく、たけたち不申付而、力責成不申、可致水責と筑前見及、右高松取巻、堤をつかせ、水はや土居半にあがり、城迷惑仕候付て西國悉催毛利一類後卷て、罷出、五萬計にて筑前二三萬にて取巻候處へ、五六町に罷成相陣をかまへ、後卷可仕と敵相定申候事、

一右の陣取を筑前不用、後卷而已堅取巻申候へば、城主腹をきり可申と懇望申候へ共、免不申候處、六月二日に於京都、上様御腹めされ候由、同四日に注進御座候、筑前驚入候といへども、御腹之御供をこそ不仕候共、於此陣者任本意城之事は、不及申、毛利を切崩刎首申候は、明智退治之儀は安御座候と存切、六日迄致逗留終城主事者不及申、悉く刎首候事

一手前隙を明候間毛利陣所へきりかゝり、切崩に相定候處、毛利令懇望、國を五ツ筑前に出し、人質を兩人迄相渡可申由申候へ共許容申間敷に相定候といへども、明智め討果申度に付、毛利一書並血判人質兩人迄請取、同七日に廿七里之所を一日一夜に姫路へ打入、人馬をも相休切上可申存候處、信孝様大阪に御座候を、明智め河内へ令亂入、はや大阪を取巻、御腹をめさすべきの由、八日の酉刻に風之便に御注進候之間、若信孝様御腹を被召候ては何かも不入儀と存夜晝なしに十一日之辰之刻の刻に尼ヶ崎迄令着陣、入數不取揃討死仕候共、川を越致後卷可申候に相究候事

と。これは秀吉から岡本次郎右衛門尉、齋藤玄蕃助兩人に與へて、信孝、信雄に對毛利、對明智の始末を報告した文書中の二章である。これに由つて見ても、一言も事變を明かにして和を結んだ形跡はない。

講和は實に事變を秘して神速に結んだのである。その唯一確實な證據は、當時の誓書を見てもわか

る。秀吉から毛利に納れた誓書は左の如くである。

起誓文の事

一被對公儀、御身上之儀、吾等受取申候條、聊以て不可粗略事

一雖不及申候、輝元、元春、隆景、深座無如才、吾等掛進退、見計申間敷事

一如斯申談する上は、表裏、抜公事、不可有之事

右之條々、若於有詐者、忝日本國中大小神祇、殊に入幡大菩薩、愛宕、白山摩利支天、別而氏神之御罰、可掛蒙者也、依而起誓如件。

天正十年六月四日

羽柴筑前守秀吉 血判

毛利 右馬頭殿
吉川 駿河守殿
小早川 左衛門佐殿

これに由つて觀れば、信長の在世を詐つたことが明かである。第一條の公儀に對せられて云々の意は注解すれば、公儀は信長のこと、身上云々は毛利のことである。吾等とは秀吉のこと、粗略云々は秀吉が毛利の身上に就いて信長に對し、粗略の扱をしないことを誓つたのである。

五四 講和に關する繆説 (下)

秀吉の誓書に對して疑あるものは、更に左の毛利側の文書を見れば、その疑は氷解するであらう。

秀吉が山崎に大捷するや、毛利は使を上せてその勝利を賀した。毛利の文書とは、この時の使者安國寺惠瓊と林木工頭とが毛利に送つた手簡である。その二章を抜いてみる。

一秀吉者於岩崎互以誓紙申定候辻、今以可爲同前之由被存候、雖然秀吉請所氣遣之砌、一度兄弟契約仕候間被副御力御入魂候者可爲本意候、信長御果候後、更以血判申談候辻相見不申候
一藝州各様御分別は、於岩崎陣被仰定候は、信長御出と申に付候而こそ被作御神文にて候、今又對秀吉候而は御約束もさまで無之候事

信長御出と申に付云々は、明かに信長の遺害を秘したことを語つてをる。

他年一日、吉川廣家が輝元に書を呈してこの事をいつたことがある。それは亦左の通りである。先年備中高松之城太閤様御責之刻、信長御生害之故當方御和平被仰談御陣可被打入之折節、從紀州雜賀、信長不慮之段儘に申越候、下々申様は、此時手を返し矛盾に及候は、天下即時に可被任御存分に處を、隆景、元春御分別違候と各被申候得ども、前日神文被取替候辻無御忘却被相届之段、太閤様御感被成候而、其故御當家于今如此御安堵之段、隆景折々御物語候而、御自慢之一に候。

こゝにおいて、これ等一、二の手簡に由り三百年來流傳の講和事情は、全然覆されたわけである。然かもこの事は著者一個の力ではない。既に往年史學會員某氏がその一端を發表し、またそのうち福本日南子が斷定したことであつた。著者は更に此の研究に一步を進めてみたい、すなはちその源の源を探つてみたい。けだしはゆる火のないところに烟は立たないからである。甫庵が煙を立てたのであるが、その火は果して何れにあつたか、そこに研究の餘地がある。

著者の研究に由るときは、その火は實に太閤自身の言葉にある。太閤は一日施藥院において自分は

天子の後胤であると語り、そして更に曰くには

安藝の毛利と對陣し、すでにかれを水責にせめころさんとせしに、無道の明智惟任めが、六月二日に、信長公をうち奉るよし、飛脚到來す、此事天下にやがてかくれなかるべきに、中々敵にしらせず上落せば、あしかりなんと思ひ、しかの次第にて、いそぎ龍上り、主君の御甲合戦をいたさんと欲す、但しかやうのおちめを見て、わがあとをしたひうたんと思はれば、かへりて武勇のよはきに似たり、尋常に只今いくさしてそれを甲合戦にいたすべきと申つかはせば、毛利家にもさすがあはれと思はれけん、また秀吉が主君の爲に身を捨て、さいごの合戦をいたさんをおそろしくや傳けん、左右なく人質を出し候ひし程に、其まゝ上落し、につき惟任が峰ほこり、青龍寺まで出張せしを、六月十三日に山崎おもてよりつきくづし、雜兵までのこらず、うちはたし侍りぬ。

こは松永貞徳の著書戴恩記の原文である。太閤が長袖を誑して、講和は公明正大に調へたといひ、自分の武勇の絶類を示してをるではないか、この太閤の言葉が實に流傳の源の源である。全く歴史は流傳の源に溯り、更にその源に溯つて、源の源を極むべきである。果實に仁核のあるが如く、歴史にも亦仁核がある。著者はすなはちそれを採り、高松城の一件に對して三百年來の疑問を解いたつもりである。

終りに臨んで一言すべきは、備中高松に在る清水宗治の首塚に對する瀬川博士の考究である。博士は、史學雜誌に精細な攻究を掲げてをる。博士は中國兵亂記と吉備勇士傳を引いて、その首塚は秀吉が宗治等自裁したもの、首を埋めて建立したる一基であるとしてをる。が博士の引いた二書の文中には、首塚を建立したとはあつても、首を埋めたとは書いてない。それがためであるまいか、博士は首

塚を發いてみて地下より骨片を取り出してそれに據つて二書と相俟ち骨片は宗治の首であるとし、塚を宗治の首塚と断定したのである。誠に親切な研究ではある。けれどもそれは誤謬である。秀吉は、宗治の首をその地には置かず、遙に姫路に送つたのである。川角太閤記に曰く、

一陣中御しづめ可被成ためと相聞え申候。二ツ桶に入鹽づけにして如_レ此仕候毛利家もいまだ引不_レ申候よき御次而のことに候間今少見及堀久太郎此おもての様子くはしく申含やがてさし上せ可_レ申候此頸御披露被_レ成候へとて先は森お亂福澄平左衛門所まで陣中をば上様への進上とて早打三人に御上せ被_レ成候事。

一御内證には上様は御切腹の事に候へば此頸實檢可有君なしとて播州姫路に被_レ召置候御留守居三吉(好)武藏殿え此頸姫路のらんかん橋に被_レ掛候へ心持候事。

當時の事情から考へると、これをこそ眞實とすべきである。但し川角がこの二つの頸を、一つは宗治のものであり、一つは小性の松本平藏のものであるとしてゐるのは、一つは宗治の兄月清入道の頸であるのを平藏のものと間違へたのであらう。

五五 本能寺の變

「老阪西に去れば備中の道。鞭を揚げて東を指せば天猶早し。我が敵は正に本能寺に在り。敵は備中に在り能く備へよ。」とは、光秀が當時の意氣を能く描寫してゐるものである。光秀は信長に従つて、家康に對する饗宴の接待役となつてゐたが、俄に出陣の命を被り、五月廿六日居城の丹波の龜山に歸つて、翌日愛宕山に詣で、その夜は山上に一泊し、三たび圖を卜して判じて後翌廿八日山上において

歌會を開いて百韻を納めた。當日、紹巴等、連歌の名のある者が集つたが、その時左の句を獲た。

ときは今あめが下知る五月哉

光 秀

水上まさる庭の夏山

行 祐

花落ちる流れの末をせきとめて

紹 巴

これは光秀が詠草に託して胸底の祕密を神前に披瀝したものである。すなはちときは土岐で、光秀の姓である。これを譯すれば、土岐は今天下を統裁せんとする五月にてあるかなといつたのである。

光秀は歌會を終つて龜山に歸り、六月朔日、夜に入つて明智左馬助光春、齋藤内藏助利三等の腹心のものを四五人招いて、額を鳩めて信長弑逆の擧を凝議し、その夜、軍を率ゐて龜山を出發した。

龜山を出で、老阪に來り、西に去つて備中に至らずして、東を指して京都に入れば、時は味爽である。光秀は馬を進めて本能寺を圍み、門を破り、塀を越えて亂入した。

これより先、信長は安土を出て、備中に至らんと京都に來つて、小性等二三十人を従へて本能寺につた。信忠も亦僅に數十人の家人を従へて妙覺寺に宿つた。午前四時に近き頃、信長は寺外に騒々しい聲を聞いたが、庶民の喧嘩であらうと信じて氣にも留めなかつたところ、俄に砲聲が轟き、矢丸が飛來する。森蘭丸が走り出で、敵の旗印を視て、

「叛者は明智でいゝる。」

と報じたので、はじめて

「巴むを得ない。」

といひ、直に令を下して、自分は堂に上つて弓を引き親ら大に戦つた。蘭丸は亦槍を振つて登り来るものを突き落し、奮戦大に力めたが、終に安田作兵衛に斬られてしまつた。蘭丸の仲の弟森力、叔の森坊等も亦大に戦ひ、相前後して長兄の後を追ふ。小姓數十人が善く戦うたが、何分にも敵は數千人である。信長は矢種が盡くるや、弓の弦を断ち槍を揮つて奮戦したが、たちまち創を受けて、手指の自由を失つた、こゝにおいて信長は侍女を堂中から去らしめ、獨り火を放つて、堂中深くわけ入つて、室を閉ぢて割腹した。

信忠は急を聞いて妙覺寺を出て、本能寺へ行かんとして途中で村井春長軒に遭ひ、早や本能寺が落ちたと聞いて二條の第に走り入つた。光秀はこれを聞いて、追つて二條を包圍した。津田又十郎、同源三郎、同勘七、同九郎二郎、同小藤次、福富兵左衛門、村井春長軒、菅屋九右衛門等六十餘人、或は防ぎ戦ひ、或は突き出で、力を竭して戦つたが、これまた衆寡敵せずして、一門郎黨ごとく枕を並べて戦死した。信忠は支へることの不可能を知つて、火を放つて自刃し、鎌田新介に介錯させた。かくして光秀はその本懐を達したが、今や彼は天が下を知ることとなつたのである。夜は梅雨の中に明けて、天は墨の如くであつたが、光秀の胸中には一時の天日が輝いて、定めし快晴を覺えたであらう。

五六 山崎の決戦 (一)

秀吉は疾驅して歸東の途に上つたが、備前の野殿で、中川清秀の書面に對する返詞を出した。信長

信忠は健在であると、けだし詐りである。岡山を過ぐるに當つて、宇喜多の老臣に、毛利追撃の萬一に備へることを承諾せしめ、その夜は沼城に一泊して、翌六日には福岡の渡において汨々たる大水に遭ふや、

「水を渉るに當つて一卒一物をも失つてはならぬ。今一卒を失へば、人は三百も五百も失つたといひ、一物を失へば、百荷も二百荷も失つたと取沙汰するであらう。固く戒め、大に慎んで彼岸に達すべし。」

と將士を戒めた。この時、高政が高松から追ひ來り、

「毛利は退却し、長堤の破壊、監視、その處理兩つながら残るところなくいたしてござる。」と述べ、こゝにおいて秀吉は毛利に書を與へて始めて京都の變を告げた。

秀吉は福岡を涉つて西片上に出で、これより船に乗つて赤穂に上り、赤穂からは又陸路を取つて姫路に着した。これ八日の午前十時である。秀吉が城に入れば、洗湯は既に沸いてゐた。彼は三日疾驅の勞を一洗しやうとして、堀秀政に遠慮の言葉を發して曰ふには

「貴殿が晝夜兼行の御苦勞はお察しするが、母への對面を急ぐほどに、入湯をお先に失禮する。貴殿は後刻信勝と共にゆつくり入られよ。」

英雄が人の心を攪ること、かゝる間にも見られるではないか。秀政は信長の將で、秀吉の戦友である。今秀吉と共に在るのは、信長の使として備中に下つてゐたためであつた。秀吉は入浴中にも拘らず、小性を浴場に召して曰く

「速に將士に告げよ。明朝、京師に出發する。先づ一の貝で飯を喫し、二の貝で繰出し、三の貝で伊南野に閔兵をこゝろみやう。」

更に金奉行を召して、天主に貯へある正貨の額を問ふ。奉行は銀七百五十貫、金八百餘枚と答ふ。秀吉は聞いてうなづき、

「それを一貫一枚も残さず悉く蜂須賀正勝に托して、將士に分配せよ、知行に應じて按分するがよい。」

次に倉奉行を召して曰く、

「米倉の在米は何程ぢや。」

「八萬五千石でござります。」

秀吉曰く、

「米倉を開いて、向後二十日間、兵卒の扶持を平素の五倍とせよ。足輕以下の妻子の樂は、もつばら扶持に懸つてをる。扶持の加増は他意あるにあらず、茶でも飲ませて平生の苦勞を忘れさせる爲である。」

秀吉の大難に處する態度が躍如としてゐるではないか。彼は光秀と一六勝負を決意してをるのである。秀吉は固より光秀が己れの敵にあらざるを知つてをる。然かも彼が一六勝負を決意したのは、諸侯の向背を慮つたからである。又これを浴後とはせず、浴中に語つたのは、さきに孝高が姫路に滞留せず直ちに長驅して光秀の不意を討つべしと献策したので、大に軍備の進捗に心急いでゐたからである。

但し財を散じ、米粟を分てるは、軍旅を賑はして、士卒の心を收めるに在つた。

秀吉は浴場を出て席に着き、粥を啜りながら戰友、近臣と閑談し、秀政に對つて曰く、

「某に籠城の意志はござらぬ。既に金銀米穀を散すべしと命じてござる。いよ／＼大博突を貴覽に供するであらう。」

秀政は曰ふ、

「そは亦機宜に適せる痛快事でござる。今天下の形勢を按ずるに、方に大博突を試まるべきの時である。風は順風なり、帆を上げたまへ。しかも貴公の地位を以てすれば、今は平素の二倍を賭すべき時である。かくしてこそ大成功は得らると申すもの。」

侍臣の幽古も亦曰ふ、

「我が君の尊意の如く、今や天下の形勢は、たとふれば櫻花の爛漫たるがごとし、觀櫻はこの時にござります。」

孝高も亦犀利なる舌鋒を揮つて戯れて曰ふ

「我が君には御愁歎さこそに拜察つかまつる。しかも御心中は底の底まで窺ひ申してござります。いよ／＼我が君萬歳の時節が到來いたします。お博突を打ちあそばせ、幽古の申すとほり、吉野の花は今眞ッ盛りにござる。櫻花は寒中には求めても得がたし、今を逸すれば亦來ン春を待たざるべからず。光秀と決戦したまふは、賢慮のほどこれに過ぎたるはあらず。萬歳々々。我が君觀櫻の序幕にござる。」

秀吉は胸底の祕密を看破され、思はずニヤリとした。時に祈禱僧が側にゐて獨り明日の行を止め、「明日の出軍はお見合せあつて然るべく存する、まことに明日は一たび去れば再び歸らぬと申す、最大の悪日にござります。」

といふ。秀吉はそれを聞いて駭し、且つ戯れて曰ふ、

「一たび去つて再び歸らぬとは又この上なき吉日ぢや。予がこの行は忠を亡主に獻げて、戰場一杯の土と化するにある。若しまた光秀の惡運盡きて、予が大捷を博するを得ば、その時は好むところに居城して再びかゝる田舎へは歸らぬ。誠に明日は予に取つて大吉日である。」

さすがの僧も感歎して

「禍を轉じて福となすとは我が君の心機にござる、芽出たしく。」

閑談が終ると秀吉は、席を立つて走るが如く、室に入り、中村の掘立小屋から可愛いく育てあげられたお袋に對面して孝養の言葉を述べ、老いたる慈母を慰めた。大軍を叱咤する英雄の想像だもつかぬやさしき一面が、發露されてゐるではないか。

五七 山崎の決戦 (二)

八日の日は暮れて夜に入つた。方に十時の鐘が鳴ると、第一貝が吹き鳴らされた、人々は食事を調べ始めた。又三時間を過ぎて午前一時に至るや、第二貝が鳴つて、軍兵はみな結束して出發した。數刻にして秀吉は行装を整へて出で、第三貝を城外の欄干橋上に吹かせた。因南野に至つて床几に倚る

と、時は正に二時である。草木も眠る頃なるに、因南野には球燈星の如く、煌々として眼を眩すばかりであつた。秀吉は第三貝を聞いて、第一着に馳せ着けたものを、祐筆に命じて着到帳の筆頭に掲げさせた。祐筆が筆を取ると人々はそれを知友に報じ、知友は又知友に告げて、將士兵卒たちまちに雲集した。祐筆が一名も漏さず記入し終ると、秀吉はそれを一覽して一冊毎に署名捺印して祐筆に返し、「他日必ず點検することあり、よく注意して保管せよ。」

言下に床几をはなれ、兵を五隊に分つて、それを正勝、孝高、高政等五人に附し、正に發足せんとして、留守の將三好武藏守、小出播磨守を召して、密かに後事を兩人に托した。他日兩人の言に依れば秀吉は、決戦利あらずして、戦死の場合は、火を城中に放つて一字一物も残さず、悉く焦土に化せよと命じたのであつた。軍旅は整ひ、遺言も終つて、東を指せば、東天漸く白くして人馬は繪の如く、旗、指物は西風に翻つて東天に靡いた。

九日、早朝に出發して、僅に二晝夜後の十一日朝には早くも尼ヶ崎に着いた。これより先行軍して攝州の境に来るや、中川清秀、高山右近が各々七八歳の質を先だて、一行を歓迎した。秀吉はこれを見て曰く、

「今となつては質子を受くるも何の要かある、予は卿等の逆賊に與せざるを知る。速に幼兒を歸還せしめよ。」

二將は大いに感謝して、鹽川の一黨と共に五千人を出し、盛んに沿道の歓迎に勉めた。

秀吉は尼ヶ崎に入るや、禪房に投じて、信勝及び秀政を召して曰ふ

「予は信長公遭害の報に接するや、爾來精進潔齋を怠らぬ。しかも今將に戰場に出でんとして疲勞を覺ゆ。今は精進を廢すべし。その代りには槍もつけやう。太刀打も覺悟である。兩所にはまた壯年でもあり、依然、精進を續けられよ。」

かくて厨夫に命じて魚鳥を屠らせ、膳部の支度中に入浴して剃髪した。しかも信勝と秀政には、壯年であるからとて、剃髪を見合はさせ、茶筌に結ばせてその端を切らせた。

秀吉は兩人の髪を集め、自己のそれと共に紙片に包んで、寺僧に託し、佛前に安置させ、金子三枚を寄進して曰く

「戦利あらば、末代まで寺領五十石を與ふべし、今は僅に寸志を寄進するのみ。」

かゝる間に膳部は配ばられた。秀吉は先づ信勝に杯を與へて曰ふ、

「惟任はそなたに取つては、實父の讎であり、亡主の敵である。決戦利あらずば潔く戦死せられよ。予はそれを見て死するであらう。」

この時、筒井順慶、山岡美作から使者を以て参加の旨を通じて來た。秀吉は使者を、信孝、右近、清秀及び池田信輝に遣はして、いはゆる尼ヶ崎會議を開いた。右近は高槻の城主、清秀は茨木の城主、信輝は有岡の城主で、いづれも尼ヶ崎の附近に在城する。信孝も亦、丹羽長秀、織田信澄と共に、四國に渡つて長曾我部氏を伐たんとて、既に大阪まで來てゐたのである。そして本能寺の變を聞いて信澄を殺したところであつた。信澄は光秀の女婿である。父を信長に殺されて平生恨を結んでゐた。それ故かゝる非常の際に或は叛かんと恐れて以て、長秀と共に謀つて殺したのであつた。諸將は秀吉の

使を受けて尼ヶ崎に馳せ來つた。軍議に移ると信輝は請うて曰く、

「このたびの先鋒は某に任せられたし。」

右近これを排して曰く

「一番はかく申す右近でござる。二番は清秀、貴様は三番でござらう。」

兩將は互に先鋒を主張して譲らず、秀吉始終を聞いて曰く

「信長公御在世の節には、かゝる時は、大概歸順の順に従ひなされた。このたびそれに従ひたし。」

先鋒は右近主張のとほりとし、第二隊を清秀、第三隊を信輝とした。

五八 山崎の決戦 (三)

十二日、秀吉は本隊を率ゐて、信輝の隊と共に尼ヶ崎を發して山崎に至り、天神馬場から芥川にかけて軍を配した。右近と清秀は既に山崎方面に陣取つてをる。秀吉は明十三日を以て山崎表において決戦せんと、書を光秀に遣はした。そしてその夜は富田に宿營して、翌十三日正午、信孝、長秀の來會を歓迎した。こゝにおいて秀吉方は、自軍二萬五千人に加ふるに、右近の兵二千人、清秀の兵二千五百人、信孝の兵四千人、長秀の兵三千人、頼隆の兵千人、信輝の兵四千人、總計三萬六千餘人となつた。山崎の合戦は、いよゝこれより開かれる。

これより先光秀は二日の午前八時、將士に命じて洛中の戸毎について出奔逃走したものを探り、直ちに瀬田に至つて山岡美作、同對馬の兄弟を招き、兄弟の應ぜずして逃走するを見て瀬田の橋際に壘を

作り、五日、安土に至つて城を奪ひ、金銀財寶を収めて城を光春に守らせ、又佐和山城を取つて荒木山城を置き、筒井順慶に招きの使者を遣はして洞ヶ峠に來たが、待つこと久しきに及ぶも順慶來らず、かへつて秀吉歸東の報に接した。そこで光秀は私かに呟き

「勝家は北陸に在つて景勝に對し、秀吉は山陽に在つて輝元に對してをる。いづれも上洛には相應の時日を要すると思惟せしに、秀吉早くも講和して歸東するとの報があり、唯一の後援者と信じ切つてゐた細川父子も順慶も來らず、かへつて伊賀路において捕へんとした家康も逃してしまつた。何も彼も今は思ひ違ひとなりてけり」。

と長大息して、徹宵眠らず、夜の明くるを待つて淀に至り、城普請の設計などして、將に工を起さんとしてをる時しも、既に秀吉姫路を發して東に向つたとの警報に接したので、工を廢して軍事會議を開催した。その結果として山崎方面には齋藤利三、柴田源左衛門尉を二千を以て先鋒とし、これに阿部淡路守父子、池田伊豫守、後藤喜三郎、多賀新左衛門尉、久徳六左衛門尉、小山土佐守等の三千を附し、天王山方面には松田太郎左衛門尉の鐵砲隊三百人を先鋒とし、これに並河掃部等丹波の士二千を附し、山下の右方には伊勢與三郎、諏訪飛彈守、御牧三左衛門尉の二千を備へ、同じく左方を、津田與三郎の二千を以て備へ、しかして光秀自身は、本隊五千を率ゐて後方に陣を立て、勝龍寺の西方、御坊塚に本營を構ふることにして、進軍を開始した。秀吉より明日決戦すべしとの通告を受けたのはこの時である。光秀はこれに對して快諾の返書を與へたが、秀吉の東上が疾風の如くなりしに喫驚したたのことである、この時に當つて、利三は洞ヶ峠にゐたが、使を光秀に遣はして曰く

「秀吉の軍は意想外の大軍でござる。明日決戦せんよりはむしろ退いて坂本に據るに如かず。」

光秀はこれを聞いて大に怒つたがまた慰撫して曰く

「予は既に大捷を博したものである。たとへ天魔といへどもこの勢の隆々たる予には勝てるものではない。安心して豫定の行動を取れよ。」

かゝる應酬中に日は轉じた、その十三日の午前六時頃には、光秀は陣を布き終つた。光秀は松田を召して曰く

「その方は最も能く山崎の地の利に通じてをる。速に天王山に登つて山崎を伏敵し、矢丸を放つて敵を崩せよ。」

松田は兵一千を率ゐ、意氣揚々として天王山頂を指した。

山崎勝敗の決は天王山に在る。これを占むるものは勝ち、然らざるものは敗す。後世この山を稱して天下分け目の天王山といつたほどである。光秀がこれに着眼せるは當然であらう。けれども秀吉は光秀に後れを取るものではなく、光秀に先つて中村一氏に命じて曰く

「光秀は必ず天王山を取るであらう。彼に先んじて明日早朝天王山を占領せよ。勝敗の決は彼の山に在る。」

一氏答へて曰く

「こは我が明君の仰せとも思はれず。天王山は兩軍爭奪の地でござれば、明日占領せんと欲せば必ず敵に乗ぜらるべし。某既に占領して旗指物を山腹に隠し、射手二三十人を潜伏させてござります。」

さすがの秀吉もこれには感歎して

「さてさて、抜かりのないことである」。

天下分け目の戦は、果して天王山で開始された。松田が光秀の命を受けて山上を指すや、一氏は既に山腹に在つて射手に號令し、彈丸を注ぐこと雨の如し。敵は不意を討たれて周章狼狽せるに、堀尾吉晴が來り、中川清秀が來り、池田の士卒も來り、秀長も來つて、側面からの猛攻撃に、松田の一隊は瞬く間に崩れた。これより先、秀政は松田の山上に進めるを見て、それを阻止することにつとめた。松田の一隊が脆くも崩壊したる所以は、秀政が阻止のために因るといふことである。

天王山の戦が始まるや、我が先鋒の右近は、伊勢、諏訪、御牧等に突撃して奮戦數刻に及び、清秀が左方より、信輝が右方より來ると同時に敵を三面挾撃で潰敗させた。此の時、伊勢、諏訪等は、

「義は屍を清むるものだ。」

と互に叫んで、戦死した。御牧も亦使を光秀に馳せ、

「速に坂本に退かれよ。」

と進言し、自分は秀吉の本營を指して突撃し、惡戦苦闘して士卒と共に全滅した。光秀はその使に先だつて御牧の急なるを見て、本隊五千を率ゐて進んで來たが、從士比田信家、馬を止めて諫めて曰く「敵、優勢なれば、戦は無益でござる。一先づ勝龍寺に入りて籠城したまふか、或は坂本に退かれるか、速に二つに一つを選びたまへ。」

光秀は元來あわてものであるが、この時もうあわてゝをる。曰く

「勝龍寺はどこに在るか。」

五九 山崎の決戦 (四)

秀吉は籠に乗り、朱傘を差させて諸陣を往來し、中川清秀を見るや曰く

「瀬兵衛骨折」

清秀聞いて、

「はや天下取の顔したまふか。」

秀吉はニコリとして過ぎ去つた。

秀吉は光秀が退いて勝龍寺に入らんとするのを見るや、勵聲叱咤、軍を進めて息をもつかず追撃した。敵はその追撃にたへられず壊敗して、光秀が入城した時には集つたものは僅に一千、そして夜に入つて脱するもの相つき、残者僅に百人以内になつた。光秀は二十騎を從へて、夜半窺に勝龍寺を落ち遙に坂本を指して去つた。しかも小八幡よりしる谷越えにかゝつた時、三本松の下において百姓、盜賊等物取りの群にあひ、馬上より突き落されて、首を搔かれた。この時、從ひ來たれる者途中より逃げて残れるもの僅に二三騎に過ぎず、その二三騎はあつばれ主君のために闘つたが、衆寡敵せず、終に主君と共に首を搔かれた。この日、筒井順慶は、表面は秀吉に加擔すると稱して洞ヶ峠に軍し、窺に形勢を觀望してゐたが、光秀の大敗するを見て、漸く僅にその敗兵を追撃した。

秀吉は勝龍寺を圍んで、敵の落去するさまを見、追つて三十三間堂に至つて堂上に休憩してをる

と、將士の馳せて持ち來つた首が六七百に及んだ。時に百姓も亦三箇の首を實檢に供した。秀吉それを一見して曰く

「こは明智の首である。どうして獲たか。」

百姓がその始末を言上すると、

「速に光秀の胴體を拾つてこの首を付け、粟田口に磔にし諸人にさらせよ。」
又曰く

「既に敵の主將を誅した。勝鬨を三唱せよ。」

こゝにおいて全軍は勝鬨を三唱し、その聲天地を震はせた。

光秀の首は既に獲た、残れるは光春ばかりである。秀吉は秀政を招いて曰く

「光春は安土にをるが、必ず坂本に退くであらう。貴殿は速に大津に陣取つて、光春を邀撃したまへ。」

秀政は直ちに大津に急行した。秀吉はその夜淀に下り、そこに宿營して、姫路出發の際、行軍に後れたものを檢べ、來らざりし者七人あるを見て、

「彼等の來らざりしは病のためであつたことは明かであるが、たとひ一行に加はらずとも、駕籠に乗つても伊南野に集合すべきであつたが、歩行の自由にならざるを名として來らざりしは、軍法の許さぬところである。斷じて自裁せしめよ。」

と奉行に命じた。奉行は直に姫路に下つたが、途中、一の谷において七人の東上に遭ひ、命を傳へて

自裁せしめて首を取つて馳せ歸ると、秀吉はそれを一見して曰く

「我が黨の士ではあるが、敵に等しさものである、明智一黨の首級と共に放棄すべし。」

秀政が大津に陣取ると、果して秀吉の言の如く、光春は十四日、安土を出でて坂本に行かんとし、瀬田において山岡兄弟と戈を交へ、辛うじて大津に來つた。秀政及び堀監物は待ちかまへてゐたところとて直に邀撃して大敗せしめた。この時光春は馬を躍らして湖水に入り、遙に唐崎を指して去つたが、その乗馬のさまの見事さに我が兵はそれを見て、思はず快哉を叫ぶ秀政叱呼して曰く

「何をか快哉を叫ぶ、速に街道を廻つて光春を捕へよ。」

騎兵五十、我にかへつて跡を追ふ。時に光春は唐崎に上陸して馬を休め、それより坂本を指して走つた。秀政が追うて坂本を圍むや、光春は飯を喫して悠々樓上に登り、城外を見下して我が圍みの成れるを知り、安土より奪つた名刀墨跡を城外に投下して

「天下の珍寶を兵火にかくるは忍びざるところ、貴軍に與ふべし。」

といひ。それより光秀の妻子と自分の妻とを刺殺し、返す刀で悠々と切腹した。かくして坂本城も終に落ちて、明智榮華の夢はわづかに十四日にして破れてしまつた。全く短い悪運であつた。凡そ事を爲すには、實力を有し、人望を取り、時機を得、而して地位が伴はねばならぬ。光秀は、その實力は大事を爲すに足らず、その人望は天下を服するに足らなかつた。その時機も亦事を擧げるの時機ではなく、その地位とても天下の重任に相當してゐなかつた。にも拘らず彼は非望を敢行したのである。これ山崎で敗亡したる所以であらう。一部の人は光秀が非望を敢行したことを以て人傑かのやうにい

つてをるが、著者から見れば、無智無識にして天下の至愚といふべきものである。且つ臣下の身を以て主君を弑したのは悪逆である。しかも光秀の終始の言行を見ると陰險詭詐の事が多い。信長の叱責などに憤つてかゝる暴舉をしたのではない。たゞ早計に事を断じて非望を敢行したわけである。それにしても、彼の悪運はいかにも短かつた。

附言 俗書に、秀吉が山崎の戦正に酣の時、尼ヶ崎に逃げて、寺院に隠れ、味噌を磨つて危難を免かれたと記してをるが、それは、最初に秀吉が禪房に入ったのを捉へて附會したものである。

六〇 三法師を擁す (上)

光秀の叛報が四方に達するや、群雄の食指は大いに動いた。勝家は兵を驅つて南進の途中にあり、家康も國に歸つて兵を募つて將に出發せんとしてゐたが、山崎の戦報が到達したので、家康は出發を止め、勝家は國に歸つた。かくて秀吉の大博奕は、思ひの外の大捷を博して、彼が悠々、姫路に歸るや、大名小名の來賀、門前市をなし、威望、頓に加はつた。

時に勝家は岐阜に至り、使を秀吉に遣して、信長の繼嗣を議せんと告げた。秀吉が勝家の言に應じて岐阜に至れば、越中の成政を除く外は悉く集つてゐた。成政の來らざりしは、勝家が彼を景勝に備へて置いたからである。秀吉が登城すると勝家は曰く

「主君御父子の横死は已むなきことである。しかも光秀既に敗亡の上は、速に世嗣を定めてそれを奉戴せねばならぬ。各位の腹藏なき所見を承りたし。」

一座はこれ聞いて無言のまゝ互に顔を見合すばかりである。稍々あつて勝家又曰く

「愚存は信孝公を最適任と信す。年格好といひ、才智といひ、世嗣としては一點の申し分なし。」

秀吉はこの時まで一語も發せず黙してゐたが、漸く口を開いて曰く

「勝家殿の仰せ御尤もに存する。されど嫡子を選ぶに越したる事はござるまい。信忠公に三法様の在はすこと故、この君を世嗣に立て、養育仕るが理の當然ではござらぬか。三法様今は幼少におはせども、一家一門はもろんのこと、柴田殿を初めみなく、輔佐し奉れば、幼少の事は憂ふるに足らず、天下の者も亦これを仰ぎ奉るべし、誠にこの君を世嗣とせば、天下のもの皆服すること、某の深く信じて疑はざるところ。」

勝家は聞いて慊らす思はれたがそれは色にも出さずして一座の意嚮を知らんと欲し、ひとへに沈黙をつゞけてゐた。勝家が黙してをれば、誰かまた發言しよう。衆も亦みな黙してしまつた。この時、長秀口を開き、

「勝家も各位も聞き候へよ、筑前の申言こそ理義明白でござる。信忠公に嗣子在らざれば是非もなし、たとひ婦女子といへども在はすれば、養子を迎へてなりとも擁立すべきはすなるに、ましてや二歳の幼君のおはすことなり。この君を立てずして誰れをか立つべき。」

ときつぱり曰つてのけて、大義名分上から秀吉の意見を支持したので、秀吉は大に力を得て、更に曰く

「たとひ信忠公に嗣子が在はさずとも、或は御妾腹にも産めるあらば、その分曉を待つてなりとも

それを立つるが、人倫の大義と申すもの、ましてや三法様のおはす上は、お取立が當然でござる。」勝家は始終を聞いて、その道理には肯いたが、信孝を立てんと欲する一念は翻しがたく依然として自己の提議を撤回せず、たゞ黙然として一座を見廻してゐた。一座は皆秀吉の主張の正當なるを知つてゐたが、勝家を憚つて緘黙してゐた。こゝにおいて秀吉は、自分が主張すれば一座はますます動搖するであらう、むしろ暫く席をさけて衆に熟議せしむるに如かすと、腹痛を伴つて別室に退き、寝たくもないのに横に臥し、飲みたくもなき藥を服して、衆議の決するを待つてゐた。

秀吉が去ると、果して一座の面々は口を開き、勝家に賛成する者はもちろん、秀吉に賛成するものも銘々思ふところを述べて、議場や、騒然の體。

この時長秀又曰く

「勝家殿、某の言に立腹召さるな。筑前の言は理路井然としてをるではござらぬか。」又曰く

「主君京都において切腹のみぎり筑前は中國に在つて毛利と對陣し、しかも當面の大難を切抜けて播州に歸り、三日の休息をなさずして東上して主君のために逆賊を誅戮したことは、或は天の筑前に命するところにあらざるか。勝家殿と筑前との織田家における地位を比較すれば、筑前は勝家殿の半ばにも及ばず。勝家殿にして主君切腹の報に接するや宙を飛んで上りなば、惟任如きもの三人あるとも、踏みつづすことを得たものを。さはせずして筑前に先鞭をつけられしは、貴公の油斷の故ではござらぬか。」

長秀の明快なる所論は、勝家に取つて一大痛棒であつた。諸々と沸き立つてゐた衆論もこゝに至つて止み、勝家も亦

「五郎左の申すとほり。」

と屈服して暫く沈吟してゐたが、又曰く

「筑前のいふところ道理である。三法様を拜戴して將軍となすべし。筑前病癒えなば復席せられよ。評議を決定したし。」

長秀これを聞いて別室に馳せ行き、

「筑前、起きられよ。病は如何に、貴殿の主張に勝家終に承服したり。はや起きられよ。」

秀吉は莞爾として長秀と共に復席した。勝家は曰ふ

「病はよきや。先刻貴殿の言はれしところ、誠に道理あることとござる。貴殿の主張は各位の容るゝ所となつた、我等一同、三法様を拜戴に決した。祝着、祝着。」

秀吉は心中大に喜んだが、表面には色にも出さず、飽くまで謙讓して、

「勝家殿をはじめ、各位においては果して然かく肯定されしや。某はたゞ某の思ふところを述べしのみ、更に熟議を遂げられてはいかに。」

と曰ふ。勝家はそれを制して、

「衆議は既に決してござる。みなく某と共に貴殿の主張に賛成した。この上は最早御懸念あらるゝな。」

秀吉の三法師擁立の企謀は漸くその緒につくことを得た。勝家等は更に拜戴式の吉日を議し、その日よりして四日目がこの上なき吉日なりとてその日に決した。又、信長父子の遺領を處分するに當つて、一部は諸將に増し、一部は預つて、三法師成長の曉返還することゝした。遺領の處分も既に議了したので、直ちに目錄を調製することに決し、先づ織田家一門の目錄を作り、更に大名小名の目錄に移り、勝家を筆頭に、次は一益、次は長秀、その次に秀吉可ならんと衆議一決するや、秀吉は突如として

「某に強つての願あり。かねて各位にも知らるゝが如く、某は信忠公の殊寵を蒙れり、今にして某の願ふところは、たゞ三法様の傳となることとござる。某又すでに老いたり。當世に處するの希望更になし。ねがはくは三法様の傳となつて、信忠公に事ふるが如く事へたし、敢て他意あるにあらず。」

といひ出した。オツチョコチョイの三七信孝を擔がんなどの思慮なき勝家のことゝて秀吉の深慮など看破れるものでない。それは結構とばかり、

「何事かと思ひしに、三法様の傳役とは、それはいと易いことである。某に異議なし。各位も左あらん。」

一座の人々も亦

「誠に筑前が信忠公と親善なりしは世間周知のこととござる。筑前が信忠公のありし日を追懐して三法師の傳たらんとは、これ亦道理にかなひしことにして頼もしき願ひかな、われ等一同一層感じ

入つてござる。」

と一議に及ばず秀吉の冀望を入れ、彼を三法師の輔佐として、遂に目錄にはその名を記さなかつた。けれどこの日の秀吉の赤舌は果して何寸であつたらう。

六一 三法師を擁す (下)

評議決定してそれ〴〵退城し、いづれもみなその宿舎に引揚げたが、秀吉は獨り留つて三法師を拜することを請ひ、三法師が乳母に抱かれて出で來たるを見るや、幼兒は老人を恐れるとて二三間をへだて、對面し、

「僅に二歳に過ぎざるも、まことに怜悧の若君におはします。さらば明日登城仕るべし。」と頗る恐悦して宿舎に退いた。

秀吉は宿舎に歸つて、工匠數十人を召し、人形、鳥獸の玩具數個を作らせ、翌早朝それを持つて登城し、三法師に謁見して玩具を獻じ、その翌日また早朝登城して玩具を獻じ、かくして三法師を懐かせつゝ拜戴式舉行の當日となると、三法師を抱いて一段高き處に座し、大名小名の禮を受けて一々軽く會釋を與へた。

これを見て一同の中には

「あれ見たまへ、筑前守を上様にあがむるは、筑前こそ上様だ。」

「さては筑前にたらされたよ。」

と苦笑するものもあつたが、式終つておの／＼宿舎に歸り、勝家も旅館において

「さて／＼御一門をはじめ、われ等まで筑前に禮したることの口惜しさよ。」

と呟いてゐた。この時一益、長秀等勝家の宿舎を集り、先づ一益が曰く

「勝家殿今日の儀式滞りなく終了して目でたきことである、さりながら御一家衆勝家殿をはじめみな／＼筑前に禮されたとは思はれぬか。」

一同これを聞いて呵々大笑したが、座中の某が

「まことにさやうでござつた。われ／＼は秀吉を大將軍にしてしまつた。」

とこたへたので、一同更に捧腹絶倒した。勝家はひとり苦りきつてゐたが

「今日の事は過ぎ去れることなれば詮術もなし、さりながら筑前の如き機轉のきくものは、他日いかなることをなすべきや知れず、明後日祝宴の當日を以て彼を二の丸において自裁せしむべし。各位の分別如何にや。」

一益曰く

「われ等の思慮も勝家と同様なり、このまゝに放任せば、後日如何の陰謀をたくむやも測られじ、出仕の時を待つて切腹させたとして祝宴の妨害とはならず、かへつて織田家の萬歳といふべし。」

長秀は、これを聞いて秀吉を救はんものとは念じたが、すこしも色に出さずして

「筑前を誅するは、登城の朝に如くはなし。」

といふ。こゝにおいて一同、議を決し、殊更に速く銘々の宿舎に歸り去つた。長秀は宿舎に歸つて夜

の更くるを待ち、窃に秀吉の宿舎を訪ねて密談數刻、匆々にして辭し去つたが、秀吉は合掌して長秀の後姿を拜した。これ實に長秀が勝家等の密謀を秀吉に告げたためである。

秀吉は長秀の去るを待ちて、急遽、正勝、孝高、一氏を召して曰く、

「勝家等祝宴の當日を以て予に自裁を逼らんと陰謀をたくらんでをる。予は今夜中、窃に姫路に歸るべし。後事は一切諸子に託せば、當日は秀吉宿痾再發のため出席しがたしと答へ、萬事臨機の處置を取れ。」

秀吉は三子に後事を託し、その夜急行して姫路に歸つた。

當日となつて祝宴は終り、一同悦んで宿舎に歸つたが、ひとり勝家は、秀吉の來らざるを見て、必ず密告者ありとなし、甚だ不快の面もちであつた。しかも敢て詮議をするときは、秀吉がかへつて用心すべしとて、不問に附することゝして遂に何の爲すところもなく、遙に越前へ歸り去つた。

勝家も一益も一代の雄、一世の智者である。しかも秀吉に比ぶれば、その智勇千里の差あり勝家、一益等は身の程を知らずに秀吉を輕蔑し、敢て拮抗しやうとかつたが、それがそも／＼の誤りである。三法師擁立の如きは、彼がその傳を望んだ時にその魂膽を知るべきであつた。然るに勝家等は秀吉が閑職を請うたといつて感賞し、その請を容れて置きながら、たちまち又秀吉を除かんとする。前日容れたのは慾からであり、今日除かうとするは感情からである。動機いづれも不純を免かれぬ。けだし秀吉は絶代の智雄である、最初より勝家等を馬鹿にしてかゝつてゐた。

〔附言〕甫庵太閤記に信長遺領の處分について記して曰く、

- 一 信雄 卿 尾州 一 信孝 濃州
- 一 秀吉 丹波 一 勝家 江州長濱六萬石
- 一 池田父子 大阪、尼ヶ崎、兵庫十二萬石
- 一 長秀 若州並江州内高島志賀二郡
- 一 瀧川 五萬石加増此外北伊勢を領す
- 一 蜂屋 三萬石加増

これによれば、大阪を信輝に預けたとあれど、大阪は天下を御するの地である、かねて信長がこゝに築城して大に成すあらんとしたものである。かゝる要地を信輝に預けるなど、秀吉が軽々しく同意する筈がない。甫庵が大阪と記したのは大崎の誤であらう。秀吉が大阪に着眼したのは既に山崎の決戦の當時である。秀吉が山崎で大捷して大阪城を處分せんとしたことについて、川角太閤記は左の如く記してゐる。

一 筑前守(秀吉)殿所より大阪の御番衆へ被仰聞御内證は其御城何方へも被相渡まじく候其仔細は上様の御跡御次可被成天下人へ目出度可被相渡候其内は御番御油斷不可有候事御尤に候と被仰渡候故御留守衆御門ノを相かため中々聊示に可相渡見えざりければ、三七殿も丹羽五郎左衛門殿も國々へ一先御入候事丹羽五郎左衛門殿へ卒度御内證と聞え申候事

以て甫庵の誤を正すに足るではないか。

又川角太閤記は三法師を吉法師としてゐるが、これは川角が誤つたか、後世の寫誤か、いづれにしても誤である。信忠の嫡嗣が三法師であることは辨するまでもない。

又秀吉が信孝を立つることに反對したのは、嘗て信忠が小谷の方を秀吉に配することを請うた時に、信孝が反對して勝家に配せとちよつかいを入れ、遂に小谷の方が勝家のものとなつたので、秀吉がこれを深く恨み、

それで今勝家の提議を却けて信忠の子の三法師を立てたのだとか、秀吉は信忠と男色關係があつた、秀吉が三法師を立てたのはこれにも由ると川角太閤記が記してをるが、これ等は大なる誤である。秀吉の配には既に淺野の養女杉原氏がある。それにどうして信忠が自分の叔母を秀吉に與へることを願はうぞ、男色は當時流行だつたが、信忠幼少の頃には秀吉は信忠と密接するほどの地位にをらず、且つ秀吉は伶俐な男である、たとひさうした地位に在つたところで、下様の身を以て上に戯むれるやうな危険を犯すはずがない。要するに川角がかく記したのは、彼れも亦凡庸、英雄が剛子擁立の、古今同一軌に出づるものなることを知らなかつたのである。

六二 亡主の法會

秀吉は岐阜を脱れて姫路に歸つたが、勝家が必ずまた自分を誘殺せんとするだらうと思つてゐたところ、果して間もなくその使者が來た。

「亡主の葬儀を未だ行つてゐない、この際三法師の上洛を請ひ、紫野において法會を營まうと存じ、連署を以て發表したし、貴殿も連印然るべし。」

といふのであつた。秀吉はこれを聞いて何と感じたらう。必ず膝を打つてきてこそ來たぞといひたかつたことであらうが、使者の前は何食はぬ顔して

「葬儀執行の思召し、結構至極に存する。しかし、大將軍の法會を營むに古刹では天下の笑ひを買ふべし、さゝやかなりとも一寺を建立し、且つ木像を彫刻してこれを堂上に安置して營みたく存する。」

と返詞をした。勝家はその返詞を見て、寺の建立だの、木像の彫刻だの、必ずしも法會に要はないと

思つたが、そこは秀吉を誘き寄せるが目的ゆゑ、一も二もなく秀吉の言に任せ寺院を建立し、木像を調製した。秀吉はその間の日子を利用して、窃に人を募り、兵器を作つて戦闘準備を調へた。勝家は知らぬが佛で、寺院が落成し、木像が出来ると、再び使者を派して秀吉の上京を促した。これより先細心なる秀吉は間者を諸方に放つて諸將の動靜偵察に怠らなかつたが、果して勝家は五千人を従へ、一益、長秀等も各々數千人を従へて上洛したので、靜寂たるべき法會に不穩な色が現れて、形勢頗る險惡となつた。

秀吉は間者のもたらせる報告に由り、勝家等の軍兵の案外少數なるを知つたが、數次の使者を待つた上でゆる／＼上洛しやうと決意し、急使を再三受けてから漸く上京の日時を確答し、同時に洛中洛外において戸毎についてその部室を借り受け、部下の將士の宿舍とした。そしてわざと將士の名を戸外に大書して人數の夥多を伴示した。且ついよく／＼姫路を出發せんとして勝家の密偵の動靜探知を推察し、ことさらに二萬の大軍を率ゐて出發した。

勝家の密偵は秀吉の推察通り姫路に來てゐたが、大軍の進發を見て大に驚き、宙を飛んで京都へ知らせた。勝家はこの報を手にして、秀吉が洛中洛外に亘り夥しき宿舍を借り受けたを大に怪しと睨んでゐたが、今密偵の報に接して始めて謎が解けた。さては秀吉め、事を起さんとしてゐるなと周章狼狽して、先づ三法師を岐阜に避けさせ、自分はその夜信孝等と共に同じく岐阜に退いた。

秀吉は常に事を爲すに當つて、戦はずして勝つことを主とした。宿舍を借り、大軍を率ゐたのは、眞に、戦はうとしたのではなく、コケ威して敵の謀計を破り、敵をして成すなからしめんためであつ

た。秀吉は無人の境を行く如く、悠々として京都に入り、使を勝家等に遣して、

「貴殿等には遙に岐阜より上洛されてゐながら、一夜遁走して岐阜に歸られしは、某の合點の行かぬところである。貴殿等が參られねば、某一人にて法要を行はふか、如何でござる。御返答に接したい。」

といつた。勝家等はこの書を受けても、何の面目があつて返答ができよう。たう／＼返事を書かすに使者を歸した。そこで秀吉は養子の信勝と一緒に大徳寺において一七日の大法會を執行した。これ實に天正十年十月のことである。この月秀吉は從五位上に敘せられ、右近衛少將に任じ、山崎の北方なる寶寺に假城を營んで、京都と安土間の往來に便した。

〔附言〕 俗書の多くは大徳寺の法會に、秀吉は三法師を抱いて、焼香の順序を信雄等と争ひ、清正等の猛將を招いて勝家等を避易せしめたと記し、演劇でもこれを脚色してゐるが、それは好事家の小説的結構に過ぎず、史實にはないことである。

六三 柳瀬の大捷 (一)

大鯨は魚網に入らず、大象は鳥銃に墮れない。勝家は秀吉に對するに、毎に一益の智を借りて、見苦しき敗北を重ねた。一益は智者ではあるが、その智は秀吉に用ふれば、大鯨に對する魚網となり、大象に對する鳥銃となる。それは一益の智が小なるためではなく、秀吉の智が大なるためであつた。勝家は秀吉を嫌つて、一度は岐阜で自裁させやうとして逃げられ、二度目は京都で誘殺しやうとし

て却つて自分の身を危くしたが、それでもまだ懲りないと見え、三たび秀吉を噓さうとして、又亦一益の智謀を借りた。北陸は古來降雪の季節があつて、春冬は兵を出すに不便であるから、明年を待つて兵を擧げて秀吉を噓すが好い。その間、和を結んでおいて、不意に乗するといふが一益の計略である。その計畫が成つて彼等は前田利家を講和使に選んだ。けれど利家が一女を秀吉の養女に與へ、秀吉と親戚となり、あたかも秀吉と兄弟の如くであつたから、一益はそれを知つてゐて利家を使つたのである。

十一月二十一日、利家が寶寺に行つて秀吉に會ふと、秀吉は大に歡迎し、平和は望むところであるといつて直ちに快諾を與へ、その條件として、明春三法師を上洛させ、その斡旋を秀吉に任せるやうにといひ、又その上洛に際して、岐阜から大津までの沿道の宿舎や休憩場の新築を秀吉に任せ、その材木を江州賤ヶ嶽近邊の山中から伐採することを許されたしと請うた。その月十日に利家が歸つて、これを勝家に報ずると、どこまでもお目出たい彼は、秀吉の深謀遠慮を知らず、我が事成れりと驚喜して秀吉の要求を快諾した。

これより先、秀吉は利家が辭去するや、正勝を召して、

「勝家が講和を要請したのは誠意からではない。惟ふに降雪の季に入つたので、今は講和をしておいて明年雪の消ゆるを待ち、我の不意を襲はん計略である。子房、正成ならばいざ知らず、柴田輩に欺れるやうな予ではない。雪中彼の出づるを得ざる時に當つて、先づ江濃を徇へてくれやう。」といひ、やがて勝家から材木伐採承諾の使者が來たのを幸に、その返禮として秀長を遣し、雪降らば

歸り報ぜよとひそかに命じた。

そして秀長の歸り報ずるを待つて、十一月中旬、五萬の大軍を帥ゐてさきの居城の長濱を襲ひ、勝家の義子の勝豊を圍み、一兵に血塗らすしてこれを招降し、直ちに岐阜に迫つて信孝を攻めた。秀吉が勝豊を招降したのは、勝豊は勝家の義子ではあるが勝家との間に隙があり、且つ佐久間玄蕃と相善からぬを知つてをるからである。信孝は戦はんと欲したるも、孤立無援のため戦ふ能はず、遂に長秀に頼つて和を請うた。この時秀吉はさきに勝家を欺いて伐り出した材木を以て賤ヶ嶽に三砦を築き、勝家が南進の要路を塞いだ。

秀吉は敵の不意に乗じて江濃を徇へ、十二月二十三日、兵を收めて歸途につき、安土に寄つて三法師に謁して歳暮を賀し、且つ夥しき獻品をして、二十六日寶寺に歸つた。かくて天正十一年の正月を迎へ、元旦の賀禮を終るや否や、その日出發して姫路に下り、夜半城に着いて祐筆を召し、將士の恩祿から太刀、小袖、馬匹の飼養料に至るまでを計上せしめ、それを十人の奉行に命じて五日間に配與せしめた。しかもこれは夜を徹して取調べ、全く命じ終つたのは翌二日の正午であつた。秀吉はそこで食をとつて寢に就き、三日の午後に至るまで熟睡して數日の疲勞を一時に恢復し、午後には將士の臨賀に對へた。そして七日には早や姫路を立てて京都に上つて參内し、九日には安土に行いて三法師に謁見し、それより、竊に柳瀬方面を視察して、寶寺に歸つた。これがその月の中旬である。

六四 柳瀬の大捷 (二)

秀吉は寶寺に歸城するに先つて、十一日、書を四方に飛ばし、二十三日を期して江南の草津附近に出軍せよと命じた。命に應じて馳せ集るもの數萬人に及び、秀吉が行いて自軍を合するや、その數七萬五千餘人によつた。

秀吉は軍を三團に分ち、第一軍に秀長、順慶、直重、一鐵等を配して二萬五千を率ゐさせ、第二軍に秀次、一氏、吉晴等を配して二萬を率ゐさせ、第三軍は秀吉自ら三萬を率ゐ、第一軍は土岐多羅口より、第二軍は君島越より、第三軍は安樂越より、いづれも競うて伊勢に入り、龜山、城山を攻陥し、更に桑名を攻めて一益を窘窮した。この時江北から警報があつたので、秀吉は宇喜多秀家に桑名を監視させ、自分は急遽長濱に向つた。これ二月八日である。

これより先、勝家は秀吉が江濃北勢を徇へて一益等を窘窮せしめたと聞き、雪を眺めて切齒扼腕してゐたが、遂に耐へられずして佐久間玄蕃を遣した。これ二月七日のことである。秀吉が江北からの警報を受け取つたのは、玄蕃出張のことであつた。玄蕃は一萬五千を率ゐて江州に入り、木本に軍して火を四方に縦つた。前田利長利長の長子也は年少氣鋭、當日は先鋒を争つて、火を遠く關ヶ原にまで縦つた。秀吉は十日の夕方に長濱に着し、敵が井口川附近に放火したるを聞き、地團駄踏んで曰く「惜しいことをした。半日速ければ悉く討ち取つたものを。」

と。彼は直ちに總軍を十三隊に分けて賤ヶ嶽に進み、敵と數丁を距て、對陣した。これより先、勝家は柳瀬に來つて軍し、信孝も亦兵を擧げた。秀吉はかねて期せることであれば少しも驚かず、四月十七日に大垣に至り、翌日直重、一鐵をして信孝の領地に放火せしめ、十九日に自ら岐阜を圍んで攻め滅さうとした。玄蕃が賤ヶ嶽に來つて清秀の砦を圍んだとの報を得たのはこの時である。時に秀吉は案を打つて曰く、

「大捷を博するは、案外速かであらう。」

秀吉は賤ヶ嶽に至ると直ちに附近の農夫を召して敵の陣形を問ひ、使者を農夫に混せて利家の陣に遣し、

「明日戦を開かば、貴殿の裏切を希望するが、しかし、それは貴殿の好まざるところであらうから、當日は局外中立の態度を取られたし、裏切と同様の感謝を以て報ゆるところあるであらう。」

と云ひ遣つた。利家はこの時、

「裏切を爲すは某の忍びざるところなれば、明日は中立致すでござらう。」と答へた。秀吉は聞いて大いに喜んだ。

これより先、玄蕃は一萬五千を率ゐて清秀の砦を襲うた。この日、清秀は曉天かき黄昏に至るまで力闘し、遂に首級を敵に授けた。玄蕃が清秀の首を勝家に送るや、勝家は見て大に悦び、玄蕃に速に兵を收めて歸れと命じた。然るに玄蕃は勝に乗じて心驕り、命に服せず、勝家の傳令が六回に及ぶや、

「さて、我が君も年を取られたり。思慮分別が違ひ申す。」

と罵つて、そのまゝ賤ヶ嶽に宿營した。秀吉が來つたのはこの夜のことであつた。

秀吉が賤ヶ嶽に來て見ると、敵は朝からの疲勞に耐へず熟睡してゐて何事も知らず、襲はれて始めて周章狼狽し、玄蕃等は能く防ぎ戦つたが、既に總崩れして支へ難く、加ふるに強敵長秀が來り攻めたので、遂に一兵も止めず壊散した。所謂七本槍なるものはこの時に出たのである。市松、虎之介、孫六、權平、甚内、助右衛門、助作の七人がそれであつた。

六五 柳瀬の大捷 (三)

勝家は柳瀬に居て、玄蕃に收兵を命じたが、玄蕃が聽かずして歸らざるを以て、且つ憤り、且つ懸念し大に不安にかられてゐるたが、案の定、夜半から山を距て、騒ぎが聞えた。陣中これを耳にして色を失ふもの多く、一人去り、二人去りして、窃に陣中を脱出するもの數を知らず、早天、賤ヶ嶽の敗報が到着した時は、既に殘兵二三千に過ぎなかつた。勝家は急報に接して、

「必ずかやうのことにならうと思つた。是非もなし、こゝに在つて秀吉と一戦しやう。」
といつた。左右のものはみな曰く

「寡を以て衆に當るは無謀の擧にてござらぬか。」

勝家は曰ふ

「戦場の習ひは必ずしもさにあらず、たとひ一千に過ぎぬとも、心を一にして十死に一生を期して奮戦すれば必ず勝つものである。作戦は予に一任せよ。」

かくして大に士氣を鼓舞したが、それでも左右のものは甚だ不安に思つてをる。この時毛受勝介進み出て曰く

「我が君の仰せはいかにも御尤に存じ奉る。さりながらそれは昔日の尾陽の兵にして初めて爲し得ることにして、今日の如き風を聞いて脱れ、色を見て走る臆病兵は、言ひ甲斐もなきものにござります。既に夜來殆ど全部脱走してしまつたではござりませぬか。けだし玄蕃が君の命を用ひざるも、士卒の脱走するも、要するに我が君の命數の盡きたればこそ。こゝにて一戦して名もなき雜兵に首を授けんよりは、北庄に歸りて心靜かに自裁したまへ。某、馬章を捧げて君のために代り、こゝにおいて防戦し、君が退路を安らかならしめん。こゝは直ちに決せらるべし。時移れば、この計も亦水泡に歸するでござらう。」

勝家は聞いて、

「汝のいふところ尤もである。さらばその言に従ふであらう。」
と、馬章を勝介に與へて、遂に北庄に逃げ去つた。

勝介が三百餘人を率ゐて砦に籠ると、間もなく秀吉の大軍が進んで來た。勝介は自ら勝家と名乗つて奮闘し、その兄と共に死んだ。秀吉は勝介の首を見て、勝家ならざるを知り、

「これは勝介の計略である。勝家は歸り去つた。直ちに追討せよ。」
と、兵を驅つて北陸に突進した。勝家は僅に八騎にして北庄に歸り、途中府中を過ぎるや、既に城に在つた利家が出迎へたので

「又左、予は恥ぢ入る。」
といふと、利家は曰ふ

「古來例ある事なれば已むを得ませぬ。某府中を固むれば、貴殿は北庄に據りたまへ。」

勝家聞いて唯々として去つたが、勝家の去ると間もなく、秀吉の軍は早くも府中に追ひ至つた。城兵が砲を放つて拒ぎ戦はうとすると、秀吉はこれを見て軍を退け、單獨で城門の下まで行つて砲手を止め、直ちに城に入つて利家に會つた。利家が書院に招かうとすると、秀吉は臺所から入り、

「奥方は何れにござる。養女のお聞かせ申さう。」

と叫び、利家の居室に至つてその椽に倚り、靴穿きのまゝで利家と快談した。そして利家の奥方が出で來たると秀吉は

「秀吉今日の戦捷は、一に御主人利家殿のお蔭でござる。」

と合掌して禮を述べ、更に、

「養女のお消息もついでこの程播州より參つてござる。日ましに成長して殊の外健康の由なれば御安心あられよ。」

奥方が

「久しく尊顔を拜せざりしに、今日計らすもお目通りいたし、殊に戦は思ひのまゝの御大捷と承り、婦女子の身ながら今日の御入來、光榮至極に存じまする。」

といふと秀吉は

「それも既に申せる如く利家殿のお蔭でござる。これより北庄へ行かうと存するが、ねがはくば一酌を賜うて我行を祝されたし、且つ明日は利家殿を借り申すべし。」

といふ。奥方は唯々として酒肴を調べて秀吉の行を祝した。秀吉は更に、

「冷飯の馳走にあづかりたし。」

といふ。奥方が亦唯々として冷飯を獻すると、秀吉は食し終つて立ち上り、

「利長殿は在城して母上を慰さめられよ。利家殿は老功のものゆる同道する。幸にして凱旋せば、歸途又立寄り、ゆるく滞留致すであらう。」

といつて退出したが、利長も亦慈母のすゝめによつて従軍するに決し、父子揃つて秀吉に従つて北庄に進撃した。

勝家は城には入つたが、兵少くして到底支へがたく、二十三日は徹宵酒宴を催して、翌二十四日午後四時、天守に火を放つて後妻小谷の方と共に樓上で自裁して一片の煙となつてしまつた。これより先、秀吉は秀政を先鋒として城を圍み、自分は利家と共に愛宕山に陣を立てたが、間もなく勝家から使があつて、三人の遺子を託する故、養育をたのむとのことであつた。秀吉は快諾してその遺子を受け取つた。勝家が悠々、自裁したのはこの遺託を終つた後であつた。三人の遺子とは、小谷の方の生んだ淺井長政の子である、小谷の方は信長の妹であり、長政が敗亡して後、その三女を抱へて勝家に嫁いたのであつた。故に勝家は死に臨んで、

「その方は信長の妹なれば、出城するとも秀吉は危害を加ふることなし。出で、遺子を養育する意

はないか。」

といったが、小谷の方は従はず、勝家と共に枕を並べて死んだのである。然もその遺子は秀吉に養はれて、後年長女は秀吉の第二夫人となり、次女は京極高次に嫁し、三女は徳川秀忠の簾中となつた。秀吉の第二夫人は阿茶々といつて淀にゐた。淀君といふのがそれである。

六六 柳瀬の大捷 (四)

秀吉は、北庄を落すや、長驅して加賀に入り、能登に進んで二ヶ國を併せ、一兵も害はずして諸城を収めた。時に利家が、北進して越中に行き、佐々成政を伐つことをすゝめたが、秀吉は頭を振つて曰ふ

「勝に乗すれば必ず過あり、信長公が勝頼を長篠より追はざりしは、その故である。予は既に勝家を燈した。先づ心を安んじて可なり。成政は剛勇にして戦術に長じてをる。それを輕視して戦ふよりは、むしろ他日を待たん、予にして成功して天下を統裁せば、屈するであらう。又、その時はたとひ屈せずとも、その部下に叛を謀るものが出づるであらう。いづれにしても今は乗する時でない。速に兵を收むるに如かず。」

名将細心の用意といふべきものであらうか。直に收兵して退き、加賀半國と能登一國を利家に與へ、越前半國を秀政に與へた。これ五月朔日である。

この時、數人の農夫が玄蕃を捕へて秀吉の陣營に送つて來た。秀吉は玄蕃の繩にかゝれるを見て無情なことをしたものと涙を流し、直に繩を解かせ、檻車に乗せて榎島に送つた。同時に賞を賜ふと詐つて農夫を召し、集り來たれる十二人を捕へて、

「勝敗は兵家の常である。今日人の上にあることは明日我が身の上にあることである。農夫に似氣なきことをするものかな。賞賜の代りに磔にかけよ。」

と命じ、遂に十二人を磔刑に處した。これがために百姓は大に震愕した。玄蕃は賤ヶ嶽に敗れてより越前敦賀の郷に逃れたが足痛を覺ゆるまゝ農家に入つて艾草を請ひ、灸療をなさんとして發見され、かくは農夫に捕縛されたのである。

玄蕃は當時有名なる猛勇であつた。秀吉は窃にその勇を愛してゐた。榎島に幽閉してより、正勝を以て切りに自己に事ふべきを諭したが、玄蕃は曰ふ

「御好意は忝けなく存する。されど勝敗は兵家の常である。勝家にして利ありしならば、秀吉をわれ等が今日の成れにすべし、勝家不幸にして自裁したる上は某現世に留まるも用なし、疾く自裁を思はぬにはあらざるも、玄蕃は紉明を恐れて自裁したりと評さるゝが心外ゆゑ、今日まで思ひとゞまれるなり速に處刑を待つ。」

と正勝はその由を秀吉に報ずると、秀吉感歎して

「さりとは玄蕃に似合の返事である。重ねて諭すの用もなかるべし、意にまかせて切腹させよ。」と森高政を遣して自裁させた。先づ高政が行つて秀吉の言葉を傳へると、玄蕃は

「翼くば某を縛めて洛中を引き廻し、その上で首を刎ねられよ。」

と請うた。高政が歸つて秀吉にその旨を陳べると、秀吉はそれも彼の心に任せるやうにといひ、紅白の小袖を新調して與へた。高政が玄蕃にそれを與へると、玄蕃は喜んで着て、檻車に乗つて洛中を一週し、遂にその夜槇島で斬られた。

これより先、秀吉は越前から長秀の居城の坂本に至つて休息し、それから岐阜へ行つて信孝に逼り、遂に信孝を野間に退かせ、次いで自裁させた。又、一益がかねて長島に遁入してゐたので、信勝と秀家を遣して攻圍させたところ、一益は又出で、尾州蟹江の城に投じ、遂に降参した。かくして魚網は大鯨に破られ、鳥銃は大象に折られて、柳瀬の決戦は全く終局を告げた。この時、秀吉は又も從四位下に敘せられ、參議に任じた。

全く總ては時機の問題である。時たらざれば事成し難く、光秀の叛は、秀吉に取つては時運の到來であつたのだ。三法師擁護後のことも、勝家や一益などの謀計が無かつたならば、秀吉は諸將實視の中に徒に遺孤を擁して苦楚を飽くまで嘗めねばならなかつたのである。然るに苦楚を嘗めずして天下がその掌中に落下したのは、勝家等に謀計があつたからである。これも亦時の運である。けだし長秀の應援、利家の内應は、柳瀬賤ヶ嶽の大捷の近因である。

六七 大阪城と聚樂第

著者は嘗て大阪城址に登り、天守臺の一角に立つて四方を顧望し、誠に英雄がこゝに垂涎して占據したこと尤もであることを考へさせられた。面を西に廻らせば、六甲の嶺は雲表に聳へ、内海の水は

天際を洗ひ、神の生みませる淡路島山は影淡く、戰艦浪を蹴れば、兵船水を縫ひ、眞帆片帆は指呼の間を往來してゐる。北に向へば、丹波、山城、山を疊み、東を見れば生駒山、南を眺むれば金剛山、いづれもみな屹然として天を衝き、相雄して相逼らす。淀や宇治川、神崎川、大和川に至るまで、城の遠近を周流し、或は滾々、或は滔々として、千年不斷、内海に朝宗してをる。而して貿易の中心は昔も今に異ならず、この地方に確在してゐて、昔は堺であり、今は大阪であるとの別はあるが、相距ること僅に一二里程に過ぎない。故に内外の商船はこの地點に來泊し、一國の經濟消長の鍵は自らこゝに握られてゐた。九州を制し、朝鮮明國に威を振はんと欲すればこの形勝の地を措いては他には求められなかつた。英雄がこの地を卜したことは亦宜なる哉である。

大阪は元、大江の阪ともいつた。秀吉がこゝに築城してからは、大阪といふ名だけが行はれた。城の在るところを石山といひ、光佐が信長に對抗して十有一年を支持してゐたところである。初、光佐が信長と和して他の地に退くや、信長はその城を收めて修築を計畫し、その設計を光秀に命じ、光秀が既に繩張をしたこともあつた。かゝる形勝の地が秀吉の手に入つたのは、信長が本能寺で横死し、光秀が山崎で敗亡したからである。秀吉は天正十一年十一月、諸侯に役を課して大規模の工事を急ぎ、同十六年に完成した。築城工事の年月は僅に五ヶ年に過ぎない。大事を成す者の敏捷なることは、實に後人の想像外である。

この城が成ると、人は呼んで金城といつた。全く後年家康は諸侯の大軍を驅つて圍んだが抜くことできず、欺いて一旦講和して壕を填めて漸く落したほどであつた。秀吉はその工事が緒に着いた頃か

らこゝに移住して、こゝから四方に號令した。現在はその壯麗偉大な建築も、わづかに址石と數樓を
残すばかりであるが、その偉觀、壯觀は、西教史やその他後人の書を見れば、幾分かは眼前に彷彿し
來る。又傳ふるところの當時の繪畫などを見れば、規模の大概がうかゞはれる。

聚樂の名は、遺憾なくその第の如何なるものかを語つてをる。秀吉は大阪に在つて天下に號令して
ゐるが、京都は天皇の在す所であるからそこに一城を構へて天闕に親接し、以て霸業に便ならしめや
うとした。それが聚樂第となつてあらはれたわけである。秀吉がこの地をトして大に經營するや、
天正十二年に工を越して、同十五年、大阪城に先つて落成した。その規模は因より大阪城に比較すべ
くもないが、優雅と典麗とは大阪城に超え、且つ渠を繞らし、塀を築いたなどは、さながら城廓のや
うであつた。十五年九月に秀吉は大阪から徙つて、十六年四月には天皇の行幸を仰ぎ、天皇の駐輦し
たまふこと五日に及んだといふことである。その後秀吉は、關白職を秀次に譲つて太閤と稱するに至
つて、居城を伏見に築いてそれに移り、大阪城も聚樂第もみな秀次に與へた。そして後年秀次を廢し
たとき、聚樂第は毀られたが、その一部は伏見城に移されたといふことである。

六八 小牧の對陣 (一)

信長が一朝弒さるゝや織田氏の一門は頓に衰へた。すなはち勝家は亡び、信孝は自裁した。但し信
雄は他家を繼いでゐるといつても、なほ織田氏の一門として尾勢に蟠居してゐる。秀吉が三法師を擁
して、威望日々に加はり、月々に膨れて天下を統裁してゐながらも、なほ窃に信雄に憂を抱いてゐた。

のはこゝである。實は信雄を憂へたのではなく、信雄を挾んで事を擧げやうとするものゝ在るのを恐
れたのである。そこで秀吉は、信雄を挫かうと決意した。これが小牧の對陣の秘因である。

初、秀吉は、人をして、秀吉が信雄を京都に誘殺したとの蜚語を放たせた。信雄はこれを聞いて、
人がさういふのは秀吉が自分を除かうとしてゐるからであると思ひ、秀吉と絶交した。蒲生氏郷、池
田勝入勝入等は織田羽柴の絶交を聞いて大に憂へ、織田氏の爲によくないとて、奮つて調停の勞を執つ
た。その結果、天正十二年正月、江州の園城寺において、秀吉と信雄は會見することを約した。然る
に秀吉はその會期に先つて、信雄からよこした使者である北畠の老臣の岡田重孝、津川義冬、淺井長
時、瀧川勝雄の四人を手厚くもてなし、窃に三法師の保護は爾後信雄を頼まず、我が黨においてなさ
うではないかと諮つた。秀吉としてはかく言つてこれ等の老臣を信雄に除かさうとの離間策に出たの
である。果して勝雄が獨りにわかにな土に歸つて信雄に密告するや、信雄は安土を去つて長島に入
り、三月六日、宴に託して重孝等を召し寄せ、兵を伏せておいて殺してしまつた。これより先、信雄
は使を家康に遣して、秀吉討伐の意中を告げた。家康は承知して使者として酒井重忠を遣し、信雄と
密議した。この密議は、土佐の長曾我部元親、香曾我部親泰、紀州雜賀の鈴木孫市等を誘つて大阪を
牽制せんとするに在つた。この時信雄はなほ佐々成政、池田勝入、森長可、堀秀政を誘つて清洲に移
つた。

秀吉はこれ聞いて使を家康に遣し、

「それがしは亡君の厚恩に浴せしものなれば、信雄殿に對して常に他意なし。然るに信雄殿は暗愚

にして佞奸の言を用ひ、現にそれがしを疎外しやうとしてをる。おもふに信雄殿は社稷の重任に堪へ得るものでない。貴殿幸にしてそれがしに協力されなば、それがしは貴殿に尾・濃の二ヶ國を與へるであらう。」

と申入れ、同時に勝入、一益にも使者を放つたが、勝入は初め躊躇して後承諾し、一益は驚喜して起つた。一益はさきに柳瀬で秀吉に敗けて降服し、秀吉から長秀に預けられ、當時は一介の浪士となつて長秀に寄食してゐたのであつた。

戦の端は、さきに誅された信雄の重臣の遺族、遺臣が秀吉に屬して、尾勢の二州における星崎、松島、刈安賀の諸城に據守し、信雄、家康の兩軍がそれを攻陥したのに發した。秀吉はその報に接し、蒲生氏郷、長谷川秀一、堀秀政、日根野兄弟、多賀秀家、池田景雄、山崎片家、淺野長政、一柳直末、加藤光泰を北勢に派し、關の城主盛信父子と一益を援けて峰の城を攻め、又、秀長及び筒井順慶、織田信包等を南勢に遣して松島城を圍み、二十日間で抜いてしまつた。のみならず、思ひがけない快報を尾陽の一角から受け取つた。この月の十三日、勝入が犬山城を襲つて奪ひ取つたことである。

勝入が犬山城を奪ふと、森長可は尾藤知定と共に小牧山を取らうと十六日、羽黒に至つて勝入を待ち、そして勝入が來なかつたので、八幡林に陣したが、この時家康は既に軍を率ゐて清洲に在つて、酒井忠次の獻言を容れ十七日、松平家忠等に命じて長可の不意を襲はせた。長可は俄のことゝて部伍整はず、そのまゝ戦つて敗走した。そこで家康は陣を小牧山に定め、壘を築いて秀吉の來るのを待たつた。

秀吉は伏見に在つて宗易の茶會に臨み、茗に酔うて忙中の閑を樂んでゐたが、突如として羽黒の敗を聞くや、庭に飛び降りて尻をまくり、えいや、えいやと懸聲しながらそのまゝ犬山の空を指した。時に率ゐた軍は、三萬人で、それが三月二十七日のことであつた。秀吉は犬山に到着すると數騎を從へて犬山を出て二宮山に登り、そこから小牧山を眺めた。戦眼一撃を與へたわけである。そして降つて敵の陣前を過ぎり、築壘を命じてさながら敵前にあることを知らないやうな態度であつた。家康はこれを見て秀吉の倨傲を惡み、榊原康政も亦大に憤つて檄を我が諸將に飛ばし、秀吉の罪を數へ立て、遂には逆賊と呼んだが、秀吉はそれを見て大に怒り、康政の首に重賞を懸けた。

六九 小牧の對陣 (二)

秀吉は壘ができて兵を配備するにあたり、二重堀に日根野兄弟、田中に秀政、氏郷等を、小松寺山に秀次、内久保山に頼隆、岩崎山に稻葉父子、青塚に長可、小口には定次（彌平）を配して、その兵の多きは一萬〇三百に上り、少きも一千五百を下らず、合せて四萬餘、これ以外の戦闘部隊を加ふれば、この役の秀吉の軍は實に八萬餘人と注された。

兩軍が相對して睥睨し合ふや、秀吉は或日二重堀に行つて

「家康に果し狀を送つてから戦争をしようと思ふが、どうぢや。」

といふ。高山右近が傍にゐて

「それはなされぬがよろしうござる。家康の返詞はきつと君のお怒をおこさせるばかりでござる。」

と諫めたがそれでも聽かず、長岡忠興の義孝に果し状をもたせて敵の陣前に放置させた。家康はこれを見て傲語を連ねた返書を認め、前に放置した場所へ放置した。忠興が再び行つて取つて歸つて秀吉に獻すると、秀吉は半分も讀まぬうちに赫となつた。右近が、

「それ御覽なさい。それがしの申し上げた通りではござらぬか。」

といふと秀吉は冷笑して馬に乗り、四五人の従者を引き連れて敵前に至り、くろりと回つて後を見せ、
聲を敲いて聲高、

「家康、これを食へ。」

敵の方ではそれを見て、

「彼こそ正しく秀吉である。射て墜せ。」

と雨霰の如く矢丸をあびせた。秀吉は矢丸の間に平然、立つて豪語して曰く

「予は勢威赫々の大將軍である。矢丸の方が恐れて寄りつけまい。」

小衝突は、時々あつたが、まだ大部隊の戦闘は一度もなく、空しく月日が経つて四月四日を迎へたが、その夜勝入は秀吉に謁して曰ふ

「今日の形勢からすれば長驅して岡崎を衝くにしかない。それがしその任に當りたし。」

この計畫は既に人が立てゐたが、秀吉はまだ斷行しなかつたのである。その夜も秀吉は背かなかつた、そして翌朝、勝入が再び促したので漸く承知した。勝入は雀躍して三河を指して進軍したが、その進發に際して秀吉は十分注意して妄に進まぬやうにと勝入を戒め、なほも敵に覺らせまいと、こと

さらに小牧を攻めた。

勝入等が行進して九日の早朝、藤島村を通過すると、岩崎城代の丹羽氏重が寡兵ながら敢て遮らうとして通過を邪魔した。勝入は岡崎が目的である、途中の小敵など顧みてはゐられない。隊を戒めて知らぬ顔して通り過ぎやうとしたが、彈丸が飛來して自分の馬を射たので、大に怒り、遂に片桐半右衛門、伊木忠次をして岩崎城を圍ませた。氏重は氏次の弟で、織田家に屬してゐた、この時僅に二百三十九人で城を守つてゐたので、圍みに遭つて支へることができず、たつた三時間で落されてしまつた、氏重はもとより士卒と共に討死したが、城兵は一人残らず死んでいつたといふことである、壯烈の狀が察せられる。

片桐等が岩崎城を攻めてをる間、勝入と長可は生牛原に憩ひ、秀政は金萩原に駐り、秀次は白山林に屯してゐた。然るに岩崎の攻圍の酣なるに當つて、秀次は突如敵の襲撃に遭つた。これは家康が既に八日に勝入の東進を確知し、酒井忠次、本多忠勝等を小牧に駐めて、信雄と共に勝入を追うて來たのであつた。時に秀次は朝餉を命じてゐたため、不意を打たれて隊伍を整へる隙もなく、あわてゝ迎へ戦つたが、これも三時間で敗走してしまつた。岩崎と一勝一敗その時をも同じうしたのであつた。この時秀次は敗退するに當つて馬を失つて路頭に艱み、悄然としてゐた。可兒才藏が馬に鞭つて來たので馬を借りたいと曰つたが、

「雨降りの傘でいゝぞ。」

と捨ぜりふして去つてしまつた。後日秀吉は、この役の賞罰を行つたが、その時秀次を罰し同時に才

藏をも罰した。才藏は稀れに見る勇士であつたが、捨ぜりふが、崇つて爾來日蔭ものとなつてしまつた。

七〇 小牧の對陣 (三)

白山林の警報が飛んで金萩原に至ると、秀政は急いで長久手に返し、檜根に陣して敵の來るを待つた。この時田中吉政が馳せ來たつて秀次の敗を告げ、即刻の赴援を請うた。秀政はそれを聞いて大に怒り、

「汝は三好の一隊長で、軍師ではないか。それがこゝに來るとは奇怪である。恐らく汝も逃走者の一人だらう。」

と大喝した。これには吉政も返す言葉がない。そのうちに敵が迫つて來たので、

「我が君に伺つて後戦はう。」

と曰つて這々の態で退散した、秀政は敵の逼るのを待つて一齊射撃を開始した。敵が秀政の銳鋒に避易して擧つて後退すると、秀次はこの時敗兵を集めて高根に陣し、秀政に協力したので、敵はいよゝく敗走しかけた。秀政は、時こそ來れ、と突進追撃して、敵を潰散させた。この時の敵は、大須賀康高、榊原康政、本多康重等の率ゐるところであつた。然も康政の如きは我が軍の追撃に遭つてしばゝ危く、馬上、刀を振つて後に薙ぎつゝ免れたといふことである。

勝入も亦秀次の敗報を手にして兵を整へ、長久手に背進したが、これより先家康は、檜根の敗報に

接して約一萬の軍を富士根、前山、佛根に配備して勝入の背進を待つてゐた。勝入は家康の旗が富士根に翻れるを見て、陣を岐阜嶽から蜻蛉狭間にかけて布いた。その兵九千にして、家康よりは三百少かつた。これが午前九時のことである。

時が移つて十時となるや、家康は前山に來り號令一下、戦を開き力めて之助、輝政二人共に及び長可の陣を攻め、激戦二時間の後に敗つた。味方の敗れたのは家康の智雄のためではなく、地の利が敵によかつたためである。長可は當年取つて二十七歳、矮少の猛者で、鬼武藏の名を畿内に振つてゐた。

當日は部下の士數十人を伴つて敵の本陣に邁進したが、敵は家康の討たれるを恐れ、雨の如くに彈丸を注いで拒いだ。長可は叱咤して、

「家康を追撃せよ。」

と曰つたが、矢丸ますゝ加はつて、さすがの部下もためらつてをる。長可これを見て大に怒り、槍を揮ひ、馬を躍らして敵陣に突進した。だが、脆くも一發の飛丸に噎されてしまつた。

勝入はどうしてをる。彼は初め敵の挑み來るを見て、左翼の伊井直政を佛根に脅威しやうとしたが成らず、長可を救はうとしてこれまた遂げず、そのうちに敵の襲撃を受けて大に苦闘したが、兵はみな散亡して兵卒の残るもの僅に百五十餘人に過ぎない。これをまとめ一團となり、以て陣を死守したが、敵の攻撃いよゝく急にして陣地は支へがたい、さらでも士卒は、またもや散亡するので、

「勝入、こゝに在り。我を捨てゝいづれに行くか。」

と叫んだが、逃げ足のついた士卒は顧みない。この時、敵の安藤直次なる者、不意に出で、勝入に肉

薄する。勝入、背を決し剣を按じて

「何をするか。」

と叱したが、直次はその聲を耳にせず、槍を揮つて一突きに突いた。永井直勝なる者また傍から飛びかゝつて勝入を刺した。かくて勝入も遂に首を直勝に授けた。

長可、勝入、既に殲れた。之助、輝政は如何、之助は朝來大に戦つたが、終に敗れて一旦退き、左右の者に勝入の安否を問うて事實を聞き、大に歎じて馬首を回し、敵中に躍り入つたが、安藤直次と戦つて落馬して、首を直次に授けた。輝政に至つては、齡なほ幼、左右の者に諮つて事を決するのみであつて、同じく勝入の安否を問うたが、左右の者に伴られ、父は退却したものと思ひ、道を訪ねて退却した。これ實に午後一時である。

七一 小牧の對陣 (四)

これより先、秀次は、秀政が敵を驅逐したその機會に乗じて悄然として退却し、稻葉を経て樂田に歸つた。秀政も亦勝入の赴援依頼を拒絶して、秀次の退路に従ひ、二重堀に歸つた。秀吉はこの時どうしたらう、如何なる策を施したか、白山林の敗報が飛んで樂田に落ちたのは正午であつて、實に長久手の戦の酣な時であつた。秀吉は直ちに赴援の計を立て、二萬の兵を率ゐて、午後の一時に樂田を發した。

秀吉が親發するや、本多忠勝は小牧に在つてその諜報を手にし、秀吉が大軍を率ゐて長久手に出た

ら、家康は寡兵である、敗戦は必定だ、如かず秀吉の行進を妨げて、家康をして長久手に勝を占めさせるにはと、秀吉の後を追うて時々發砲し、以て秀吉の行進を妨げた。秀吉はこれを見て全軍を戒め、斷じて顧ることをゆるさず、ひたすら前途を急いで龍泉寺に達したが、この時忠勝は一層秀吉に近づいて、大膽にも馬を庄内川に飲つた。秀吉はこれを見て左右のものに、

「あの馬に飲つてゐるものは鹿角の甲を被てゐる。必ず一方の將であらうが、勇ましいやつである、誰れかあのものゝ名を知らないか。」

と問ふ。稻葉一鐵が進み出て

「それがしが見知つてござる。あれは往年姉川の役で見た家康の家臣の本多平八でござる。」

といふと。秀吉感歎措かず、涙を流して曰く

「僅に五百の寡兵を以て我が大軍に當つたとてどうして萬一を僥倖し得ようぞ。それにもかゝはらず怯めず憶せずして我に肉薄するのは、我が行進を妨げてその主の家康に捷利を得させたい念願に外ならぬ。實にあつばれ忠信の士ではある。但し予にして幸ひ戰運に乗ずることを得るならば、たとひ家康に平八如きものが百人あるとも、勝利は結局この方に在る。決して彼れを討つてはならぬぞ。」

忠勝は徒に矢丸を放射しても無駄だと覺り、去つて家康を迎へやうとそこから直に小幡に向つた。時に家康は長久手に大捷して首級を検した上、内藤正成等の獻言に聽いて信雄と共に軍を收めて小幡城にゐるが、忠勝の來るを見て直に調を容れ、忠勝から始終の様子を聞き取つた。

一方、秀吉は龍泉寺に軍するや、直ちに堀尾吉晴、一柳直末、木村重茲の三隊を長久手に放つたが、吉晴等は印場に至ると、敵の落伍者が小幡を指して行くのに遭つたので、これを撃ち墮して還り、家康が小幡に入つたことを告げた。秀吉は直ちに小幡を攻めやうとしたが、稲葉一鐵、蒲生氏郷、蜂須賀家政等が異口同音に、

「古來攻城は申の刻(午後四時)を禁じてござる。明朝を待ちたまふとも遅くはござるまじ。」

と諫止したので、思ひ止まつた。この時に當つて小幡では、忠勝等が夜襲を献言したけれども、家康は聽かず、その夜ひそかに廻り道して小牧に歸つた。秀吉は斥候を放つてこれを知り、歎息して、

「穽にも網にもかゝらぬは家康ぢや。海内廣しといへども、彼の如きは無雙の名將である。しかし他日彼をして京都に伺候せしむるは萬事予の方寸に在る。」

と曰ひ、彼れも亦夜半、吉晴、忠興を殿とし、田中に退いて宿營し、翌十日に樂田に歸還した。

長久手の戦争は、世にこれを池田の大中入りといはれてをる。そして池田の敗績を評して、勝入は家康の敵ではない、初から相撲にならないといつてゐるが、著者の觀る所では、必ずしもさうではない。だが勝入は邁進することを知つて、後顧を忘れ、家康の追撃を思慮しなかつた。かくの如きは、分別の足らぬものといはねばならぬ。けだし勝入を能く知つてゐたのは秀吉である。さきに彼れが犬山を攻落するや、秀吉は書を尾藤知定に與へて、

「勝入、長可は由來敵を侮つて武勇に誇ること、常人に超へてゐる。汝善く諫めよ。」

といつた。勝入のさうした心は、長久手において著しく見える。これがまた敗因の一つではなかつた

らうか。但しその直接原因は、秀吉が赴援しなかつたのと、岩崎攻陥の結果、勞兵を用ふるに至つたことに在る。秀吉は赴援の途次、岩崎城攻陥の事を聞き、喜ぶかと思ひの外、大に憤つたことは、さすがに名將の明で無理ないことであつた。徳川義直は異常の士であつて、稍々この間の消息に通じてゐる。即ち『尾藩敬公事蹟』の一節に曰く、

敬公(義直)御代、武功も有りて古老の士平岩彌右衛門御前へ出で、御咄の御序に合點の參らざることあり、秀吉公の賤嶽合戦に味方の中川瀬兵衛討死を聞給ひて今日の軍には勝たりと御歡あり又長久手の合戦には池田勝入、森武藏父子勢ひ猛に罵り岩崎の城を攻落し丹羽勘助の一族悉く討死と申て味方の勝を告げれば今日の軍には負たると仰られし味方の討死をば勝たりと歡び味方の勝軍をば負たりと嘆かせ給ふ、そは如何なる事に候哉愚蒙の我等には合點の參らざる事と申上ければ、公暫く御思案有て、太閤の宣ひしこと理りぞかし、我東國の鹿狩をするに、其前外の山を狩り多くの鹿を仕留め、夫より東國を卷狩するに首尾調ひたることなし、是は謂れざる道草を打つ故なり、東國の山計り志して狩れば、約束の通り首尾して前後整ふ、左あれば瀬兵衛は味方なれば、約束の所にて討死しける故勝なりと悦ばれ、池田、森は當日の大切なる長久手を差置て約束爲さぬ岩崎を攻し故、一旦は大利を得ると雖も、士卒の疲れ長久手の用には立難きと思ひ量られ候故負なり、と宣ひしならむと御咄ありければ、彌右衛門も感じ入り奉りき。

敬公の評は至言である。これと同様のことは秀吉自身がすでに曰つてゐる、それは川角太閤記に大略記されてある。但し敬公が當日大切の長久手を差置きて云々といへることは妄斷である。勝入、如何に猛勇、猪突の士とはいへ、彼れ亦老練の將である。勞兵を用ふるの不利は兵家の常識として心得てをらぬ筈はない。もしあの時長久手の會戦を豫期してゐたら、彼は決して岩崎攻城などしなかつたら

う、長久手を豫期しなかつたればこそ、岩崎を攻めたのである。秀政の態度に關しては、『長久手合戦覺書』に記して曰く、

堀久太郎(秀政)三州勢の御先衆に打勝進で參候刻味方の新手に入替候へと不申、其競ひの儘にて御旗本(家康本隊)を一戦仕候はゞ、縦ひ戰疲れたる人數にて我備は敗軍致し候とも勝入、庄藏(長可)二備新手殘候間上方勢至終の勝に成べきを指向ふ敵を味方に譲り不戦して入替候は、己が初の勝利を無に成さじと存候故に候由、左候へば秀吉公へ誠の忠無御座候か、又不案内にて其利不存候歟

と。秀政が靈あつてこの言を聞いたら、果して能く恥ぢないでゐられるだらうか。要するに長久手敗績の主因は、勞兵を用ひたことと、秀政の援けなかつたことに在つた。そして秀吉の目的は眼前の小利にはなく、終局の大捷に在つた。他日家康を洛陽に伺候せしむるは方寸の間にありと豪語して軒然としてゐたやうなことは、終局の大捷を必期してゐたからではなかつたか。氣宇既に家康を呑んでゐた、勝算は戰の外にあつた。且つ士將の勝れてゐるものを見ると、敵味方を論ぜずして、それを賞愛するやうなことは家康などの到底及ぶところではない。著者は嘗て秀吉が勝入の母妻を慰めた手紙を見た。それは『池田家譜集成』に載つてゐるが、秀吉の面目が躍如としてゐるからこゝに引用する。今度勝入親子(儀)、中々申ばかり御座なく候、それ様御ちからおとし、御しうたん、すいりやう申候われくも爰元まで罷いで、敵あい(間)十町十五町にとりやい候、ゆへにおいておやこ(親子即ち勝入之助)の人、ふりよのぎ、我々ちからおとし申事、かずかぎりも御座なく候三左(輝政)殿藤三郎(長吉)殿兩人何事も御座なく、我等一入なげきの中の悦とは此事にて候、兩人せめて取たて候て、我勝入の御ほうじをも、おくり申べくと、まんぞくつかまつる事

一それ様とほう御座あるまじきとぞんじ候て、是のみばかり、あんじ申し候、せひとも、かを(顔)御出し候て兩人の子ども衆、とりたちの御きもいられ(肝煎)候て、我勝入おや子の、とむらいになり申べく候まゝ、是非ともたのみ申あい候、御女ほう衆も、ちからつけ給候べく候事

一勝入を見まいらせ候、とおぼしめし候て、ちくぜんの守(秀吉)を御らんじ候はゞ、なにやうにも御ちそう申ものまいりをもさせられ候やうに、いたし候べく候まゝ、ものをもきこしめし、身がんでう(頑丈)になされ給候べく候

一あさの(淺野)彌兵へに申ふくめ、御見まひにまいらせ候、我々まいり候て申たく候へども、唯今のてまへのぎにて候あいだ、さんじ不申候、こゝもとひまをあげ御見まいにまひり、そのとき勝入おや子、此あいだ御ねんごろのぎども、せめて御物がたり申候べく候、なにかにつけ、それ様御心てい、すいりやう申候て、御いとをしくぞんじ候、かずく御女ほう衆へも、このよし申したく、孫七郎(秀次)參らせ候、そこもとしたんくさわぎ候はんとぞんじ、御城の留守いに、つかわし參らせ候、孫七郎めも、いのちたすかりせめて三ざどのを、とぶらいのたりに、なり候はんとぞんじ、御嬉しく思ひ參らせ候、くわしくは彌兵へ申候べく候

卯月十一日

ひてよし

大御ち(乳)參る人々 申給へ

何といふ懃々懇々の文面であらう。實に遺憾なき一場の情話ではある。この心があつてこそ、百士萬卒をして快くその屍を戰場に暴させることができるのである。

七二 小牧の對陣 (五)

秀吉は小幡で家康を逸して、樂田に歸り、壘を増築し、防備を嚴にし、對戰の機會を待つたが、機